仙台市文化財調査報告書第345集

山口遺跡他

発掘調査報告書

山口遺跡第17、18次・陸奥国分尼寺跡第12次
四郎丸館跡第３次・富沢遺跡第142次
沖野城跡第４次・小鶴城跡第３次・与兵衛沼窯跡

２００９年３月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第345集

山口遺跡他

発掘調査報告書

山口遺跡第17、18次・陸奥国分尼寺跡第12次
四郎丸館跡第３次・富沢遺跡第142次
沖野城跡第４次・小鶴城跡第３次・与兵衛沼窯跡

２００９年３月

仙台市教育委員会

序　　文

仙台市は「杜の都・仙台」という愛称で広く親しまれ、四季折々の豊かな自然にあふれる仙台の風景は、私たち市民の誇りであると同時に将来へ守るべき大切な財産であります。

この仙台市の素晴らしい自然・風景と同様に、私たち市民の誇りであり大切な財産の一つに、悠久の歴史に育まれ守れてきた文化遺産の存在が挙げられます。実は、仙台市内には現在約800ヵ所もの遺跡が確認されております。これらの埋蔵文化財は、これまでの大きな時の流れの中でその存在価値を高めるとともに、現在においては各種開発事業によって絶えず破壊・消滅の恐れにさらされています。当教育委員会としましては、皆様のご理解とご協力を賜りながら、これらの貴重な文化財を保存し、次世代へと継承していくことに日々努めております。

本報告書には、各種開発に先立ち、平成19年度に発掘調査を実施した山口遺跡の他、平成20年度に発掘調査を実施した陸奥国分尼寺跡、四郎丸館跡、富沢遺跡、沖野城跡、小鶴城跡、与兵衛沼窯跡の調査結果を収録しております。

先人達の遺した貴重な文化遺産を保護し、保存活用を図りつつ未来へと継承していくことは、現代に生きる私たち市民の大事な仕事であると思います。つきましては、本報告書が、学術研究のみならず学校教育や生涯学習などのあらゆる場面で活用され、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査並びに報告書刊行に際しましてご協力、ご助言をいただきました多くの方々に、心より深く感謝申し上げます。

平成21年３月

仙台市教育委員会
教育長　荒　井　　崇

例　　言

1．本書は、仙台市教育委員会により、平成19年度に実施した個人住宅建設に伴う山口遺跡第17・18次と平成20年度に実施した民間開発事業に伴う陸奥国分尼寺跡第12次、四郎丸館跡第３次、富沢遺跡第142次、沖野城跡第４次、小鶴城跡第３次及び仙台市公園整備に伴う与兵衛沼窯跡隣接地の発掘調査報告書の合本である。

個人住宅建設にかかわる調査は公費負担、また民間開発事業にかかわる調査は事業者負担により実施した。

2．本書の執筆・編集は、仙台市教育委員会文化財課調査係の担当調査員の協議のもとに主濱光朗がとりまとめ、次のように分担して行った。

主　　事　鈴木　隆　：小鶴城跡第３次

主　　事　加藤　隆則：山口遺跡第17・18次、陸奥国分尼寺跡第12次

主　　事　森田　義史：沖野城跡第４次

主　　事　大久保弥生：与兵衛沼窯跡隣接地

文化財教諭　佐藤　正弥：四郎丸館跡第３次

文化財教諭　熊谷　敏哉：富沢遺跡第142次

3．遺物実測やトレース等の整理作業は、主に仙台市向田文化財整理収蔵室の作業員が行った。

4．本書に掲載した陶器・磁器に関する産地及び年代の所見は、文化財課仙台城史跡調査室の佐藤洋主査によるものである。

5．本書にかかわる遺物・写真・実測図面等の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

6．本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1976）に準拠した。

7．断面図・平面図の標高値は、海抜高度を示している。

8．遺物図版の縮尺は、任意とする。

9．遺構は種別ごとに次の略号を用いた。

SI：竪穴住居跡、竪穴遺構　SD：溝跡　SK：土坑

SE：井戸跡　P：ピット　SX：性格不明遺構

10．遺物の登録は、以下の分類と略号を用いた。

A：縄文土器　B：弥生土器　C：土師器（非ロクロ）　D：土師器（ロクロ）

E：須恵器　F：丸瓦　G：平瓦　I：陶器　J：磁器　K：石器・石製品

L：木製品・杭材　N：金属製品　P：土製品

11．遺物観察表のカッコ内の法量のうち、器高は残存値を、また口径及び底径は復元値を示している。

12．本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田1980）は、「十和田a（To－a)」を示し、降下年代は現在、西暦915年初夏とされている。

庄子貞雄・山田一郎　1980「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城－昭和54年度発掘調査概報－』宮城県多賀城跡調査研究所

目　　次

序文
例言
目次

Ⅰ　山口遺跡第17次発掘調査報告書……1
1　調査要項……1
2　調査に至る経過と調査方法……1
3　遺跡の位置と環境……1
4　基本層序……1
5　発見遺構と出土遺物……1

Ⅱ　山口遺跡第18次発掘調査報告書
1　調査要項……13
2　調査に至る経過と調査方法……13
3　遺跡の位置と環境……13
4　基本層序……13
5　発見遺構と出土遺物……13
6　まとめ……15

Ⅲ　陸奥国分尼寺跡第12次発掘調査報告書
1　調査要項……17
2　調査に至る経過と調査方法……17
3　遺跡の位置と環境……17
4　基本層序……19
5　発見遺構と出土遺物……22
6　まとめ……34

Ⅳ　四郎丸館跡第３次発掘調査報告書
1　調査要項……47
2　調査に至る経過と調査方法……47
3　遺跡の位置と環境……47
4　基本層序……48
5　発見遺構と出土遺物……48
6　まとめ……55

Ⅴ　富沢遺跡第142次発掘調査報告書

1　調査要項……66
2　調査に至る経過と調査方法……66
3　遺跡の位置と環境……66
4　基本層序……68
5　発見遺構と出土遺物……69
6　まとめ……73

Ⅵ　沖野城跡第４次発掘調査報告書

1　調査要項……76
2　調査に至る経過と調査方法……76
3　遺跡の位置と環境……77
4　基本層序……77
5　発見遺構と出土遺物……78
6　まとめ……78

Ⅶ　小鶴城跡第３次発掘調査報告書

1　調査要項……82
2　調査に至る経過と調査方法……82
3　遺跡の位置と環境……83
4　基本層序……83
5　発見遺構と出土遺物……83
6　まとめ……84

Ⅷ　与兵衛沼窯跡隣接地試掘調査報告書

1　調査要項……86
2　調査に至る経過と調査方法……86
3　遺跡の位置と環境……86
4　調査の概要……87

Ⅰ　山口遺跡第17次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　山口遺跡（宮城県遺跡番号01178）
調 査 地 点　仙台市太白区富沢３－103－57
調 査 期 間　平成19年11月26日～11月30日
調査対象面積　103.24㎡
調 査 面 積　約24㎡
調 査 原 因　個人住宅建設工事
調 査 主 体　仙台市教育委員会
調 査 担 当　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　主事　鈴木　隆　　主事　加藤　隆則　　文化財教諭　工藤慶次郎　　臨時職員　森田　賢司

2　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成19年５月18日付けで地権者より提出された、個人住宅の建築工事に係る発掘届（H19教生文第２－190号）に基づき実施した。確認調査は平成19年11月26日に着手し、遺構が検出されたため引き続き本調査を実施した。調査区は東西５ｍ×南北４ｍに設定した。重機により盛土からⅣ層まで掘削し、Ｖa層上面で人力により遺構検出作業を実施した。随時写真記録を行い、平面図・断面図を作成した。SD２溝跡は東側へ広がっていたため一部調査区を拡張している。また、Ｖa層上面の調査終了後、調査区各辺を後退させ下層の調査を実施し、Ⅵ層上面とⅨ層上面で遺構を検出した。これより下層は、東西２ｍ×南北0.8mの範囲を重機掘削し、下層の土層堆積状況を確認し調査を終了した。

なお、今調査は第18次調査と並行して調査を進めたため、遺構名、基本層は両地点で統一して付している。また、遺構の所属年代等についても第18次調査の「６　まとめ」(P15）に記した。

3　遺跡の位置と環境

山口遺跡は名取川と笊川によって形成された自然堤防から、北に広がる後背湿地にかけて立地する。標高は約11～14mで、遺跡の広がりは東西約570m、南北約430m程である。今回調査地点は市営地下鉄富沢駅の西方750mにあり、遺跡範囲の西側に位置している。これまでの調査で、自然堤防を居住域、後背湿地を生産域とする平安時代の集落の一部が発見された。生産域では灰白色火山灰降下直前の条里型土地割の水田跡が見つかっている（田中・1984）。

4　基本層序

第17・18次調査の基本層は、盛土下に15層を確認した。Ｖa層上面、Ⅵ層上面、Ⅸ層上面が遺構確認面である。

5　発見遺構と出土遺物

①Ｖa層上面検出遺構

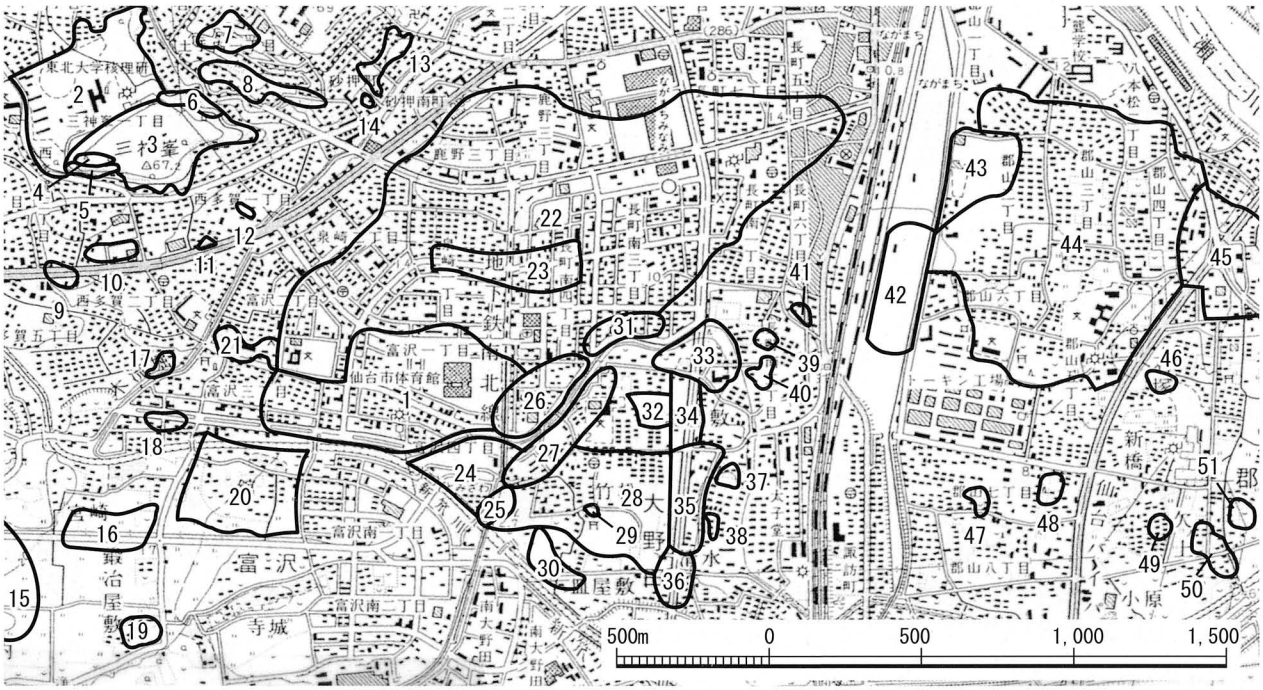
１）溝跡

SD１溝跡　調査区北側のＶa層上面で検出した。東側でＳＤ２溝跡と重複し、本遺構の方が古い。北側および東西方向は調査区域外に延びているため、溝幅および長さは不明である。底面は一部が検出された。確認面から最深部

の深さは93cm である。堆積土は２層確認された。ともに鉄分を多く含んでいる。調査区中央部の底面では木組みを検出した。板材を溝に直行するように並べ、杭材を打ち込み固定している。

東側隣接地である第18次調査地点でも本遺構の延長と考えられる溝跡が検出されている(「Ⅱ　山口遺跡第18次発掘調査報告書参照」)。両地点を併せた溝跡の検出長は22.3mである。

遺物は、１層より、18世紀代の肥前染付けの徳利破片１点、鉄釘１点、煙管１点が出土した。いずれも堆積層上位



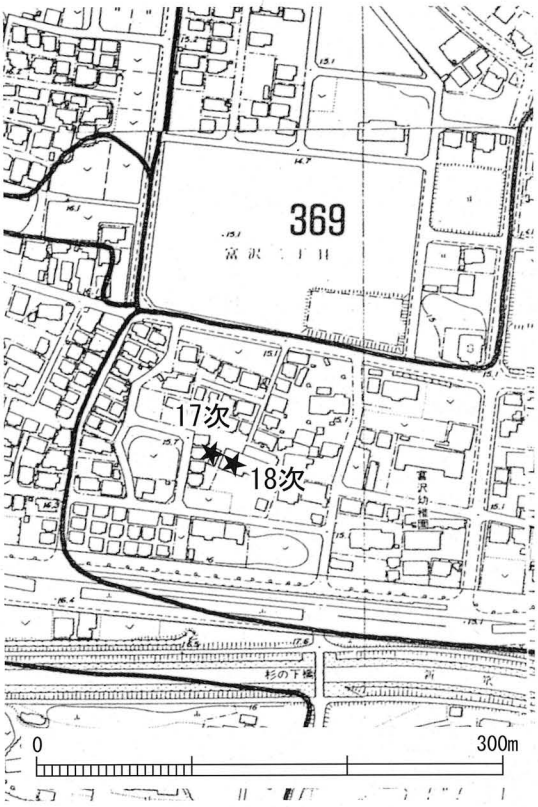
番号	遺　跡　名	種　　別	立　　地	時　　代	番号	遺　跡　名	種　　別	立　　地	時　　代
1	山口遺跡	集落、水田	自然堤防、後背湿地	縄文早・中～晩、弥生中、古墳、奈良、平安、中世	26	下ノ内浦遺跡	集落、水田	自然堤防	縄文早・前・後、弥生、古墳、奈良、平安、中世
2	芦ノ口遺跡	集落	丘陵	縄文早、弥生、平安	27	六反田遺跡	集落	自然堤防	縄文中～晩、弥生、古墳、奈良、平安、中世
3	三神峯遺跡	集落	丘陵	縄文前・中、平安	28	大野田古墳群	円墳	自然堤防	古墳
4	三神峯古墳群	円墳	丘陵	古墳後	29	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳中
5	富沢窯跡	窯跡	丘陵南斜面	古墳、平安、奈良	30	伊古田B遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
6	土手内横穴墓群A地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳末	31	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳、平安
7	土手内遺跡	集落	丘陵	縄文、弥生、古墳、奈良、平安	32	袋前遺跡	集落	自然堤防	縄文、奈良、平安
8	土手内横穴墓群B地点/土手内窯跡	横穴墓/窯跡	丘陵斜面	古墳末・古墳後、奈良	33	元袋遺跡	集落、水田	自然堤防	弥生、奈良、平安、中世、近世
9	西台窯跡	窯跡	丘陵麓	奈良、平安？	34	大野田遺跡	祭祀、集落	自然堤防	縄文後、弥生中、古墳、奈良、平安
10	原遺跡	散布地	丘陵麓	弥生、古墳、平安	35	王ノ壇遺跡	集落、屋敷	自然堤防	縄文後、弥生、古墳、奈良、平安、中世
11	原東遺跡	散布地	丘陵麓	古墳、奈良、平安	36	皿屋敷遺跡	集落、屋敷	自然堤防	奈良、平安、中世
12	裏町東遺跡	散布地	丘陵麓	平安	37	北屋敷遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
13	砂押古墳	円墳	丘陵麓	古墳	38	長町清水遺跡	散布地	自然堤防	古墳
14	砂押屋敷遺跡	散布地	丘陵麓	奈良、平安	39	長町南遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
15	南ノ東遺跡	散布地	自然堤防	弥生、平安	40	新田遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
16	鍛治屋敷A遺跡	集落	自然堤防	縄文、奈良、平安	41	長町六丁目遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
17	富沢上ノ台遺跡	散布地	自然堤防	縄文、平安	42	長町駅東遺跡	集落	自然堤防	弥生、古墳末、奈良初
18	堀ノ内遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安	43	西台畑遺跡	包含地、甕棺墓	自然堤防	縄文、弥生中、古墳
19	鍛治屋敷B遺跡	散布地	自然堤防	縄文、奈良、平安	44	郡山遺跡	官衙、寺院、包含地	自然堤防	縄文後・晩、弥生中、古墳末、奈良初
20	富沢館跡	城館	自然堤防	中世	45	北目城跡	城館、集落、水田	自然堤防	縄文後、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世
21	富沢清水遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安	46	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
22	富沢遺跡	包含地、水田	後背湿地	後期旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世	47	的場遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
23	泉崎浦遺跡	集落、水田、墓地	自然堤防、後背湿地	縄文、弥生、古墳、平安、近世	48	籠ノ瀬遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
24	下ノ内遺跡	集落	自然堤防	縄文中～晩、弥生、古墳、奈良、平安、中世	49	欠ノ上Ⅰ遺跡	水田	後背湿地	古墳、奈良、平安、中世
25	伊古田遺跡	集落	自然堤防	縄文後、古墳、奈良、平安	50	欠ノ上Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

で出土した。18～19世紀前半のまとまった陶磁器を出土したＳＤ２溝跡に切られていることから、これに先行する時期である。

SD２溝跡　調査区東側のＶa層上面で検出した。北側でＳＤ１溝跡と重複し、本遺構の方が新しい。南北方向は調査区域外に延びている。北側では西壁上端に沿って人頭大の川原石が並ぶ。溝は幅90～110cm、深さ30cm の箱型に掘り込まれ、西側上部は緩やかに傾斜している。堆積土は単層でブロック状に堆積する。

遺物は、西側緩傾斜部の底面で人頭大の川原石に伴って、堆積土１層及び１層上面から陶器113点、磁器９点、瓦質土器２点、瓦片３点、木製品２点（下駄、盤）の他、植物遺存体が多量に出土した。また、平面的には南壁寄りの東西1.5m、南北１m程の範囲からまとまって出土した。



第２図　調査地点の位置

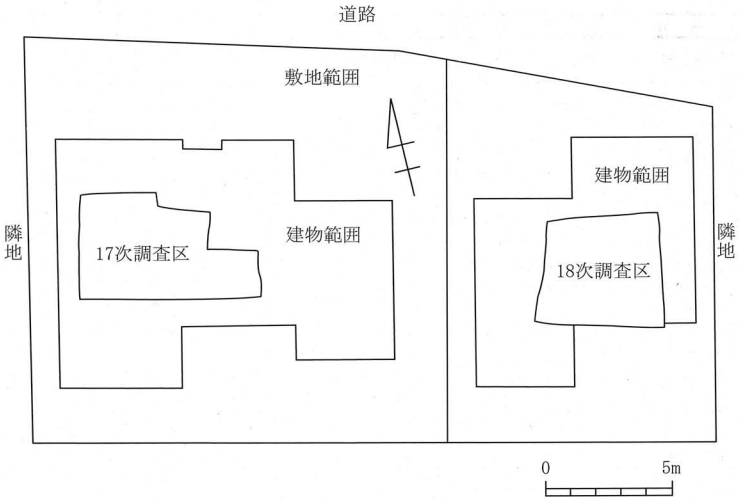
②Ⅵ層上面検出遺構

１）溝跡

SD３溝跡　調査区北側のⅥ層上面で検出した。上層検出のＳＤ１溝跡と重複する。ＳＤ１溝跡とは並行し、東側隣接地である第18次調査でも同じように検出されている。隣接地を含めた検出長は22.3mである。溝幅は北側がSD１溝跡に壊されているため不明、掘り込み面からの深さは20～25cmである。堆積土は単層で、基本層Ｖb層が入り込んでいる。出土遺物はないが、重複状況からＳＤ１溝跡に先行する時期である。

２）土坑

SK１土坑　調査区南西、Ⅵ層上面で検出した。西側は調査区域外に延びている。規模は、幅60cm、深さは５～10cmである。堆積土は単層で、基本層Ｖb層が入り込んでいる。時期はＳＤ３溝跡と同じ頃と考えられる。

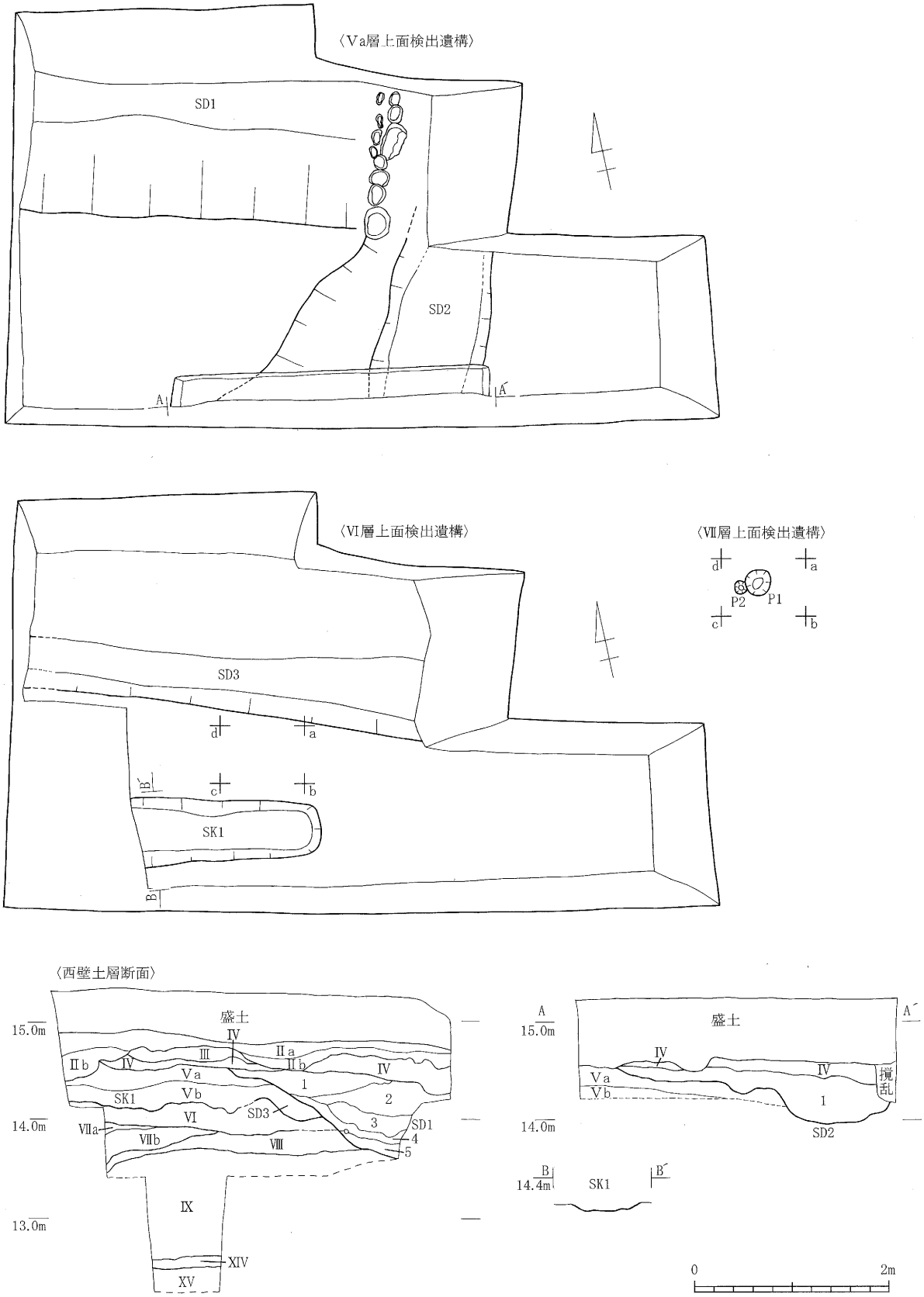


第３図　調査区配置図

③Ⅶ層上面検出遺構

１）ピット

調査区中央のⅦ層上面で２基検出した。規模（長軸×短軸）はＰ１が28×25cm、Ｐ２が15×15cmである。ともに柱痕は確認されず、堆積土は単層で基本層Ⅵ層に類似する土である。遺物は出土していない。


〈Va層上面検出遺構〉
SD1
SD2
A
A´
〈VI層上面検出遺構〉
SD3
SK1
B
B´
a
b
c
d
〈VII層上面検出遺構〉
P1
P2
〈西壁土層断面〉
15.0m
14.0m
13.0m
盛土
IV
III
IIa
IIb
Va
Vb
VI
VIIa
VIIb
VIII
IX
XIV
XV
SK1
SD3
SD1
1
2
3
4
5
14.4m
撹乱
SD2
0
2m

第４図　遺構平・断面図

基本層	土　色		土　性	備　考
Ⅱa	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト質砂	酸化鉄ブロックを少量含む。Ⅰb層ブロックをやや多量に含む。
Ⅱb	5Y5/2	灰オリーブ色	シルト質砂	酸化鉄ブロックを多量に含む。
Ⅲ	2.5Y4/3	オリーブ褐色	シルト質砂	2.5Y4/2暗灰黄色土ブロックを多量に含む。
Ⅳ	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂質シルト	
Va	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂質シルト	(＝近世の遺構確認面①) 炭化物粒を微量に含む。2.5Y4/2暗灰黄色土ブロックを少量含む。
Vb	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を少量含む。下位がやや乱れる。
Ⅵ	2.5Y5/3	黄褐色	シルト質砂	(＝近世の遺構確認面②) 酸化鉄を棒状に多量に含む。マンガンをやや多量に含む。
Ⅶa	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂質シルト	酸化鉄が集積する。
Ⅶb	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂質シルト	酸化鉄を棒状に多量に含む。炭化物粒を微量に含む。マンガンをやや多量に含む。下位に酸化鉄沈着。
Ⅷa	2.5Y5/3	黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を棒状に多量に含む。
Ⅸ	7.5Y4/1	灰色	細砂	上位に酸化鉄を棒状にやや多量に含む。炭化物粒を微量に含む。
ⅩⅣ	5Y3/1	オリーブ黒色	細砂	炭化物粒を微量に含む。Ⅸ層粘土をやや多量に含む。5～20mmの礫を微量に含む。
ⅩⅤ	5Y3/2	オリーブ黒色	粘土	炭化物粒を微量に含む。
層　位	土　色		土　性	備　考
SD1－1	10YR3/3	暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄、マンガン粒を非常に多量に含む。グライ化。
2	2.5GY2/1	黒色	粘土	2.5GY2/1粘土ブロック、炭化物を多量に含む。酸化鉄、砂粒を少量含む。
SD2－1	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	Ⅵ層をブロック状に多量に含む。10YR3/1黒褐色土ブロックを上位にやや多量に含む。炭化物ブロックを少量含む。西側に10YR3/1褐色土ブロックややを多量に含む。
SD3－1	2.5YR3/3	暗オリーブ褐色	粘土質シルト	Vbと同一。
SK1－1	2.5YR3/3	オリーブ褐色	粘土質シルト	酸化鉄を粒状に少量含む。酸化マンガンをやや多量に含む。
P1・2－1	2.5Y5/3	黄褐色	シルト質砂	酸化鉄を棒状に多量に含む。マンガンをやや多量に含む。

※基本層は山口遺跡第18次調査と共通である。

第１表・土層観察表

④出土遺物

今回の調査では、陶器115点、磁器12点、瓦質土器２点、瓦片３点、木製品２点、金属製品２点、土製品１点が出土した。陶器２点、磁器２点が基本層Ⅰ層から、磁器１点がSD１溝跡から出土した他は、すべてSD２溝跡からの出土遺物である。

ここでは、特にSD２溝跡からまとまって出土した陶器113点、磁器9点についてその概略を述べる。なお、出土点数については、接合したもの、接合はしていないが明らかに同一個体と判断されるもの、そして接合せず同一個体とも判断できない破片資料についてそれぞれ１点として算出した。

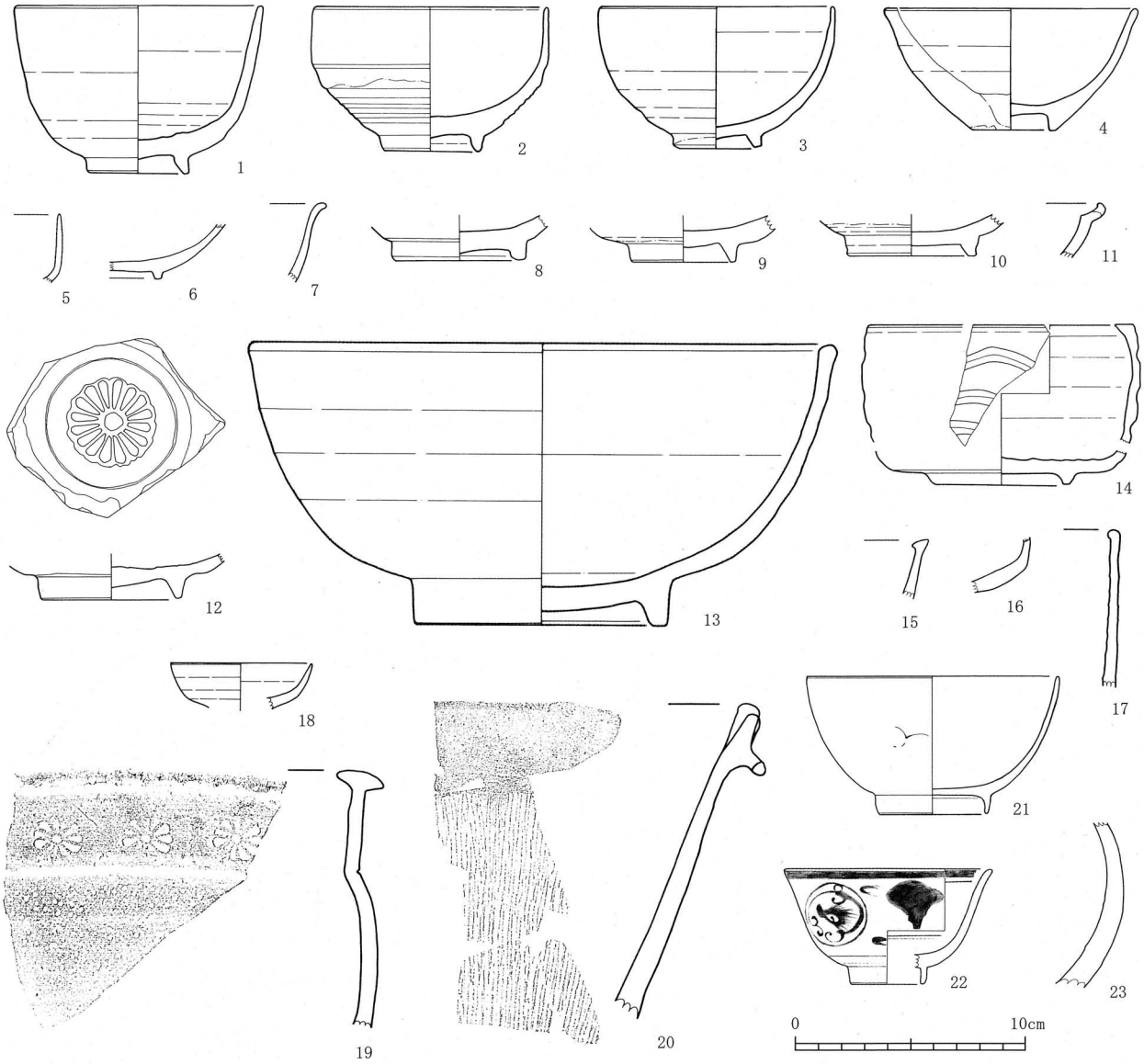
まず、製作年代別の割合についてみると、陶器では、18世紀が113点中93点で全体の82％を占めるが、17世紀の陶器も３点出土している。磁器も同様の傾向を示し、18世紀が９点中２点で最も多い。また、陶器、磁器共に少量ながら19世紀前半の資料が含まれることから、この頃に一括廃棄されたものと考えられる。

次に産地別の割合では、大堀相馬産が73点で陶器全体の65％を占め、他、小野相馬産20点、京・信楽系４点、唐津産３点、堤産２点、美濃産１点と続く。少数ではあるが、比較的高価な京・信楽系碗（18世紀）や唐津産碗・鉢（17世紀）がみられる点は、使用者の生活水準を知る上で注目される。また、仙台市内出土の当該期の陶器では、量的に大堀相馬産が圧倒的な優位性を示すが、小野相馬産の碗や大形鉢、香炉等が比較的まとまって出土した点も本資料の特徴として指摘できる。

器種組成の点では、陶器、磁器ともに碗が最も多く、特に陶器では93点で82％を占める。その他陶器では、擂鉢７点、鉢３点、皿３点、香炉３点、灰吹１点、仏飯器１点が出土している。磁器では、碗５点の他、皿２点、鉢１点、徳利１点が出土している。器種の多様さは特に陶器で目立つが、碗、鉢、擂鉢以外の器種が全て大堀相馬産、小野相馬産である点は、特に18世紀代における相馬産陶器の仙台藩内における流通・販売力の強さを示しているものと考えられる。

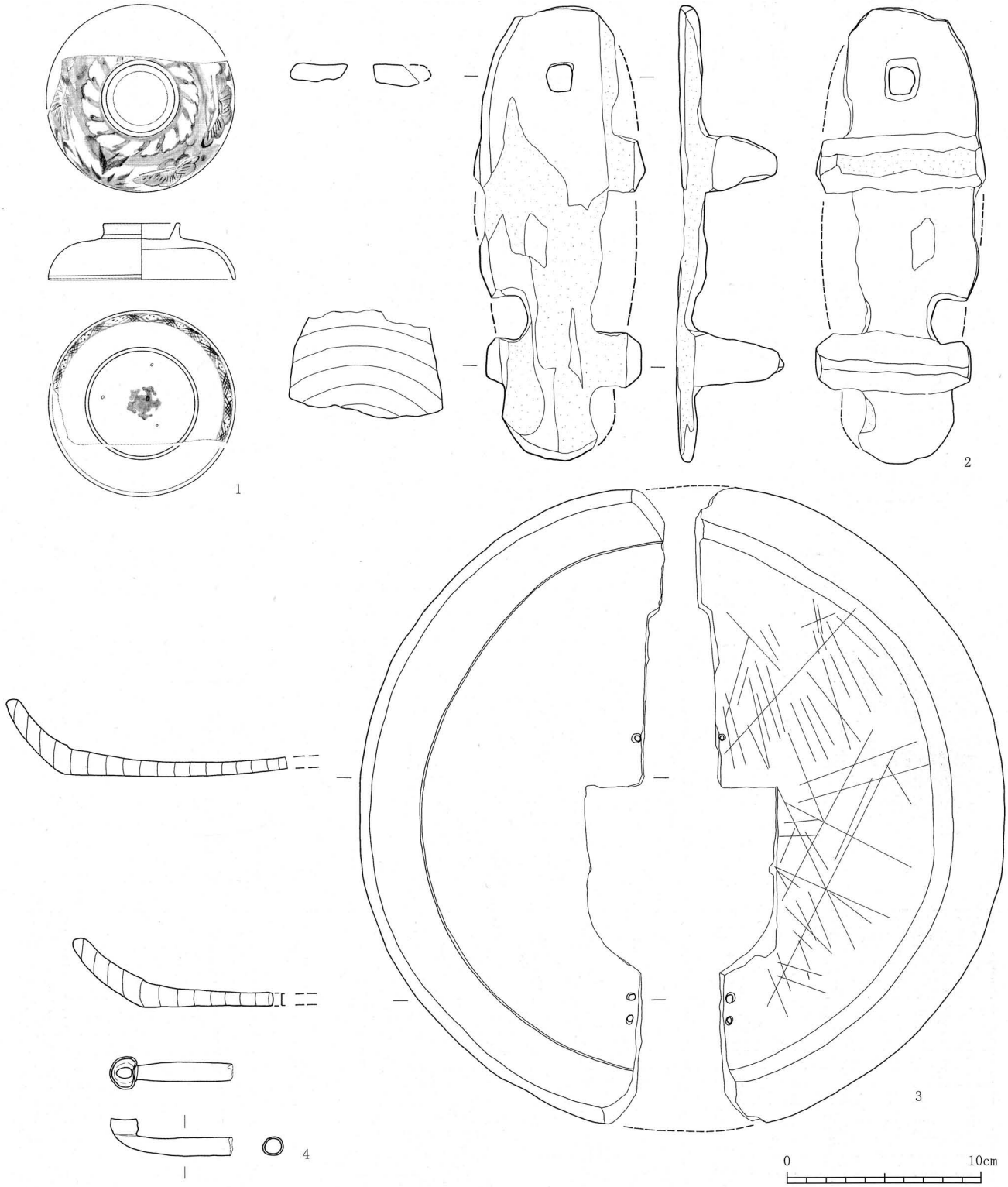
＜参考文献＞

田中則和　1984「山口遺跡Ⅱ　－仙台市体育館建設予定地－」仙台市文化財調査報告書第61集



図中番号	登録番号	出土地点			分類		法量（cm・g）			特徴・備考（産地・釉薬・文様・時期・その他）	写真図版
		基本層	遺構名	遺構層	種別	器種	器高・長	口径・幅	底径・重		
1	I−3		SD2	1層上面	陶器	碗	7.3	10.6	6.4	小野相馬　灰釉　18c　見込み目跡3つ	4−1
2	I−9		SD2	1層上面	陶器	碗	6.3	10.0	4.4	大堀相馬　灰釉・鉄釉掛け分け碗　18c	4−2
3	I−21		SD2		陶器	碗	6.1	10.0	3.2	大堀相馬　灰釉　18c	4−3
4	I−22		SD2		陶器	碗	5.3	10.8	3.9	大堀相馬　鉄釉・灰釉掛け分け碗　18c	4−4
5	I−11		SD2	1層上面	陶器	碗	−	−	−	京・信楽系　色絵（赤、青、緑）　18c	4−7
6	I−34		SD2	1層上面	陶器	碗	−	−	−	京・信楽系　色絵（青）　18c	4−6
7	I−18		SD2		陶器	碗	−	−	−	大堀相馬　白濁釉　19c前　端反碗	4−5
8	I−5		SD2	1層	陶器	碗	(2.0)	−	5.6	唐津　鉄釉　17c	4−8
9	I−26		SD2		陶器	碗	(1.5)	−	4.4	唐津　長石釉　17c	4−9
10	I−25		SD2		陶器	碗	(1.5)	−	5.4	美濃　灰釉　17〜18c	4−10
11	I−12		SD2	1層上面	陶器	皿	−	−	−	小野相馬　灰釉　18c	4−12
12	I−8		SD2	1層	陶器	皿	(2.0)	−	6.1	小野相馬　見込み蛇ノ目釉剥ぎ、菊陰花文　18c	4−11
13	I−23		SD2		陶器	鉢	(12.3)	(25.3)	10.9	小野相馬　灰釉　18c　大型鉢　見込み目跡3つ	4−14
14	I−4		SD2	1層	陶器	香炉	−	(11.5)	5.9	小野相馬？　鉄釉　18c	5−1
15	I−13		SD2	1層上面	陶器	香炉	−	−	−	大堀相馬　灰釉　18〜19c前	4−16
16	I−15		SD2	1層上面	陶器	香炉	−	−	−	小野相馬　灰釉　18c	4−17
17	I−1		SD2	1層上面	陶器	灰吹	−	−	−	大堀相馬　灰釉　18c　口唇部に敲打痕あり	4−15
18	I−6		SD2	1層	陶器	仏飯器？	(2.5)	(6.0)	−	大堀相馬　鉄釉　18c	5−2
19	I−16		SD2	1層	瓦質土器	風炉？	−	−	−	産地不明　頚部に菊花文、体部に列点文　近世	5−6
20	I−10		SD2	1層上面	陶器	擂鉢	−	−	−	堤？　鉄釉　18〜19c　胎土赤い	5−4
21	I−17		SD2		陶器	碗	6.0	(11.0)	4.7	京・信楽系？　色絵（赤）　18c	5−7
22	J−1		SD2	1層上面	磁器	碗	(5.1)	(9.0)	(3.2)	肥前　染付　丸文　19c前　端反碗	5−8
23	J−3		SD2		磁器	徳利	−	−	−	肥前　染付　17〜18c	5−9
	I−7		SD2	1層	陶器	鉢	−	−	−	唐津　象嵌　17c後？	4−13
	I−19		SD2		陶器	擂鉢	−	−	−	堤？　鉄釉　18〜19c　胎土赤い	5−3
	I−24		SD2		陶器	擂鉢	−	−	−	産地不明　鉄釉　18〜19c　胎土黒い	5−5

第５図　出土遺物１



図中番号	登録番号	出土地点			分類		法量（cm・g）				特徴・備考（産地・釉薬・文様・時期・その他）	写真図版
		基本層	遺構名	遺構層	種別	器種	器高・長	口径・幅	体部径・厚	底径・重		
1	J−2		SD2	1層上面	磁器	碗蓋	2.9	9.6	−	4.0	肥前　染付　竹文・松文　見込みコンニャク印判（五弁花）	5−10
2	L−1		SD2		木製品	下駄	23.5	8.7	5.5	−	丸形連歯	5−11
3	L−2		SD2		木製品	盆	4.0	(33.0)	−	(27.4)	底面に多数の切傷あり　穿孔3箇所（修復痕？）柾目材	5−12
4	N−1		SD1	1層	金属製品	煙管	(5.3)	−	1.0	−	雁首のみ　火皿径1.6	5−13
	P−1	Ⅰ層			土製品	土人形	−	−	−	−	犬か猫の脚部？	5−14

第６図　出土遺物２

1　遺構完掘状況（東から）

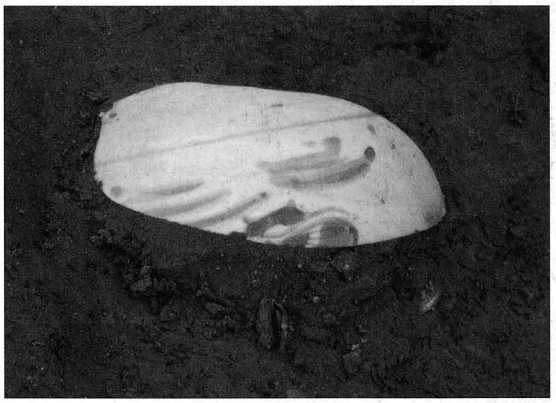
2　調査終了状況（東から）

3　調査区西壁断面

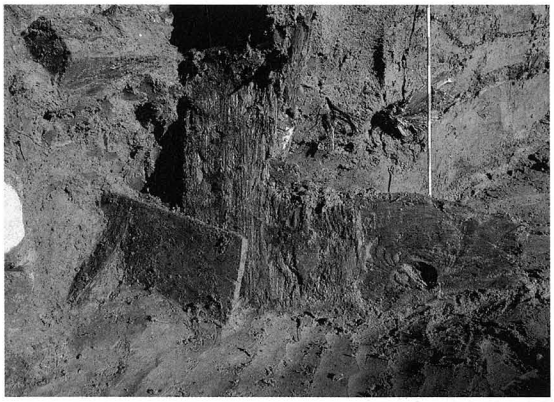
図版１　遺構完掘状況、調査区断面

1　SD1・3溝跡西壁断面

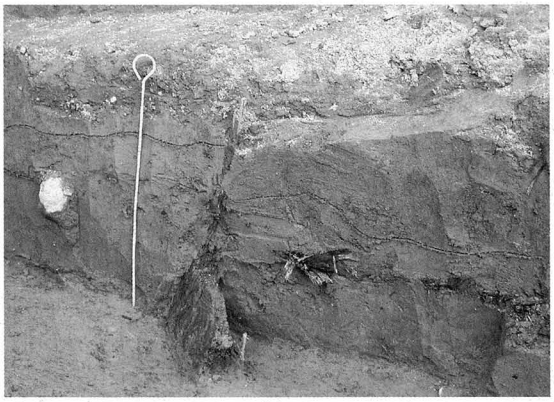
2　木材出土状況（北西から）



3　染付徳利（第５図23）出土状況（東から）



4　木組み検出状況（南西から）



5　木組み検出状況（南東から）

図版２　SD１溝跡

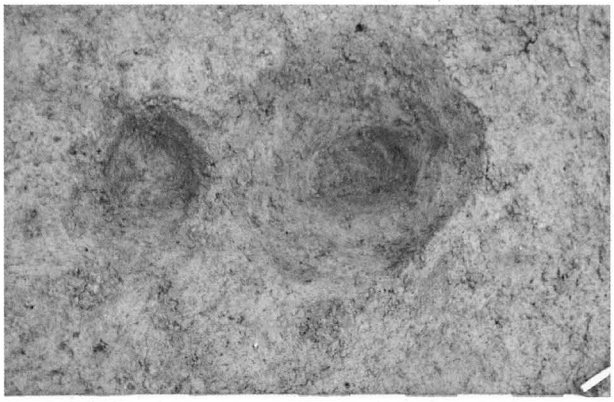
1　SD２溝跡検出状況（南から）

2　SD２溝跡完掘状況（南から）

3　SD２溝跡南壁断面

4　SD２溝跡遺物出土状況（東から）

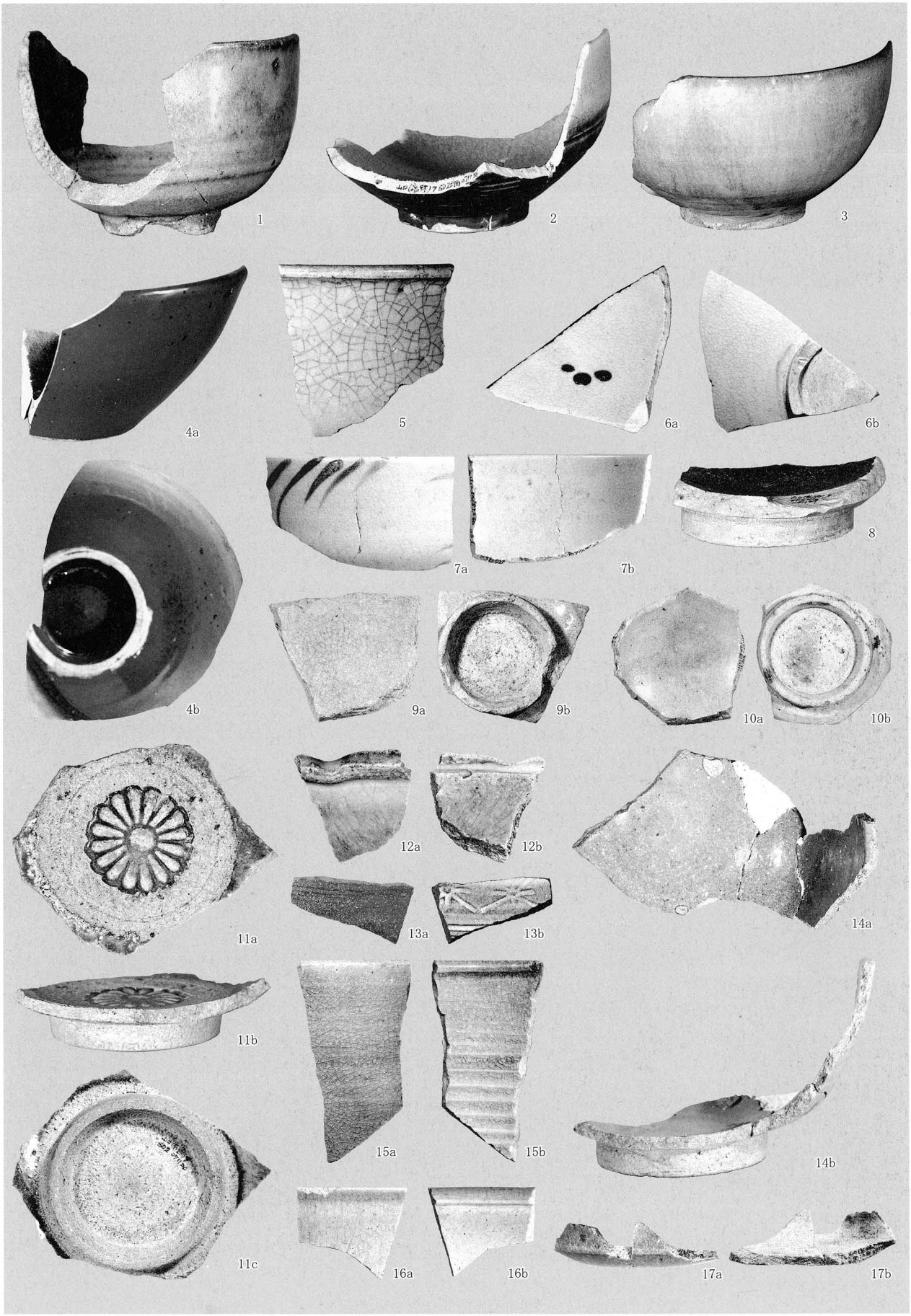
5　SK１土坑検出状況（南から）



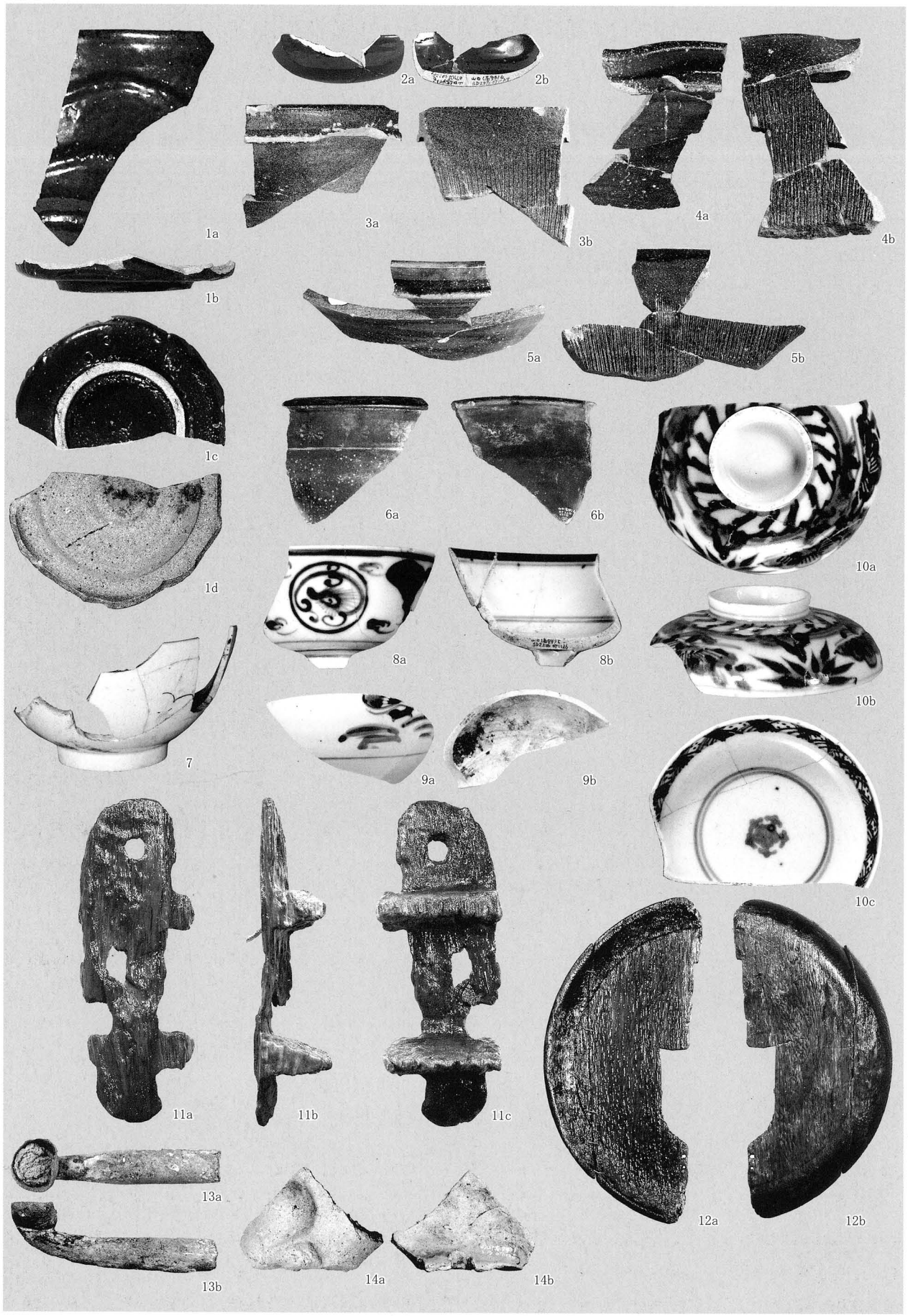
6　P１・２（南から）

7　下層調査地点（Ⅵ～Ⅻ層）（東から）

図版３　溝跡・土坑・ピット・基本層序


1
2
3
4a
5
6a
6b
4b
7a
7b
8
9a
9b
10a
10b
11a
12a
12b
13a
13b
14a
11b
15a
15b
14b
11c
16a
16b
17a
17b

図版４　出土遺物１


1a
1b
1c
1d
2a
2b
3a
3b
4a
4b
5a
5b
6a
6b
7
8a
8b
9a
9b
10a
10b
10c
11a
11b
11c
12a
12b
13a
13b
14a
14b

図版５　出土遺物２

Ⅱ　山口遺跡第18次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　山口遺跡（宮城県遺跡番号01178）
調 査 地 点　　仙台市太白区富沢3-103-57
調 査 期 間　　平成19年11月26日～11月30日
調査対象面積　　61.44㎡
調 査 面 積　　約25㎡
調 査 原 因　　個人住宅建設工事
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　　主事　鈴木　隆　　主事　加藤　隆則　　文化財教諭　工藤慶次郎　　臨時職員　森田　賢司

2　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成20年５月18日付けで地権者より提出された、個人住宅建築に係る発掘届(H20教生文第２－222)に基づき実施した。確認調査は平成19年11月26日に実施した。調査区は東西５ｍ×南北５ｍに設定した。地表下１ｍまでは調査区規模で重機掘削し、これ以下は調査区各辺を50cmほど後退させ、盛土およびⅠ層を掘削した。遺構検出面はⅥ層上面、Ⅸ層上面である。地表下２ｍ以下はさらに調査区を後退させ、バケット幅で下層の土層堆積状況を確認し調査を終了した。

なお、今調査は第17次調査と並行して調査を進めたため、遺構名、基本層は両地点で統一して付している。また、遺構の所属年代等についても本章でまとめて記した。

3　遺跡の位置と環境

今調査地点は遺跡範囲の西側に位置し、前章で扱った第17次調査の東側隣接地である。立地と環境および周辺の遺跡については、「Ⅴ　富沢遺跡第142次発掘調査報告書」を参照されたい。

4　基本層序

基本層は、盛土下に15層を確認した。今調査地点の遺構検出面はⅥ層上面、Ⅸ層上面であるが、西側隣接地との対応関係からⅡ～Ⅴ層は削平されたものと考えられる。

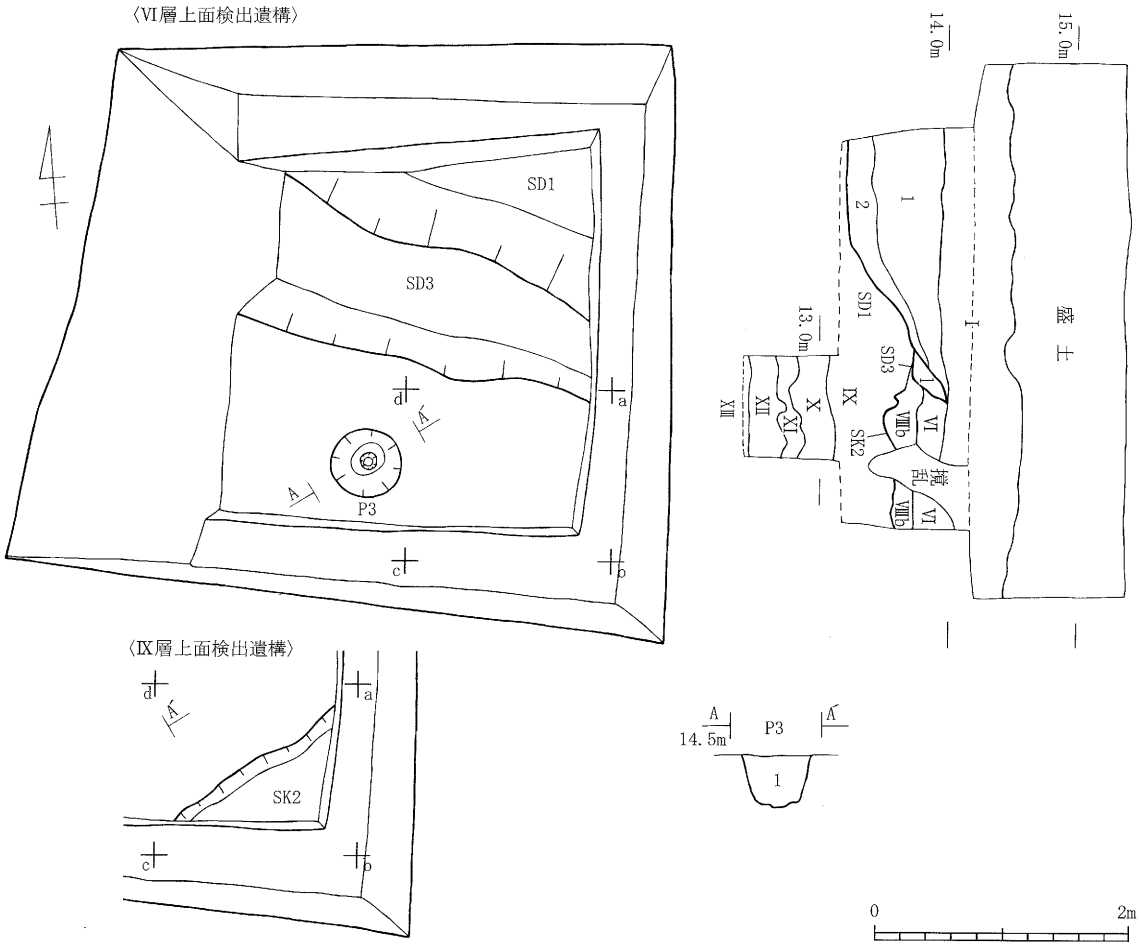
5　発見遺構と出土遺物

①Ⅵ層上面検出遺構

１）溝跡

SD１溝跡　調査区北側のⅥ層上面で検出した。南側でＳＤ３溝跡と重複し、本遺構の方が新しい。北側および東西両側は調査区域外に延びる。方向はＮ－65°－Ｗで、溝幅は不明である。底面は一部を検出した。確認面からの深さは70～75cmである。堆積層は２層で、1層は酸化鉄を多量に含むシルト質粘土で、２層は炭化物を多量に含む粘土である。遺物は出土していない。

SD３溝跡　調査区北側のⅥ層上面で検出した。ＳＤ１溝跡と重複し、本溝跡の方が古い。ＳＤ１溝跡と並行してお



基本層	土色		土性	備考
Ⅰ	10YR3/3	暗褐色	シルト質粘土	Ⅴ層ブロックを微量に含む。炭化物粒を微量に含む。
Ⅵ	10YR5/2	灰黄褐色	粘土	酸化鉄、マンガン粒を極多量に含む。炭化物ブロックを多量に含む。10YR7/2砂質シルトブロックを微量含む。
Ⅷb	10YR3/2	黒褐色	粘土	酸化鉄、マンガン粒を多量に含む。
Ⅸ	10YR3/2	黒褐色	粘土	酸化鉄、マンガン粒、炭化物粒、10YR4/2粘土ブロックを多量に含む。
Ⅹ	10YR3/4	暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄、マンガン粒、炭化物粒、10YR4/2粘土ブロックを多量に含む。砂粒を含む。
Ⅺ	10YR3/3	暗褐色	砂	酸化鉄、炭化物粒、5～50mmの小礫を多量に含む。
ⅩⅡ	10YR3/3	暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄、炭化物粒を多量に含む。特に上部に砂粒を多量に含む。
ⅩⅢ	10YR3/2	黒褐色	粘土	炭化物ブロックを多量に含む。
層位	土色		土性	備考
SD1－1	10YR3/3	暗褐色	シルト質粘土	酸化鉄、マンガン粒を非常に多量に含む。グライ化。
2	2.5GY2/1	黒色	粘土	炭化物を多量に含む。酸化鉄、砂粒を少量含む。2.5GY2/1粘土ブロックを多量に含む。
SD3－1	2.5YR3/3	オリーブ褐色	粘土	Ⅵ層ブロックを極多量に含む。酸化鉄を粒状に少量含む。酸化マンガンをやや多量に含む。
SK2－1	10YR3/2	黒褐色	粘土	酸化鉄、マンガン粒を多量に含む。
P3－1	10YR3/2	黒褐色	粘土	炭化物、砂粒を多量に含む。

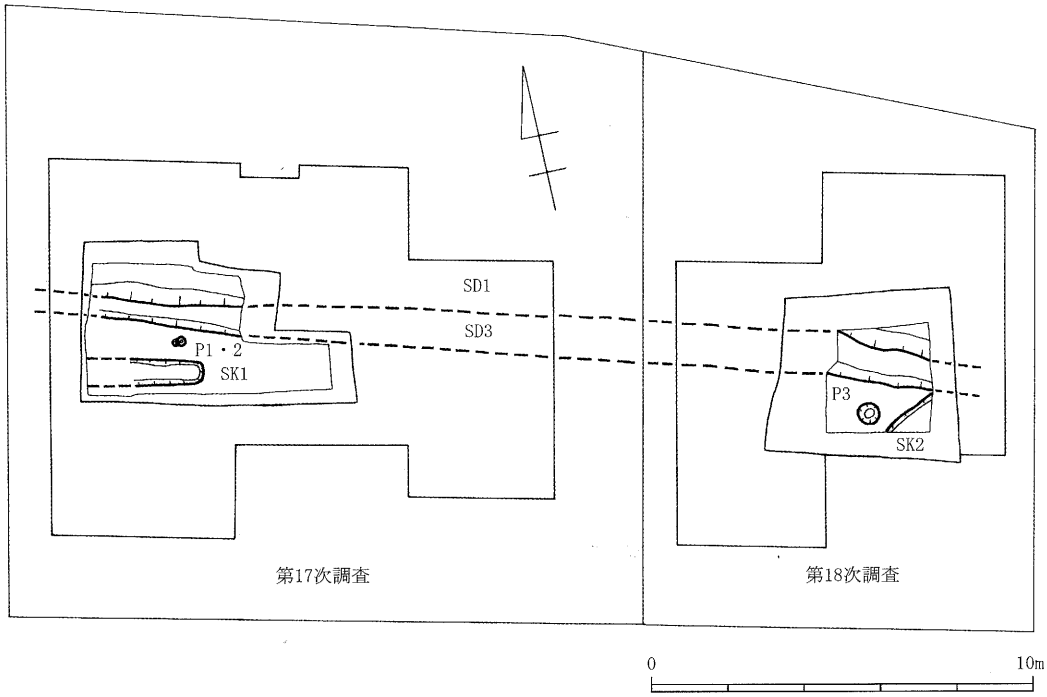
※基本層は山口遺跡第17次調査と共通である。

第７図　遺構平・断面図

り、西側隣接地でも検出されている。方向はＮ－64°－Ｗで、規模は北側がＳＤ１溝跡に壊されているため、溝幅は不明である。確認面から底面までの深さは25～30cmである。東側隣接地を含め、検出された長さは22.3mである。遺物は時期不明の陶器片１点、非ロクロ土師器片２点が出土したが、小片のため時期不明である。重複状況からＳＤ１溝跡に先行する時期である。

２）ピット

Ｐ３　調査区南側、Ⅵ層上面で検出した。規模（長軸×短軸×深さ）は55×54×41cm、堆積土は１層で底面には15×13×３cmの柱痕が認められる。遺物は近世陶器片１点、非ロクロ土師器片２点が出土したが、小片のため図示し得なかった。



第８図　第17・18次調査成果

②Ⅸ層上面検出遺構

１）土坑

SK２土坑　調査区南東、Ⅸ層上面で検出した。土坑としたが、自然地形の傾斜の可能性も考えられる。堆積土は単層で、基本土層のⅧb層が入り込む。遺物は時期不明の非ロクロ土師器片が１点出土した。

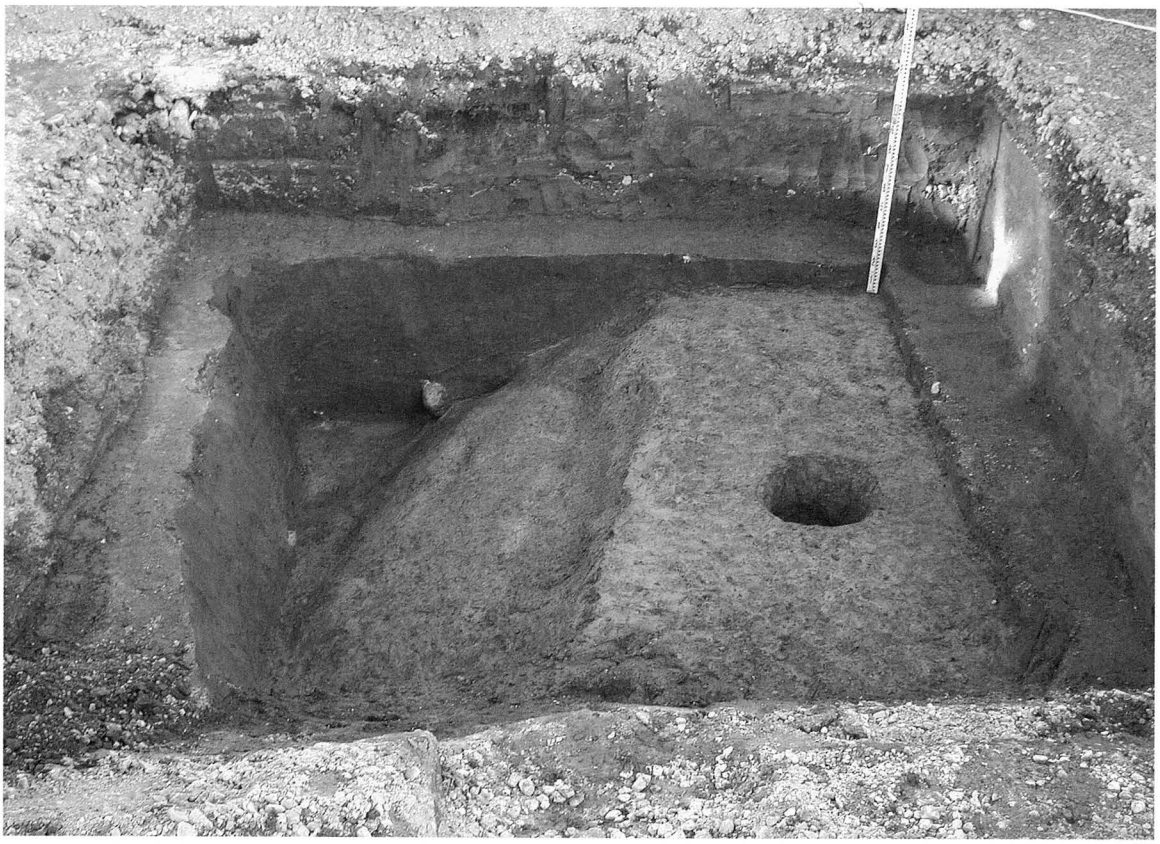
③出土遺物

遺物はⅥ層で土師器小片が１点出土した。細片のため時期は不明である。

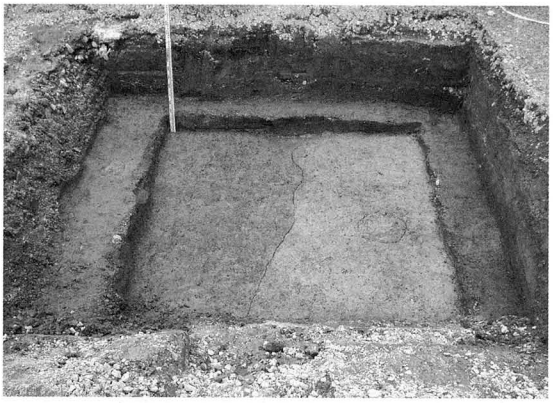
６　まとめ

山口遺跡第17次調査地点と第18次調査地点は遺跡範囲の西側に位置し、地点間の距離は15mと隣接している。第17次調査では、SD１溝跡、これよりも新しい南北方向に延びるSD２溝跡、またSD１溝跡の南側に並走するやや規模の小さいSD３溝跡を検出した。第18次調査でも同様に、SD１溝跡、SD３溝跡を検出し、平面位置や走行方向、掘り込み形状や層位的関係から第18次調査の溝跡の延長と考えられる(第８図)。

SD１溝跡は底面にしがらみ状の施設を持った溝跡で東西方向に延びている。溝跡の肩部から出土した遺物より、18世紀頃にはある程度埋没していたものと考えられる。SD２溝跡では碗・皿・鉢・擂鉢・香炉などの陶器に加え、下駄や盤などの木製品、煙管や土人形などが出土した。SD１溝跡を切っており、１層上部および上面出土遺物は18世紀代のものが主体となるが、19世紀前半頃の遺物も含まれていることからその頃には埋まったものと考えられる。溝跡の新旧関係はSD１溝跡⇒SD２溝跡となろう。SD３溝跡、SK１・２土坑はこれらの溝跡よりも下層で検出された。いずれも時期は不明であるが、堆積土よりSD３溝跡とSK１土坑は同時期のものと考えられる。



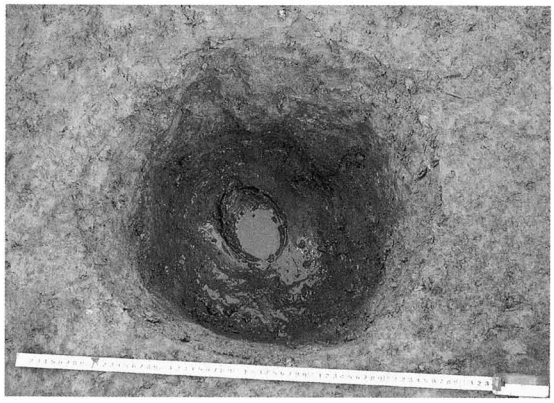
1　Ⅵ層上面遺構完掘状況（西から）



2　Ⅵ層上面遺構検出状況（西から）

3　調査区東壁

4　SK１土坑完掘状況（西から）



5　P３完掘状況（西から）

図版６　検出遺構

Ⅲ　陸奥国分尼寺跡第12次発掘調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名	陸奥国分尼寺跡（宮城県遺跡番号01020）
調 査 地 点	仙台市宮城野区宮千代1丁目２－１、２－11、２－14、２－16、２－17
調 査 期 間	平成20年４月30日～５月30日
調査対象面積	217㎡
調 査 面 積	約217㎡
調 査 原 因	共同住宅建設工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主事　加藤　隆則　　文化財教諭　佐藤　正弥

2　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成19年８月８日付けで地権者より提出された、共同住宅の建築工事に係る「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」（H19教生文第１－24号）に基づき、平成19年10月５日・９日に確認調査を実施した。確認調査の結果、遺構の存在が確認されたため、建物全域を対象とした本調査を実施した。なお発掘届は、調査終了後に平成20年６月24日付けで提出された（H20教生文第184－97号）。

発掘調査は建物建設予定地に東西8.5m×南北25.8mの調査区（約217㎡）を設定し、はじめ調査区北半部を重機によりⅡ層（地表下55～90cm）まで掘削し、以下を人力により調査した。北半部におけるすべての調査を終了し、重機により埋め戻した。引き続き南半部をⅡ層（地表60～85cm）まで掘削し、以下を人力により調査した。

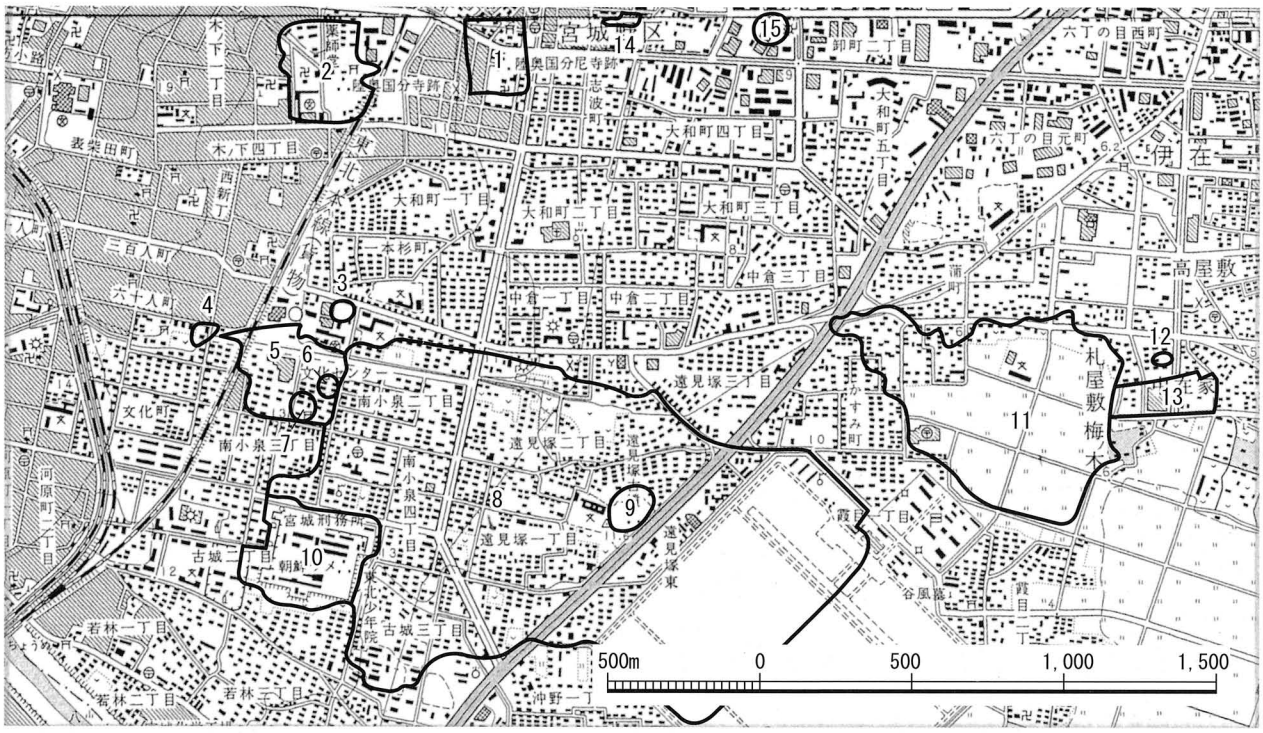
なお、基準杭の平面直角座標系Ｘにおける座標値を計測し、遺跡内の正確な位置を把握している（杭Ａ－Ｘ＝－194260.077m、Ｙ＝7054.145m　杭Ｂ－Ｘ＝－194290.024m、Ｙ＝7057.103m）。

3　遺跡の位置と環境

陸奥国分尼寺跡は仙台市東部のＪＲ仙台駅から東南東約2.5kmの若林区白萩町と宮城野区宮千代に位置している。広瀬川が形成した新寺の仙台中町段丘から沖積平野へ移行する自然堤防上に立地し、標高は11m前後である。

当遺跡では昭和39年から平成17年まで第１～11次にわたる発掘調査が行われており、伽藍配置は未確定ながらも、寺域の中心部で確認された建物跡は大きく２時期（Ⅰ期・Ⅱ期）に分けられることが明らかとなってきた。第10次調査では、創建期段階であるⅠ期の遺構を６次調査ＳＢ１と10次調査ＳＢ２の掘立柱建物跡２棟と金堂跡下層遺構をあて、またⅡ期の遺構を金堂跡と捉えている（渡部2005）。

今回調査地点は、遺跡の北東に位置し、推定寺域線の東辺が敷地西端を通過している。推定寺域線の東辺中央部に位置する第10次調査では、区画施設が検出されず、また推定寺域線より東側で軒瓦類が出土することから、寺域はさらに東側に及ぶと推測している（渡部2005）。また、本地点の西側隣接地の第８次調査では、平安期の竪穴住居跡4軒を検出した。これらの住居跡からは須恵器の大甕、直刀、刀子などの他、「佛」・「妙」と墨書された土器も出土し、一般集落とは異なった性格が考えられている（主濱1999）。



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	陸奥国分尼寺	寺院	段丘	奈良、平安	8	南小泉遺跡	集落・屋敷	自然堤防	縄文～近世
2	陸奥国分寺跡	寺院	段丘	奈良、平安	9	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳（前期）
3	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	10	若林城跡	円墳、集落、城館	自然堤防	古墳、平安、中世、近世
4	保春院前遺跡	集落	自然堤防	古代、中世、近世	11	仙台東郊条里跡	条里遺構	後背湿地	古代
5	養種園遺跡	集落、屋敷、包含地	自然堤防	縄文、古墳、古代、中世、近世	12	中在家遺跡	包含地	後背湿地	平安
6	蛇塚古墳	円墳？	自然堤防	古墳（後期？）	13	中在家南遺跡	集落、墓地	自然堤防、後背湿地	弥生～近世
7	猫塚古墳	円墳？	自然堤防	古墳（後期？）	14	志波遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安

第９図　遺跡の位置と周辺の遺跡

4　基本層序

基本層は盛土下に８層を確認した。Ⅰ層は現代の耕作土で、Ⅲ層が古代～近世の遺構確認面である。Ⅲ層以下は北壁中央で下層調査を実施しⅣ～Ⅷ層を確認した。土質はⅠ～Ⅲ層までが砂質シルトで、これ以下は粗・細粒砂や粘土の互層である。Ⅴ層以下は西側へ傾斜している。

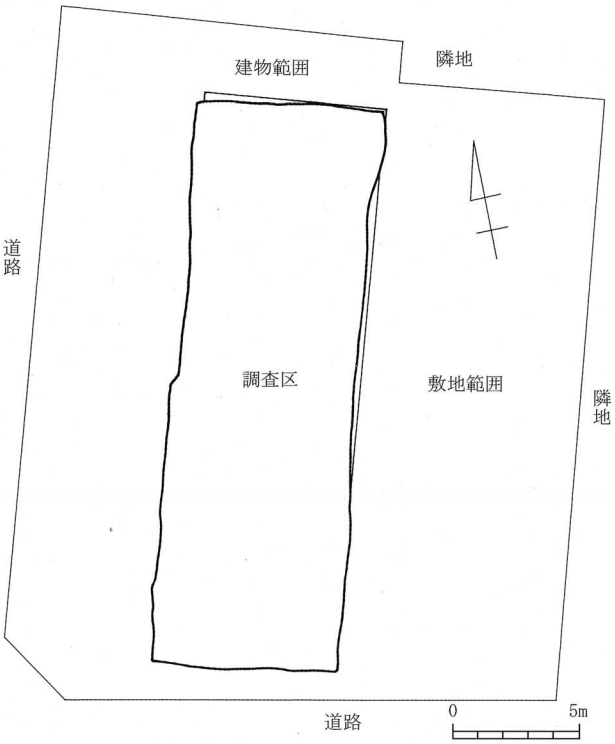
5　発見遺構と出土遺物

調査区は東西約９ｍ×南北約22ｍの南北に長い長方形（約217㎡）である。大部分を撹乱に壊され、実質的な面積は調査区全体の半分程度である。遺構は、Ⅲ層上面で竪穴住居跡1軒、竪穴遺構２基、溝跡６条、土坑26基（うち倒木痕１）、ピット146基を検出した。出土遺物は平箱13箱で、このうち６箱が表土および撹乱で出土した。遺物の多くは瓦（軒丸瓦片１点、軒平瓦片２点、丸瓦片２箱、平瓦片10箱）で、土器平箱１箱（非ロクロ土師器甕、須恵器甕・高台付坏ともに１個体のほか、須恵器坏、甕の破片約50点）が含まれる。

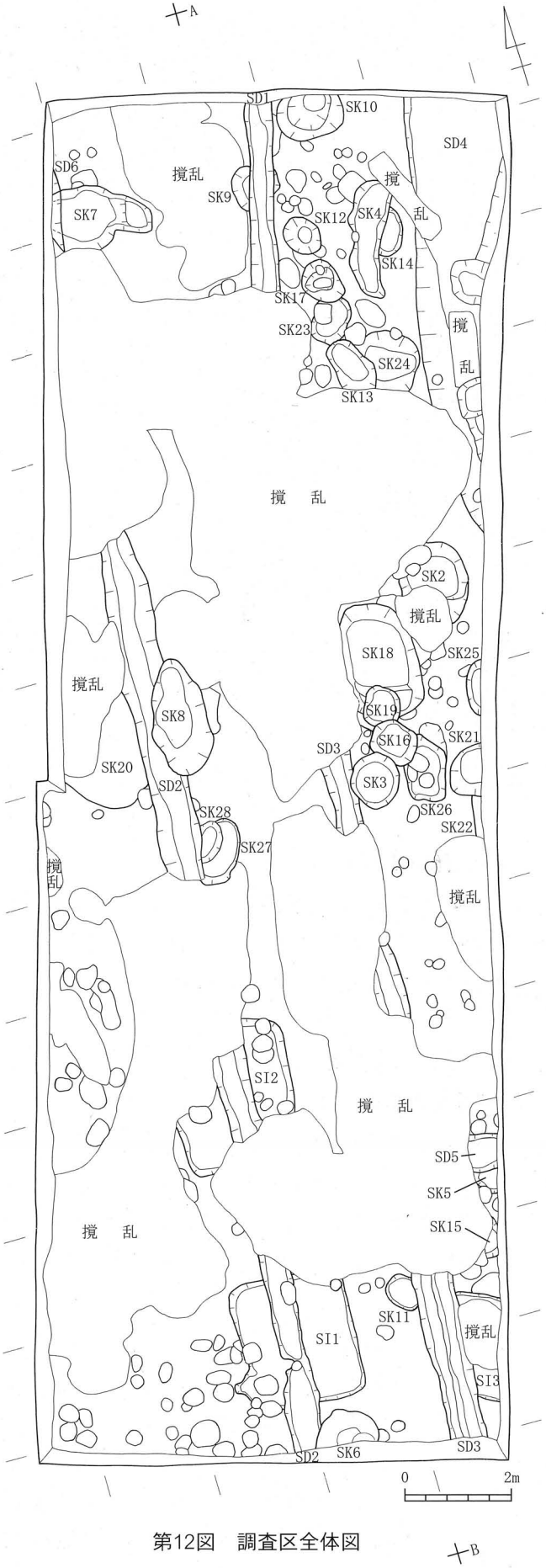
１）竪穴住居跡・竪穴遺構

ＳＩ１竪穴住居跡　調査区南側に位置し、ＳＤ２溝跡、Ｐ44･45･47･129･130･133･134と重複し、いずれの遺構よりも古い。北東コーナーは撹乱によって壊されている。平面形は南北方向に長い長方形で、規模は東西221cm ×南北244cm。壁の高さは、北壁と西壁で25cm、南壁と東壁で15cmである。堆積土は５層で、Ⅲ層ブロックを含んだ暗褐色土を基調としている。２～５層はカマド内堆積土で、３層は燃焼部内の灰集積層である。床面は中央部分が平坦で、北西隅はやや低くなっている。貼り床はしまりの強い黄褐色砂質シルト土（６層）を、カマド前面のみに厚さ５cmほど敷設している。掘り方埋土は

第10図　調査地点の位置



第11図　調査区配置図

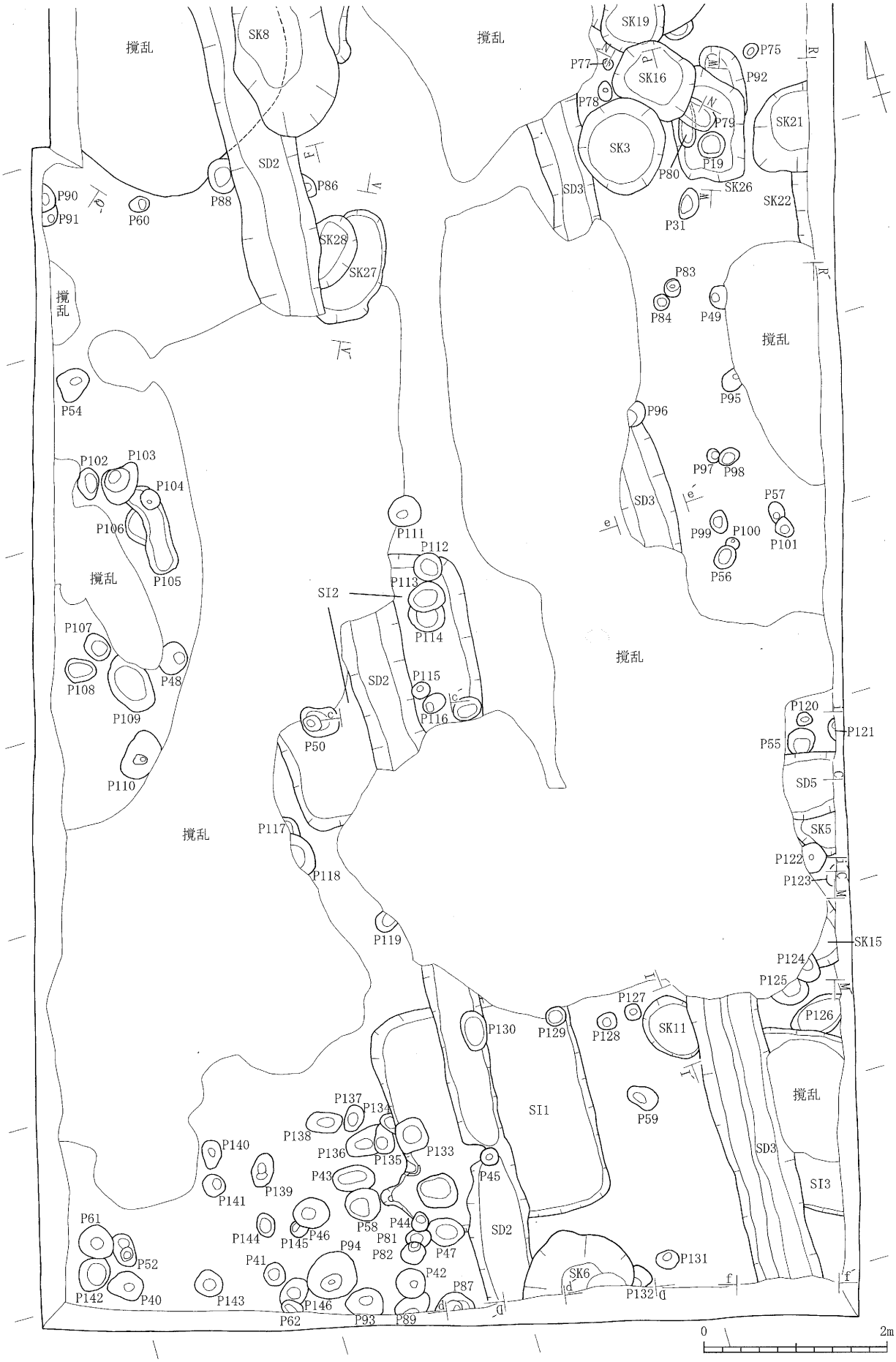


第12図　調査区全体図

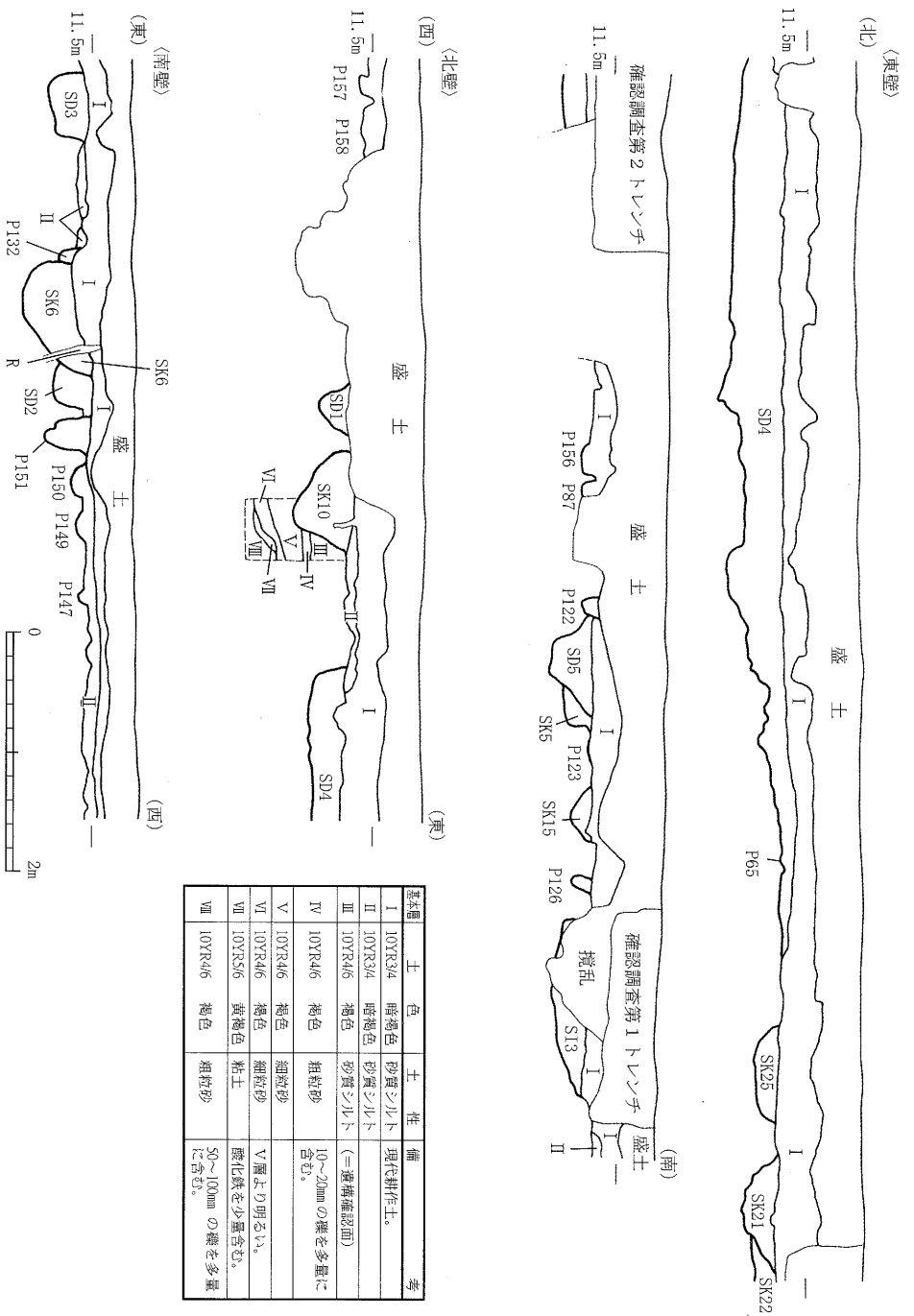
暗褐色砂質土ブロックを含んだ黄褐色砂質シルト土（７層）である。床面ではピットが検出されず、柱穴は不明である。

カマドは西壁南側に設けられる。袖は右袖が残存するが、左袖はＰ44に壊されている。両袖芯材には丸瓦２個体（No.

第13図　遺構平面図・北半



第14図　遺構平面図・南半



基本層	土色	土性	備考
Ⅰ	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	現代耕作土。
Ⅱ	10YR3/4 暗褐色	砂質シルト	
Ⅲ	10YR4/6 褐色	砂質シルト	(一遺構確認面)
Ⅳ	10YR4/6 褐色	粗砂	10～20mmの礫を多量に含む。
Ⅴ	10YR4/6 褐色	細粒砂	
Ⅵ	10YR4/6 褐色	細粒砂	Ⅴ層より明るい。
Ⅶ	10YR5/6 黄褐色	粘土	酸化鉄を少量含む。
Ⅷ	10YR4/6 褐色	粗粒砂	50～100mmの礫を多量に含む。

第15図　土層断面図

３・５）を用いている。袖構築土は基本層Ⅲ層に非常によく似たしまりの強い砂質シルト土（８層）である。燃焼部は、焚口前面を長軸43×短軸36cmの円形に深さ20cmほど掘り込んでいる。煙道は外側へほとんど延びず燃焼部に煙出しが隣接する。断面観察によればカマドの構築は、住居掘り方を掘削後、掘り方の埋積や貼り床敷設に先行してしまりの強い黄褐色砂質シルト土で袖芯材を据え、その後掘り方を埋め貼り床を敷設している。

出土遺物は、カマド両袖の芯材に用いられていた丸瓦のほか、カマド焚口付近で非ロクロ土師器甕１個体（No.１）、その下部より完形の丸瓦（No.４）が出土した。ともに２層から出土している。またこのほか、南壁際の堆積土１層より須恵器高台付坏（No.２）が出土した。第17図に示したものは５点である。１は非ロクロ土師器甕である。底径が大きく、最大径は胴部中央からやや上付近である。底部には木葉痕が見られる。２は須恵器高台付坏で、底部は

回転ヘラ切り後高台をナデつけている。３～５は丸瓦で３・５は袖芯材、４はカマド２層出土である。

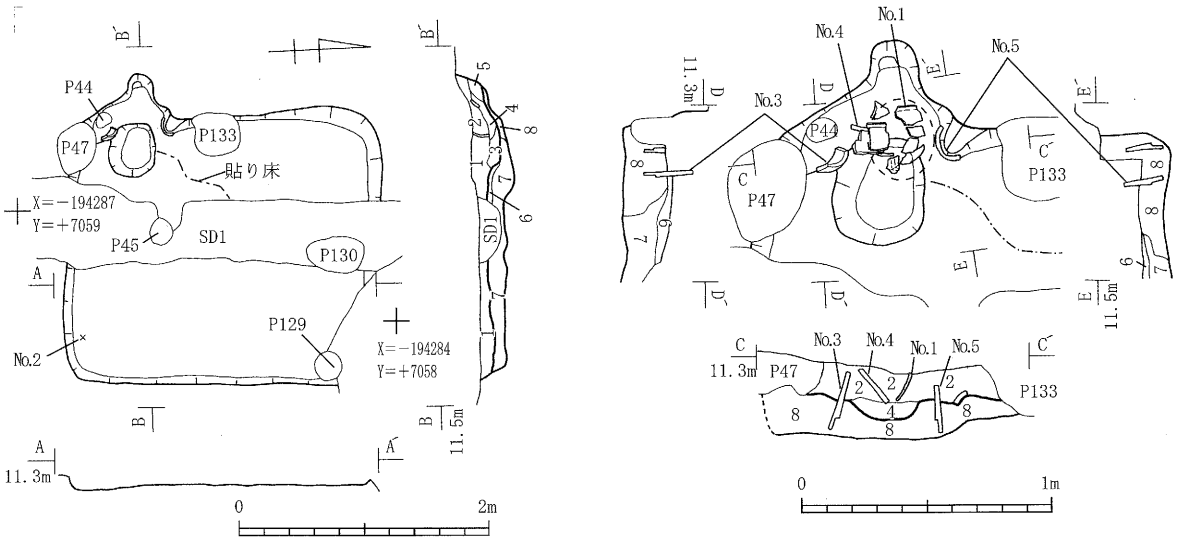
ＳＩ２竪穴遺構　調査区南側に位置し、ＳＤ２溝跡、Ｐ50･112～116と重複し、新旧関係はいずれの遺構よりも古い。北西および南西部が撹乱によって大きく壊されている。平面形は南北方向に長い長方形で、規模は東西225cm ×南北265cm、壁の高さは南西部が３～５cm、北壁から東壁にかけては約20cmである。カマドやその他の施設は見られず、また掘り方や貼り床等も見られないことから、竪穴遺構とした。堆積土は単層でⅢ層ブロックを極多量に含む暗褐色砂質シルト土である。床面は中央部から西側がやや高く、南西部および北東部がわずかに低い。ピットは南東隅に１基検出した。Ｐ１は平面形が楕円形で、規模は長軸29cm、短軸26cm、深さ６cmである。堆積土は炭層でⅢ層ブロックを多量に含む暗褐色土である。

遺物は南西部床面から須恵器甕(No.２)の口縁部から胴部上半の破片が１点、Ｐ１より平瓦(No.３)１点が出土した。ピット底面に狭端部を据え、直立した状態で出土している。また堆積土中より微量の須恵器坏・甕のほか、瓦が平箱１箱出土している。第20図に示したのは５点である。１は堆積土中出土の須恵器坏の破片で、底部は回転糸切りで「－」のヘラ書きが見られる。

ＳＩ３竪穴遺構　調査区南東に位置し、東側は調査区域外に延びている。ＳＤ３溝跡、Ｐ126と重複し、いずれの遺構よりも古い。中央は撹乱によって壊されている。カマドおよびその他の施設はなく、安定した床面も見られないことから竪穴遺構とした。規模は、西壁が195cm で、北壁および南壁は不明である。壁の高さは、北壁と南壁で約10cm、西壁はＳＤ３溝跡に壊され２～３cm 程度しか残っていない。底面は撹乱により北側はほとんど残っていない。残存部では南側に向かって緩やかに上がっている。堆積土は４層で、いずれもⅢ層ブロックを多く含み、３層では特に集積している。出土遺物はない。

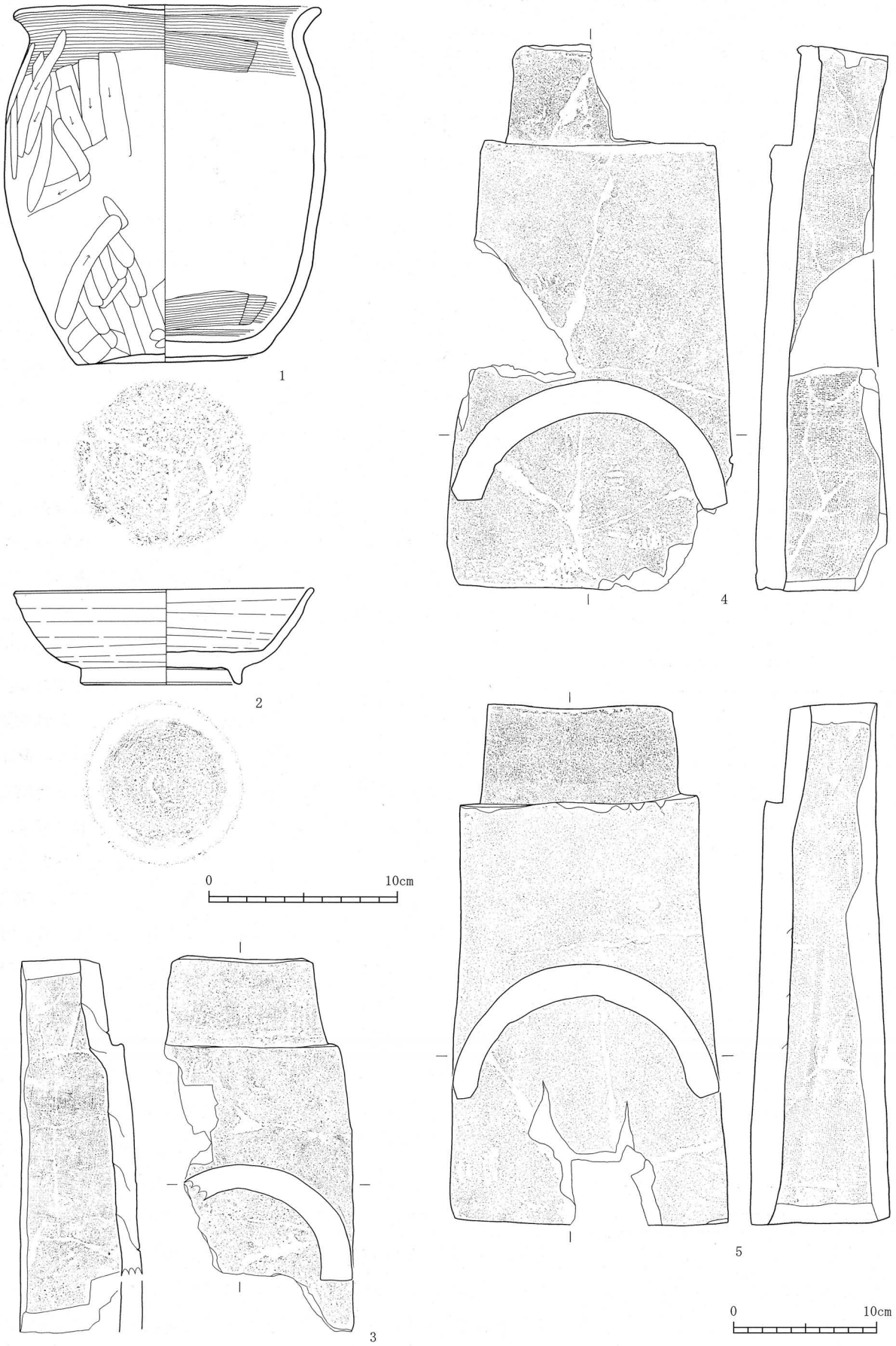
２）溝跡

ＳＤ１溝跡　調査区北側のⅢ層上面で検出した。北側は調査区域外に延び、南側は撹乱に壊されている。ＳＫ９土坑、Ｐ７･18と重複し、Ｐ７よりも古く、ＳＫ９土坑、Ｐ18よりも新しい。方向はＮ－14°－Ｅ、規模は検出長3.6



層　位	土　色		土　性	備　　考
SI1－1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	砂を少量含む。
2	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックをやや多量に含む。炭化物粒を微量に含む。
3		灰集積層		
4	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	
5	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックをやや多量に含む。焼土ブロックを微量に含む。
6	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	(＝貼り床) 10YR3/4暗褐色砂質シルトブロックを少量含む。
7	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	(＝掘り方埋土) 10YR3/4暗褐色砂質シルトブロックを少量含む。
8	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	(＝袖構築土)

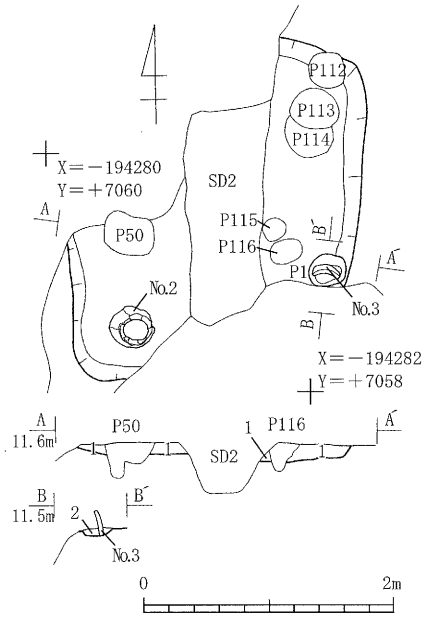
第16図　SI１竪穴住居跡平・断面図



第17図　SI 1 竪穴住居跡出土遺物

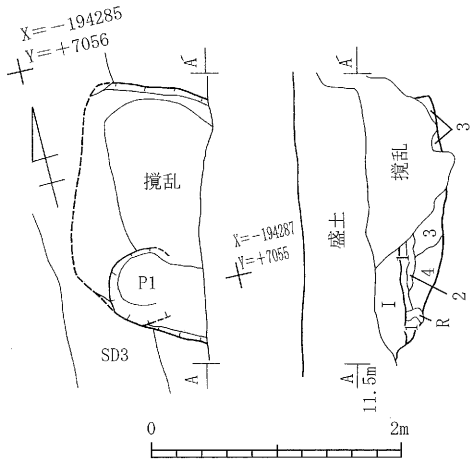
図中番号	登録番号	出土地点		分類		法量（cm）			特徴（形状・整形・調整）、時期	写真図版
		遺構名・位置	遺構層	種別	器種	器高	口径	底径		
1	C－1	SI－1・カマド	2層	ﾛｸﾛ土師器	甕	19.1	16.2	9.6	【調整】外面：口縁－ヨコナデ、体－ヘラケズリ　内面：ヘラナデ	17－1
2	E－9	SI－1・南東壁際	1層	須恵器	高台付坏	4.9	15.8	8.5	内面被熱【調整】外面：ロクロナデ、底－回転ヘラ切り→高台ナデつけ　内面：ロクロナデ	17－2
No.	登録番号	遺構名・位置	遺構層	種別	凹面				凸面	備考	写真図版
3	F－1	SI－1・カマド	左袖芯材	丸瓦	布目→側面ケズリ				縄叩き（縦）→ナデ（横）	最大長（22.7）cm、幅（13.5）cm、高さ8.7cm	17－10
4	F－3	SI－1・カマド	2層	丸瓦	布目→側面ケズリ　布綴じ痕				縄叩き（縦・斜）→ナデ(横)	最大長38.5cm、幅19.7cm、高さ9.2cm	17－12
5	F－2	SI－1・カマド	右袖芯材	丸瓦	布目→側面ケズリ				縄叩き（縦）→ナデ（横）	最大長36.7cm、幅19.6cm、高さ9.8cm	17－11

SI１竪穴住居跡出土遺物観察表



層位	土色		土性	備考
SI2－1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックを極多量に含む。
P1－1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックを極多量に含む。

第18図　SI２竪穴遺構平・断面図



層位	土色		土性	備考
SI3－1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	酸化鉄を少量含む。Ⅲ層粒を少量含む。
2	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	酸化鉄を多量に含む。Ⅲ層ブロックを多量に含む。
3	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロック集積層。
4	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックを極多量に含む。

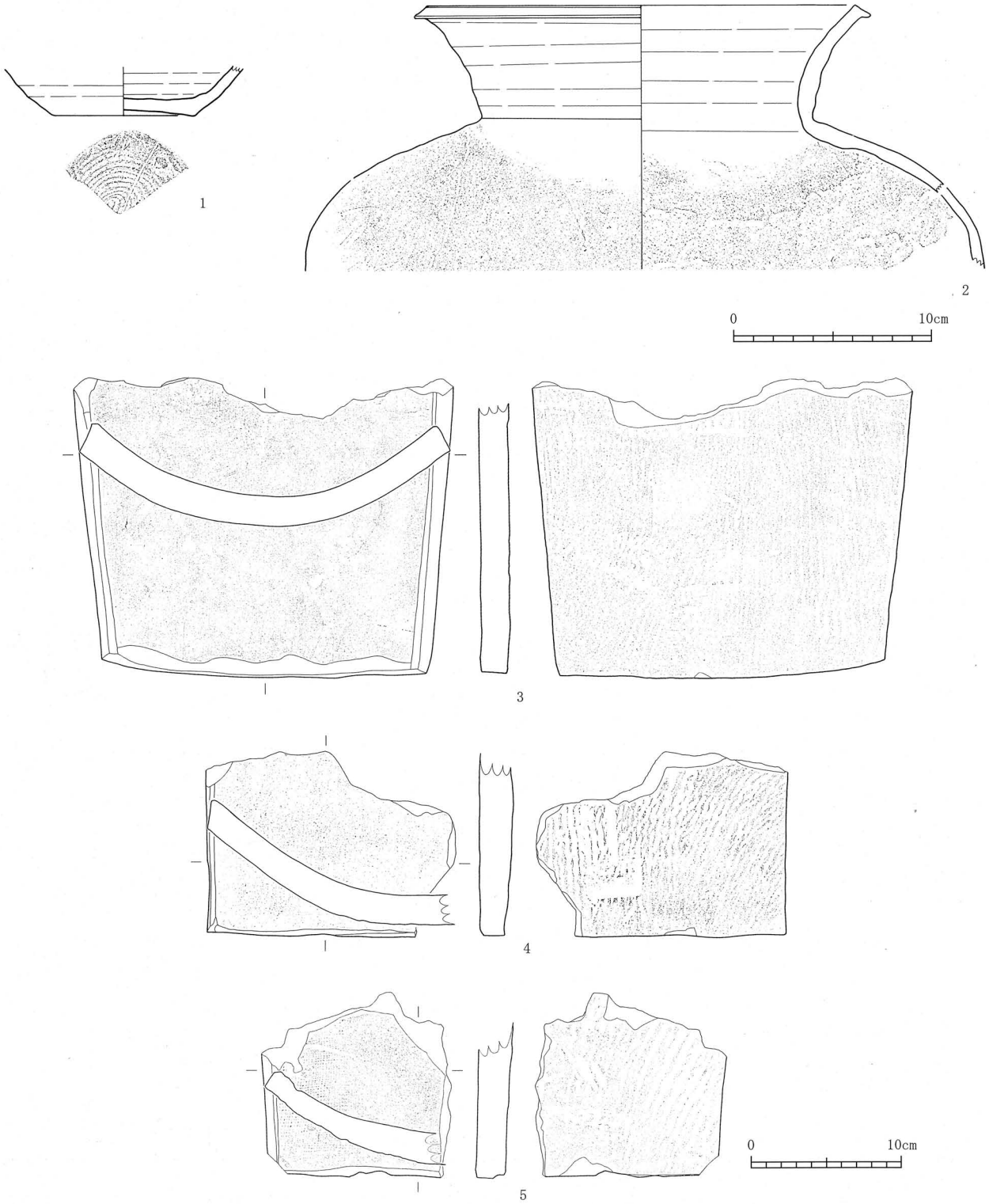
第19図　SI3竪穴遺構平・断面図

m、最大幅55cm、最小幅45cm、深さ20cm である。断面形は台形で堆積土は２層である。遺物は土師器甕３点、丸瓦３点、平瓦16点が出土したが、いずれも小片のため図示しえなかった。

ＳＤ２溝跡　調査区北西から南側のⅢ層上面で検出した。北東部および中央部で撹乱に壊されているが、北側は撹乱を経て、ＳＤ６溝跡に続く可能性もある。ＳＩ１竪穴住居跡、ＳＩ２竪穴遺構、ＳＫ６・８・20・27・28土坑、Ｐ45・86・88・115・130と重複し、竪穴住居跡・竪穴遺構よりも新しく、その他の土坑やピットよりも古い。方向はＮ－３°－Ｅで、規模は検出長17.5m、最大幅88cm、最小幅30cm、深さ29cm である。断面形は台形で、堆積土は北側では１層、南側では４層確認される。遺物は北側の堆積土１層で特に集中して出土した。内容は土師器坏３点、甕５点、ロクロ土師器坏２点、須恵器甕４点のほか、大量の瓦（丸瓦123点、平瓦202点）が出土した。第22図に示したのは６点で２・４が丸瓦、５・６・８・９は刻印をもつ平瓦である。刻印は５が「尺」、６・８・９は「物」である。

ＳＤ３溝跡　調査区中央から南側のⅢ層上面で検出した。北側が撹乱により壊されているほか、中央や南側も撹乱に壊されている。南側でＳＩ３竪穴遺構、ＳＫ11土坑と重複するほか、北側でＳＫ３土坑と重複している。新旧関係はＳＫ３土坑よりも古く、ＳＩ３竪穴遺構、ＳＫ11土坑より新しい。方向はＮ－5°－ＥでＳＤ２溝跡とはおおむね平行している。規模は検出長13.0m、最大幅78cm、最小幅48cm、深さ29cm である。南部ではテラス状に段差をつけて掘り込まれている。堆積土は１層で、出土遺物は土師器坏・甕がともに３点、須恵器甕１点のほか、丸瓦９点、平瓦44点である。第22図に示したのは丸瓦１点、平瓦１点で、土器は小片で図示し得ない。

ＳＤ４溝跡　調査区北側のⅢ層上面で検出した。北側および東側は調査区域外に延びているほか、一部が撹乱に壊されている。方向はＮ－11°－Ｅ、検出長は8.3mである。溝幅は最大値で北壁部の114cm である。立ち上がりは北側ほど急で、南側に至り緩やかになる。底面は、溝あるいは土坑状の掘り込みをもっている。またＰ53・63～65としたものも堆積土の類似から他遺構ではなく、本溝跡に伴うものと思われる。堆積土は４層で、上層から下層まで酸化鉄を大量に含んでおり、部分的に面的な沈着を見せる。遺物は堆積土１層で須恵器蓋（第22図1）が１点出土したのみである。



図中番号	登録番号	出土地点		分類		法量（cm）			特徴（形状・整形・調整）、時期	写真図版
		遺構名・位置	遺構層	種別	器種	器高	口径	底径		
1	E−2	SI−2		須恵器	坏	(2.6)	−	(7.2)	【調整】外面:底部回転糸切→ヘラ書き「−」 内面:ロクロナデ	17−6
2	E−1	SI−2・南西部		須恵器	甕	(13.4)	21.7	−	【調整】外面：タタキ目 内面：当て具痕	17−9

No.	登録番号	遺構名・位置	遺構層	種別	凹面	凸面	備考	写真図版
3	G−2	SI−2・P1		平瓦	布目→ケズリ(斜)→ナデ(縦)→側面ケズリ	縄叩き（縦）	最大長(20.0)cm、幅25.6cm、高さ6.7cm	18−6
4	G−3	SI−2		平瓦	布目→ナデ（縦）→側面ケズリ	縄叩き（縦）		18−7
5	G−4	SI−2		平瓦	布目→一部ナデ→側面ケズリ	縄叩き（縦）		18−8

第20図　SI2竪穴遺構出土遺物

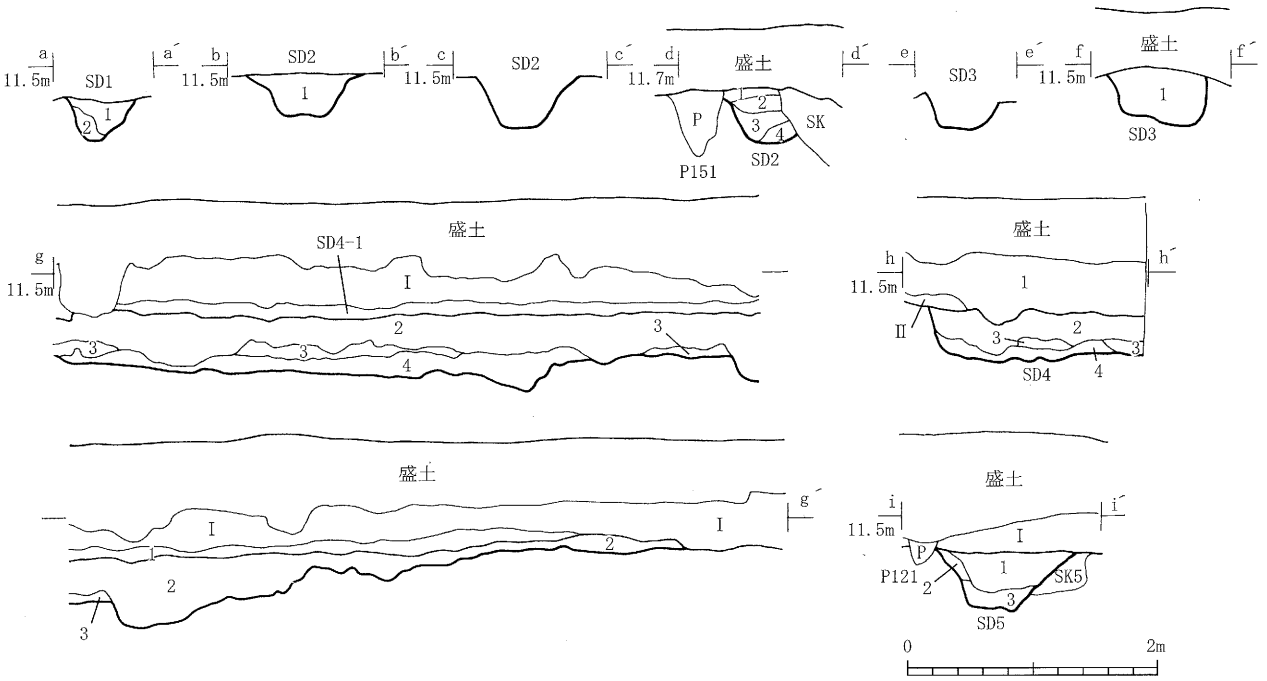
ＳＤ５溝跡　調査区南側Ⅲ層上面で検出した。ＳＫ５土坑、Ｐ55・121と重複し、ＳＫ５土坑よりも新しく、いずれのピットよりも古い。東西方向に延びる溝と思われるが、西側は撹乱に壊され、東側は調査区域外に延びており方位は不明である。断面形は箱型で堆積土は３層である。遺物は丸瓦４点、平瓦１点出土しているが、小片のため図示し得なかった。

ＳＤ６溝跡　調査区北西のⅢ層上面で検出した。調査区内にわずかに掘り込みが見られる程度で底面の検出には至らなかった。大部分は調査区域外に延びるものと思われる。南側は撹乱に壊されている。方向はＮ－10°－Ｅで検出長は1.6m。南側の撹乱を経て、ＳＤ２溝跡につながる可能性もある。出土遺物はない。

３）土坑

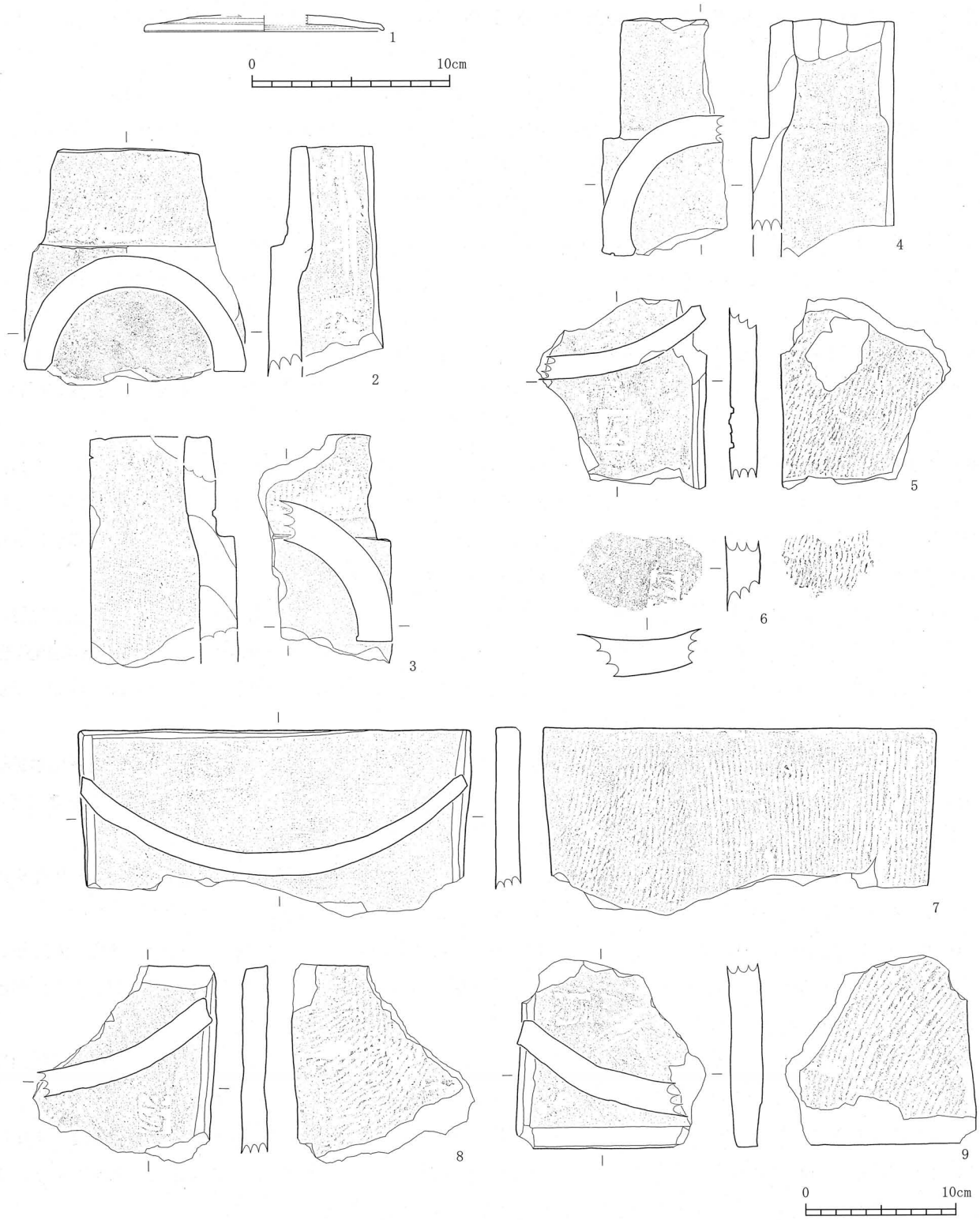
ＳＫ２土坑　調査区中央東寄りで検出した。Ｐ66・67と重複し、いずれのピットよりも古い。南北を撹乱に壊されているが、平面形は楕円形であろう。底面は北側が深く南側が浅い。規模は長軸165cm 以上、短軸126cm 以上、深さは北側で50cm である。堆積土は４層で、近世陶磁器少量、須恵器坏・甕の破片２点、平瓦片約20点が出土した。第24図に示したのは須恵器甕と平瓦の各１点で、９の平瓦の凹面にはヘラ書きが見られる。時期は出土遺物から近世以降と思われる。

ＳＫ３土坑　調査区中央東寄りで検出した。ＳＤ３溝跡、ＳＫ16土坑と重複し、いずれの遺構よりも新しい。平面形は楕円形で、長軸は105cm、短軸は95cm、深さは35cm である。断面形はすり鉢状で堆積土は１層、瓦や拳大の礫が多量に出土した。遺物は平瓦が平箱１箱出土したほか、丸瓦片１点、須恵器坏・甕片、土師器甕片いずれも１点、



層　位	土　色		土　性	備　考
SD1－1	10YR4/3	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロック・粒を少量含む。
2	10YR4/3	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックを多量に含む。
SD2－1	7.5YR3/2	黒褐色	砂質シルト	Ⅲ層粒を微量含む。
2	7.5YR3/2	黒褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックを少量含む。Ⅲ層粒を微量含む。
3	10YR4/6	褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロック・粒集積。
4	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	
SD3－1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロック・粒を少量含む。
SD4－1	10YR3/4	暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄粒を多量に含む。Ⅲ層ブロックをやや多量に含む。10YR6/8明黄褐色土ブロックを微量含む。
2	10YR6/8	明黄褐色	粘土質シルト	下位に酸化鉄、マンガンをやや多量に含む。10YR3/4砂質シルトブロックを多量に含む。
3	10YR4/4	褐色	粘土質シルト	Ⅲ層粒をやや多量に含む。
4	10YR5/6	黄褐色	シルト質砂	下位に酸化鉄、マンガン沈着。酸化鉄を多量に含む。10YR4/6砂を部分的に多量に含む。
SD5－1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	
2	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックをやや多量に含む。
3	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックを下位に多量に含む。

第21図　溝跡断面図



図中番号	登録番号	出土地点		分類		法量（cm・g）			特徴（形状・整形・調整）、時期		写真図版
		遺構名・位置	遺構層	種別	器種	器高	口径	底径			
1	E−3	SD−4		須恵器	蓋	(1.1)	16.0	−			17−3
No.	登録番号	遺構名・位置	遺構層	種別	凹　面				凸　面	備　考	写真図版
2	F−5	SD−2		丸瓦	布目→側面ケズリ　布綴じ痕				縄叩き（縦）→ナデ(横)	最大長(16.0)cm、幅(14.8)cm、高さ(7.7)cm	18−1
3	F−6	SD−3		丸瓦	布目→ナデ(縦)				縄叩き（縦）→ナデ(横)		18−2
4	F−4	SD−2		丸瓦	布目→側面ケズリナデ(縦・横)				縄叩き→ナデ(横)		18−3
5	G−8	SD−2		平瓦	布目→側面ケズリ				縄叩き（縦）	刻印「尺」	19−1
6	G−7	SD−2		平瓦	布目				縄叩き（縦）	刻印「物」	19−2
7	G−1	SD−3		平瓦	布目→側面ケズリ				縄叩き（縦）	最大長(12.6)cm、幅26.0cm、高さ6.7cm	19−3
8	G−6	SD−2		平瓦	布目→ナデ(斜)→側面ケズリ				縄叩き（縦）→(斜)→一部ケズリ	刻印「物」	19−4
9	G−5	SD−2		平瓦	布目→一部ナデ→側面ケズリ				縄叩き（斜）	刻印「物」	19−5

第22図　溝跡出土遺物１

鉛玉１点が出土した。第24図５は鉛玉で底面付近から出土している。よって本遺構は、近世以降に礫や瓦、土器などをまとめて棄てた廃棄土坑と思われる。

ＳＫ４土坑　調査区北側で検出した。ＳＫ14土坑、Ｐ25･37と重複し、Ｐ37よりも古く、ＳＫ14土坑、Ｐ25よりも新しい。北側は一部撹乱に壊されている。平面形は南北に長い不整方形で、長軸は218cm、短軸は50cm、深さは15～20cmである。断面形は浅いすり鉢状で堆積土は１層である。遺物は土師器甕片、須恵器坏片１点、平瓦片が少量出土した。このうち第24図に示したのは１の須恵器坏である。底部は回転糸切りである。

ＳＫ５土坑　調査区南東で検出した。東側は調査区域外に延び、西側は撹乱に壊されている。また、ＳＤ５溝跡、Ｐ122に切られているため、平面形および規模は不明である。確認面からの深さは34cmである。堆積土は１層で、遺物は出土していない。

ＳＫ６土坑　調査区南側で検出した。南側は調査区域外に延びている。ＳＤ２溝跡、Ｐ132と重複し、Ｐ132よりも古く、ＳＤ２溝跡よりも新しい。平面形は楕円形で、規模は南壁断面で118cm、深さ78cmである。堆積土は２層で、遺物は平瓦片が２点出土している。

ＳＫ７土坑　調査区北西側で検出した。西側は調査区域外に延びている。ＳＤ６溝跡、Ｐ21･22と重複し、いずれの遺構よりも古い。西側は調査区域外に延び、南側は撹乱に壊されている。平面形は、楕円形の土坑東側に浅い土坑が取り付く形をしている。長軸192cm以上、短軸116cm以上、深さは西側58cm、東側は16cmである。堆積土は５層でいずれもⅢ層ブロックを多量に含んでいる。遺物は丸瓦片７点、平瓦片38点が出土した。

ＳＫ８土坑　調査区中央西寄りで検出した。ＳＤ２溝跡、Ｐ85と重複し、両遺構よりも新しい。北側の上部は撹乱に壊されている。平面形は楕円形で、長軸212cm、短軸108cm、深さは９cmである。堆積土は２層で、遺物は土師器甕３点、坏３点、須恵器坏４点のほか、丸瓦９点、軒平瓦１点、平瓦61点が出土した。図示したのは１点で、第24図６は凸面に「占」の刻印をもつ丸瓦である。

ＳＫ９土坑　調査区北側で検出した。西側上部を撹乱に壊されており、ＳＤ１溝跡と重複する。新旧関係は本遺構のほうが古い。平面形は東西にやや長い楕円形で、長軸90cm、短軸80cm、深さ36cmである。堆積土は１層で、瓦が出土した。

ＳＫ10土坑　北壁中央付近で検出し、北側は調査区域外に延びる。Ｐ３・18と重複し、本遺構が新しい。平面形は円形と考えられる。規模は長軸126cm、短軸86cm、深さ68cmである。堆積土は２層で、瓦片が出土した。

ＳＫ11土坑　調査区南東側で検出した。東側でＳＤ３溝跡と重複し、同溝跡よりも古い。平面形は南北方向に長い楕円形で、規模は長軸68cm、短軸56cm以上、深さ16cmを計る。断面形は浅いすり鉢状で、底面は南側は低く北側が高い。堆積土は３層で、遺物は出土していない。

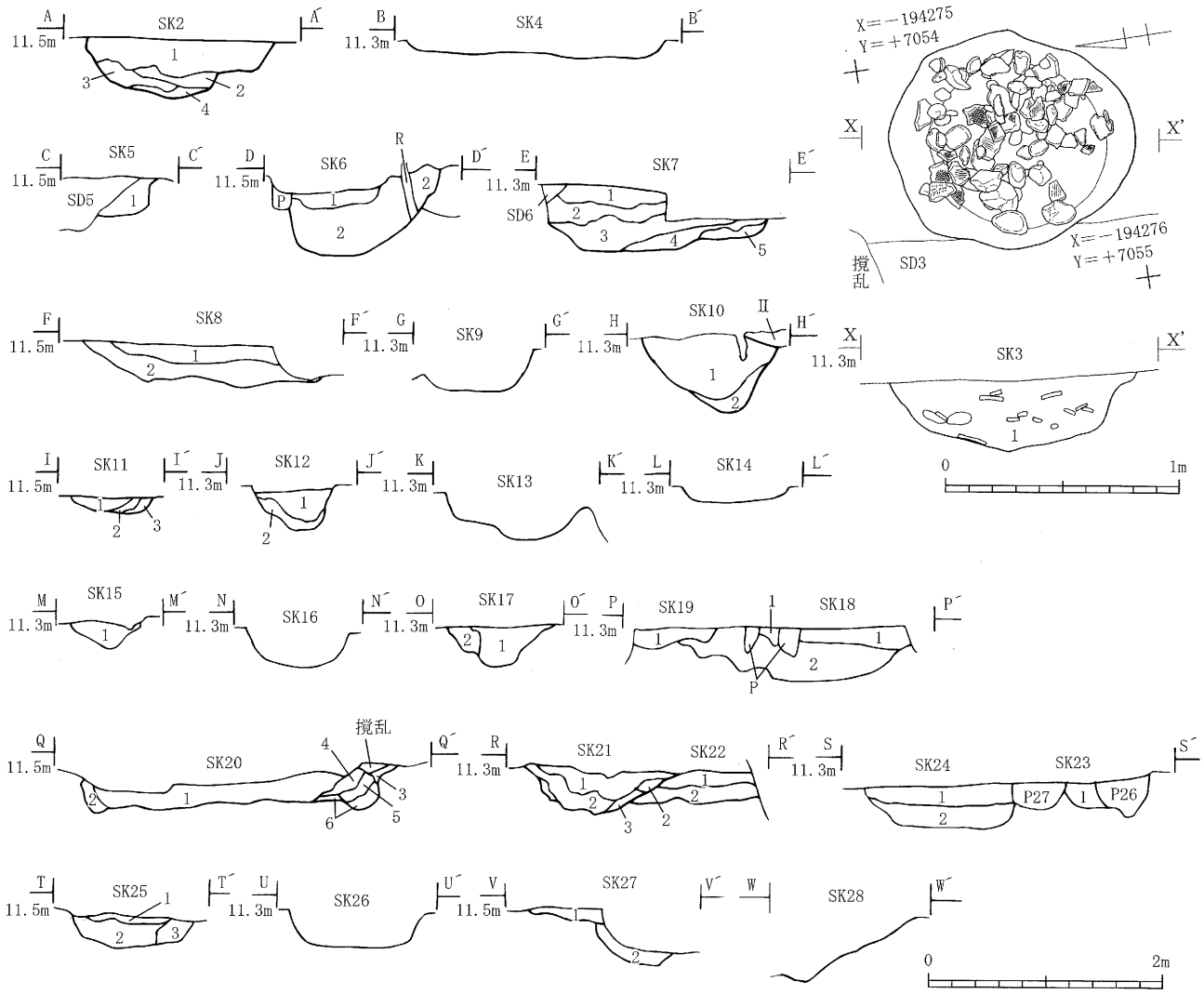
ＳＫ12土坑　調査区北側で検出した。Ｐ35･39と重複し、同ピットよりも新しい。平面形は楕円形で、規模は長軸80cm、短軸62cm、深さ40cmである。堆積土は２層で、遺物は出土していない。

ＳＫ13土坑　調査区北側で検出した。ＳＫ23･24土坑、Ｐ27と重複し、いずれの遺構よりも新しい。また南側を撹乱に壊されている。平面形は南北に長い楕円形で、規模は長軸118cm以上、短軸54cm、深さは南側で42cmである。遺物は土師器甕片１点、須恵器坏片１点、丸瓦片２点、平瓦片11点が出土した。

ＳＫ14土坑　調査区北側で検出した。ＳＫ４土坑と重複し、本遺構の方が古い。平面形は南北に長い楕円形で、規模は長軸100cm以上、短軸42cm以上、深さ13cmである。断面形は浅い皿状で底面はおおむね平坦である。堆積土は単層で、遺物は出土していない。

ＳＫ15土坑　調査区東壁際南部で検出した。東側は調査区域外に延び、西側は撹乱に壊されている。またＰ124にも切られているため、平面形および規模は不明である。深さは13cmである。堆積土は１層で、遺物は出土していない。

ＳＫ16土坑　調査区中央東寄りで検出した。ＳＫ３・19･26土坑、Ｐ79･80と重複し、ＳＫ３土坑よりも古く、その



層位	土色		土性	備考
SK2−1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックをやや多量に含む。炭化物ブロックを微量含む。酸化鉄を少量含む。
2	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックを極多量、酸化鉄を少量含む。
3	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	Ⅰ層ブロックを微量、酸化鉄をやや多量に含む。
4	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	
SK3−1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	50〜150mm の被熱礫・瓦片多量に含む。
SK5−1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックを極多量に含む。
SK6−1	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	10YR3/4砂質シルトブロックを多量に含む。Ⅲ層粒・ブロックを少量含む。
2	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層粒・ブロックをやや多量に含む。
SK7−1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	10YR3/4砂質シルトブロック、Ⅲ層粒・ブロックをやや多量に含む。
2	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックを極多量に含む。
3	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックを多量に含む。
4	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックを極多量に含む。
5	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロック集積層。10YR3/4砂質シルトブロックを少量含む。
SK8−1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックを少量含む。瓦片を少量含む。
2	10YR4/6	褐色	砂質シルト	Ⅲ層粒を極多量に含む。礫・瓦片を少量含む。
SK10−1	10YR4/4	褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックを斑状に多量に含む。酸化鉄をやや多量に含む。
2	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	Ⅰ層ブロックを多量に含む。酸化鉄を少量含む。
SK11−1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	上位にⅢ層ブロックをやや多量に含む。
2	Ⅲ層ブロック集積層		砂質シルト	Ⅰ層ブロックを微量に含む。
3	Ⅲ層ブロック集積層		砂質シルト	Ⅰ層ブロックをやや多量に含む。
SK12−1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックをやや多量に含む。
2	Ⅲ層ブロック集積層			Ⅰ層ブロックをやや多量に含む。

層位	土色		土性	備考
SK15−1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックを極多量に含む。
SK17−1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックをやや多量に含む。
2	Ⅲ層ブロック集積層			Ⅰ層ブロックをやや多量に含む。
SK18−1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックをやや多量に含む。10YR3/2砂質シルトブロックを微量含む。
2	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロック・粒を多量に含む。10YR3/2砂質シルト粒を微量含む。
SK19−1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックをやや多量に含む。
SK20−1	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	礫を少量含む。
2	10YR4/4	褐色	砂質シルト	下位に砂礫層を含む。
3	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	
4	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	1層ブロックを多量に含む。
5	10YR4/4	褐色	砂質シルト	1層粒を少量含む。
6	10YR4/4	褐色	砂質シルト	
SK21−1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層粒を多量に含む。
2	10YR4/4	褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックをやや多量、酸化鉄を多量に含む。
3	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	1層ブロックをやや多量に含む。
SK22−1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層粒をやや多量に含む。
2	10YR4/4	褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックを多量に含む。
SK23−1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックを多量に含む。
2	Ⅲ層ブロック集積層		砂質シルト	10YR3/4砂質シルトを多量に含む。
SK24−1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロック・粒を多量に含む。
2	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックを極多量に含む。
SK25−1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックを多量に含む。
2	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層粒を微量に含む。
3	10YR4/6	褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックを極多量に含む。
SK27−1	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックを極多量に含む。
2	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	Ⅲ層ブロックを下位に極多量に含む。

第23図　土坑平・断面図

他の遺構よりも新しい。平面形は隅丸方形で、規模は長軸80cm、短軸60cm、深さ36cmである。断面形はU字形である。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

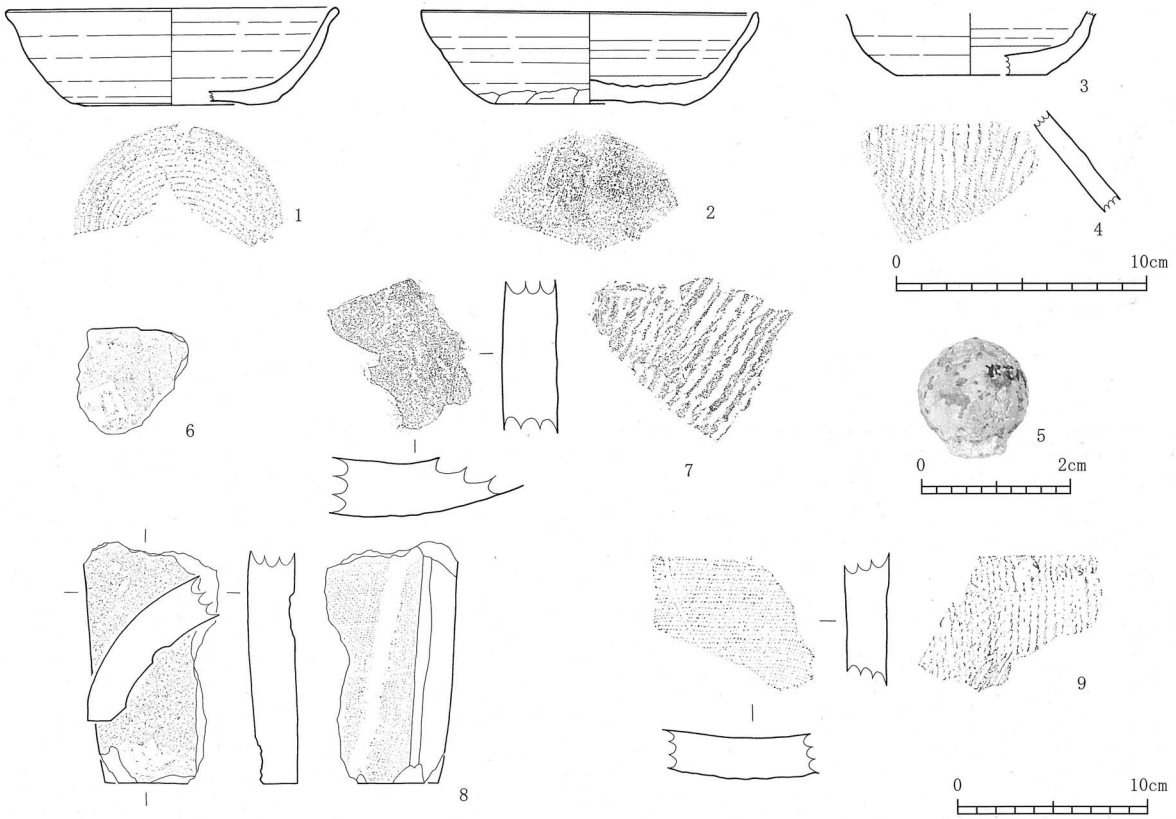
ＳＫ17土坑　調査区北側で検出した。ＳＫ23土坑、Ｐ38･39と重複し、Ｐ38よりも古く、ＳＫ23土坑、Ｐ38よりも新しい。平面形は南北に長い楕円形で、規模は長軸86cm、短軸72cm、深さ35cm である。堆積土は２層で、遺物は平瓦片６点が出土した。

ＳＫ18土坑　調査区中央東寄りで検出した。西側上部は撹乱に壊されている。ＳＫ19土坑、Ｐ71･72･76と重複し、ＳＫ19土坑よりも古い。平面形は南北に長い楕円形で、規模は長軸215cm、短軸140cm 以上、深さは最深部で48cm である。底面は北側が平坦で、南側に向かって浅くなる。堆積土は２層で、土師器坏片３点、須恵器坏片１点が出土した。

ＳＫ19土坑　調査区中央東寄りで検出した。ＳＫ16･18と重複し、ＳＫ16土坑よりも古く、ＳＫ18土坑よりも新しい。平面形は楕円形で、規模は長軸74cm 以上、短軸66cm、深さは18cm である。堆積土は１層で、遺物は平瓦片１点が出土した。

ＳＫ20土坑(倒木痕)　調査区西壁中央で検出した。西側は調査区域外に延び、撹乱にも壊される。ＳＤ２溝跡、ＳＫ８土坑、Ｐ88と重複し、いずれの遺構よりも古い。平面形は不整形で、規模は長軸220cm 以上、短軸140cm 以上、深さ45cm である。堆積土は６層を確認し、いずれも非常にしまりがある。遺物は出土していない。

ＳＫ21土坑　調査区東壁中央で検出した。東側は調査区域外に延びる。南側でＳＫ22土坑と重複し、本遺構が新し



図中番号	登録番号	出土地点 遺構名・位置	遺構層	分類 種別	器種	法量（cm・g） 器高	口径	底径	特徴（形状・整形・調整）、時期	写真図版
1	E−5	SK−4		須恵器	坏	4.0	(13.4)	(7.0)	【調整】外面：ロクロナデ、底部回転糸切　内面：ロクロナデ	17−4
2	E−7	P27		須恵器	坏	3.8	(13.6)	(7.8)	【調整】外面：ロクロナデ、底部ヘラケズリ　内面：ロクロナデ	17−5
3	E−6	SK−24	2層	須恵器	坏	(2.0)	−	(6.2)	【調整】外面：ロクロナデ、下部ナデ？、底部ヘラケズリ　内面：ロクロナデ	17−7
4	E−4	SK−2		須恵器	甕	−	−	−	【調整】外面：タタキ目　内面：当て具痕	17−8
5	N−1	SK−3	1層(底面付近)	金属製品	鉛玉	径：1.4cm　重量：13g				
No.	登録番号	遺構名・位置	遺構層	種別	凹面				凸面	備考	写真図版
6	F−9	SK−8		丸瓦	布目				縄叩き（縦）→ナデ(横)	刻印「占」	18−5
7	G−16	P43		平瓦	ナデ→一部ケズリ				縄叩き（縦）	〃	19−6
8	F−10	P43		丸瓦	布目→側面ケズリ　布綴じ痕				縄叩き（縦）→ナデ(横)		18−4
9	G−13	SK−2		平瓦	布目→ヘラ書き				縄叩き（縦）		19−7

第24図　土坑・ピット出土遺物

い。平面形は不明で、規模は東壁で94cm、深さは43cmである。堆積土は３層で、遺物は出土していない。

ＳＫ22土坑　調査区東壁中央で遺構の立ち上がりのみ検出した。底面は未検出で、東側は調査区域外に延びる。北側でＳＫ21土坑と重複し、本遺構の方が古い。平面形および規模は不明である。堆積土は２層で、遺物は出土していない。

ＳＫ23土坑　調査区北側で検出した。ＳＫ13･17土坑、Ｐ26･27と重複し、いずれの遺構よりも古い。北側はＰ27に壊されているほか、西側一部を撹乱に壊されている。平面形は東西に長い楕円形である。規模は、長軸92cm、短軸62cm以上、深さ27cmである。堆積土は１層で、遺物は瓦片が２点出土した。

ＳＫ24土坑　調査区北側で検出した。ＳＫ13土坑、Ｐ4･27と重複し、いずれの遺構よりも古い。南側一部を撹乱に壊されている。平面形は東西にやや長い楕円形で、規模は長軸116cm以上、短軸104cm以上、深さは39cmである。堆積土は２層で、遺物は１層から丸瓦片１点、平瓦片２点、２層より須恵器坏片１点、丸瓦片１点、平瓦片９点が出土した。第24図に示したのは１点である。３は２層出土の須恵器坏片１点で、底部はヘラケズリである。

ＳＫ25土坑　調査区東壁中央で検出した。北側でＰ74と重複する。東側は調査区域外に延びているため不明だが、調査区内では南北に長い楕円形である。規模は、東壁断面で104cm、深さ27cmである。堆積土は3層で、遺物は平瓦片２点が出土した。

ＳＫ26土坑　調査区中央東寄りで検出した。ＳＫ16土坑、Ｐ19･79･80･92と重複し、ＳＫ16土坑、Ｐ19･79･80よりも古くＰ92よりも新しい。平面形は方形を基調とするが北側でやや不整になる。規模は、長軸130cm以上、短軸は80cm、深さ32cmである。底面はおおむね平坦で、堆積土は単層である。遺物は出土していない。

ＳＫ27土坑　調査区中央で検出した。ＳＤ２溝跡、ＳＫ28土坑と重複し、西側を同遺構に壊されている。そのため平面形は不明であるが、南北方向に長い楕円形と思われる。底面は北半が浅く、南半で深く掘り込まれる。規模は長軸134cm、短軸54cm以上、深さは北側で12cm、南側で50cmである。堆積土は２層である。遺物は出土していない。

ＳＫ28土坑　調査区中央で検出した。ＳＤ２溝跡、ＳＫ27土坑と重複し、ＳＤ２溝跡よりも古くＳＫ27土坑よりも新しい。東側は溝跡に壊されているが、平面形は南北方向に長い楕円形と思われる。規模は、長軸82cm以上、短軸44cm以上、深さ27cmである。堆積土は単層である。遺物は出土していない。

４）ピット

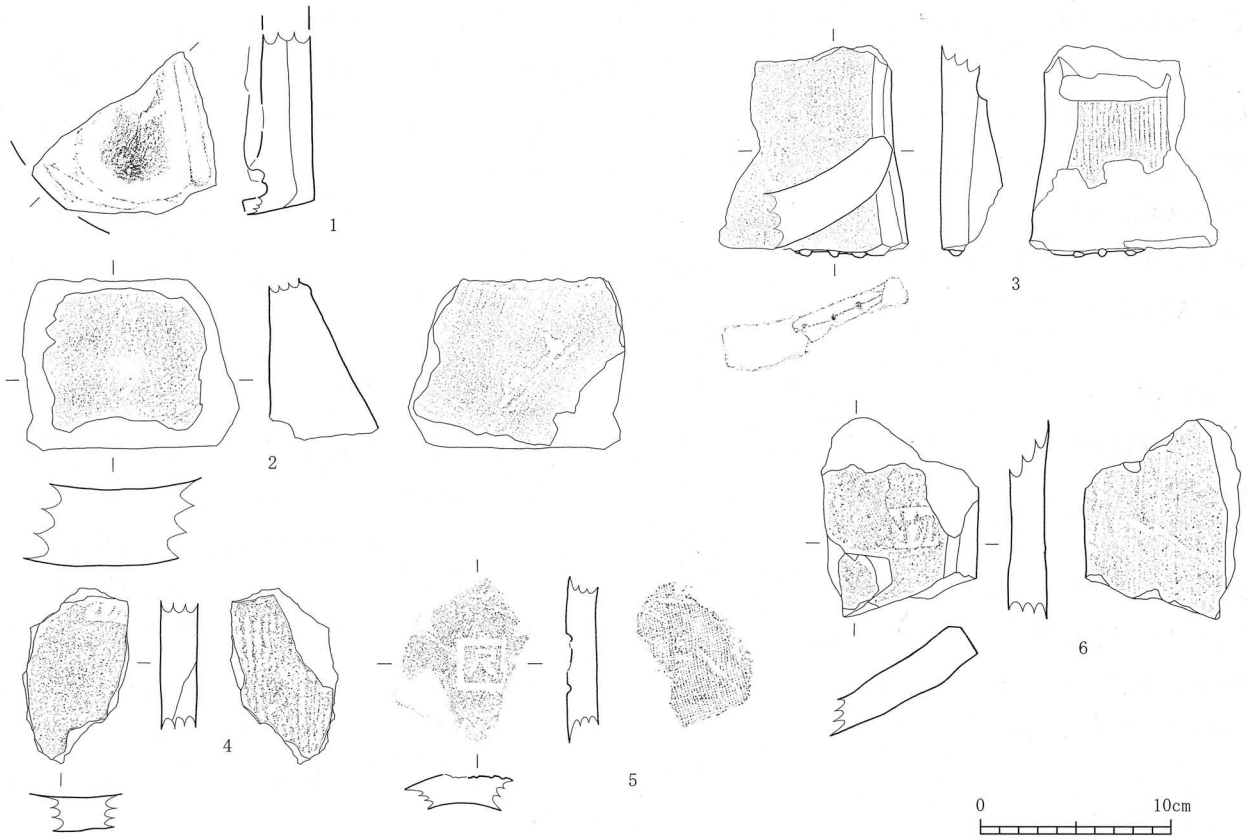
調査区全域に分布し146基を検出した。検出面はⅢ層であるが、調査区壁断面を観察する限り、Ⅱ層上面から掘り込まれる比較的新しいものも含まれている。竪穴住居跡や竪穴遺構、溝跡よりも古いピットはほとんど見られず、大半はピット以外の遺構を切っている。規模は直径20～60cmのものも見られるが、25～40cm程度の小規模なものが大半である。柱痕跡を確認したピットは、Ｐ１・19･40･50･52･56･61･87･110など一部であるが、掘立柱建物跡を構成するものは見受けられない。Ｐ３・４・７、18～21、26、31、40～44、46、48･49、52、56～58、60･61、87、94、136で土師器甕、坏、須恵器坏、ロクロ土師器坏、丸瓦、平瓦の小片が出土したが、図化し得る遺物はほとんどなかった。Ｐ43では平瓦、丸瓦が２点出土し、第24図で示している。

５）遺構外出土遺物

今回の調査で出土した遺物のうち、その半数である平箱６箱が表土および基本層Ⅰ・Ⅱ層、ないしは撹乱出土である。とりわけ調査区内の撹乱内だけでも４箱分出土している。軒丸瓦、軒平瓦を各１点ずつ含むほかはすべて丸瓦、平瓦のいずれかであり、土器は認められなかった。このうち、特徴的なものを第25図に示した。１は重弁蓮華文軒丸瓦、２は偏向唐草文軒平瓦である。４～６は刻印瓦で４・６は平瓦の凸面に「物」を、また５は丸瓦の凸面に「尺」を刻印している。

No.	規　　模（長軸×短軸×深さ）	No.	規　　模（長軸×短軸×深さ）	No.	規　　模（長軸×短軸×深さ）	No.	規　　模（長軸×短軸×深さ）	No.	規　　模（長軸×短軸×深さ）	No.	規　　模（長軸×短軸×深さ）
1	46×37×28	26	39×33×-	51	43×32×11	76	33×（13）×16	101	22×20×19	126	（53）×40×30
2	20×18×19	27	44×42×26	52	37×23×23	77	12×11×5	102	34×23×9	127	19×17×15
3	32×16×19	28	18×15×7	53	20×18×11	78	21×14×19	103	48×39×29	128	20×18×13
4	26×18×11	29	23×17×7	54	37×32×15	79	（36）×28×20	104	20×20×17	129	22×21×14
5	（20）×（15）×26	30	18×（13）×12	55	30×（26）×22	80	（36）×18×2	105	98×28×12	130	43×26×7
6	（24）×（30）×19	31	34×20×27	56	26×22×32	81	27×（12）×27	106	（38）×（25）×23	131	24×20×13
7	49×36×19	32	23×20×13	57	（22）×15×10	82	27×23×26	107	31×23×16	132	（24）×（23）×-
8	27×26×15	33	18×15×15	58	37×36×31	83	19×17×22	108	35×27×10	133	36×33×10
9	（30）×（20）×9	34	36×26×23	59	36×22×23	84	17×17×20	109	67×43×18	134	22×（15）×17
10	17×14×5	35	24×（14）×19	60	22×17×28	85	（88）×（28）×11	110	53×（32）×30	135	（32）×22×27
11	16×16×7	36	20×15×10	61	39×34×-	86	28×（8）×11	111	35×30×15	136	（33）×28×26
12	18×17×4	37	20×13×6	62	（15）×（12）×10	87	44×（20）×33	112	30×30×11	137	29×18×21
13	（27）×22×15	38	20×14×10	63	（34）×30×12	88	36×（28）×10	113	40×31×-	138	38×23×35
14	18×18×20	39	（36）×（33）×10	64	（50）×（30）×10	89	（42）×（23）×10	114	38×（22）×5	139	33×24×18
15	20×17×9	40	39×32×27	65	26×（15）×11	90	32×（13）×14	115	20×18×-	140	30×21×23
16	26×24×40	41	24×23×11	66	83×（40）×6	91	（26）×（14）×15	116	26×18×19	141	26×23×12
17	23×15×11	42	33×30×32	67	30×22×8	92	（34）×（45）×14	117	（18）×（10）×15	142	43×35×19
18	80×（16）×14	43	46×28×12	68	23×21×5	93	41×（28）×19	118	（47）×（23）×14	143	30×28×13
19	30×26×22	44	22×18×31	69	38×（30）×13	94	54×50×48	119	21×（20）×14	144	27×20×10
20	66×40×17	45	20×18×-	70	（36）×（30）×13	95	（19）×19×16	120	16×14×13	145	18×（12）×13
21	23×（10）×22	46	40×33×21	71	（52）×（35）×14	96	28×（18）×4	121	24×（7）×5	146	（37）×26×8
22	46×（29）×63	47	42×31×29	72	（18）×（16）×13	97	14×13×10	122	32×（24）×27	147	
23	20×12×-	48	37×（28）×17	73	26×（14）×10	98	24×17×5	123	（24）×（10）×9	148	
24	35×31×19	49	25×（18）×34	74	28×17×9	99	24×18×17	124	（30）×（20）×19	149	
25	50×（37）×6	50	40×30×24	75	17×14×7	100	15×（9）×33	125	（40）×（25）×20	150	

第２表　ピット計測表



No.	登録番号	遺構名・位置	種別	凹　　面	凸　　面	備　　考	写真図版
1	F－7	撹乱	軒丸瓦			重弁蓮華文	19－9
2	G－18	撹乱	軒平瓦	布目→ナデ	ナデ（縦）		
3	G－17	撹乱	軒平瓦	布目→ナデ(縦）→側面ケズリ	ナデ(縦)→側面ケズリ→ナデ	偏行唐草文・瓦当面欠損	19－8
4	G－20	撹乱	平瓦	布目→ナデ	縄叩き(縦)	刻印「物」	19－10
5	F－11	撹乱	丸瓦	布目	ナデ（横）	刻印「尺」	19－11
6	G－19	撹乱	平瓦	布目→一部ナデ→側面ケズリ	縄叩き(縦)→ナデ(縦)	刻印「物」	19－12

第25図　遺構外出土遺物

まとめ

今回調査地点は陸奥国分尼寺跡の遺跡範囲北東側で、推定寺域の東辺北寄りに位置する。調査の結果、Ⅲ層上面で古代の竪穴住居跡１軒、竪穴遺構２基、溝跡６条、土坑28基（倒木痕１基含む）、ピット多数を検出した。

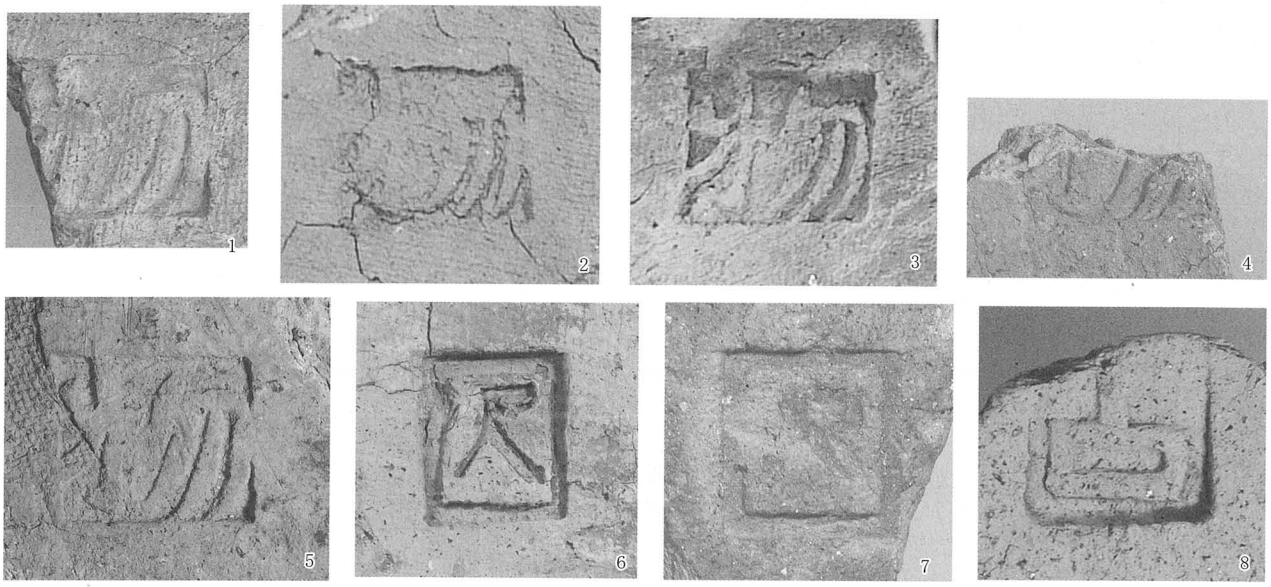
ＳＩ1竪穴住居跡は西壁にカマドをもつ住居跡で、カマド袖の芯材に丸瓦を用いている。またカマド燃焼部からは完形の非ロクロ土師器甕、南壁際堆積土１層からは須恵器高台付坏が出土した。出土遺物より、住居跡は陸奥国分尼寺の創建より下る８世紀半ば以降と考えられる

溝跡は６条検出した。このうちＳＤ２溝跡は、ＳＩ１竪穴住居跡やＳＩ２竪穴遺構を切っており、堆積土中からは礫を伴って大量の瓦片が出土している。ＳＤ３溝跡も堆積土中に瓦片を含むがその量は少ない。両溝跡の同時性や新旧関係は明らかにすることはできないが、平行しており、ともに陸奥国分尼寺跡の推定寺域線の方位にほぼ一致している。また、ＳＩ１竪穴住居跡やＳＩ２竪穴遺構の東壁や西壁の方位も、陸奥国分尼寺跡の推定寺域線方位にほぼ一致する。以上のことは、陸奥国分尼寺が創建される８世紀半ば以降、同寺を意識して土地割されていたことを示している。

これまで、推定寺域東辺に関わる調査は第10次調査で実施されており、東辺中央の位置で、南北棟の掘立柱建物跡が確認された。しかしながら東辺区画施設の発見はなく、掘立柱建物跡も間尺から門跡の可能性は低いこと、また推定寺域の東側でも軒瓦類が出土することから、寺域ラインがさらに東側に位置することを想定している。本調査地点では、推定寺域東辺に推定方位と一致する溝跡が２条見られたが、他遺構との重複関係より、時期は８世紀後半以降と思われる。同溝跡をある段階での区画施設と見なすか否かは、今回の調査成果のみでは判断できず、今後の成果を待ちたい。８世紀後半頃のＳＩ１竪穴住居跡やＳＩ２竪穴遺構も、東辺の位置によりその意味が異なってくる。同様に今後の課題である。

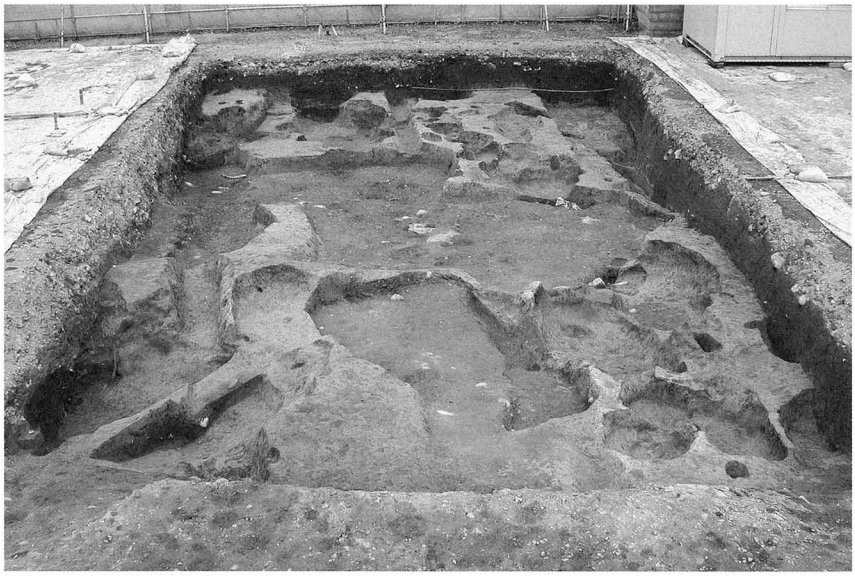
＜参考文献＞

主濱光朗　1999『陸奥国分尼寺跡－第８次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第238集　仙台市教育委員会
渡部弘美　2005『陸奥国分尼寺跡－第10次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第286集　仙台市教育委員会
吉岡恭平　2002「８陸奥国分尼寺跡（第10次調査略報）」『小鶴城跡ほか』仙台市文化財調査報告書第261集　仙台市教育委員会



1.「物」SD2溝跡 平瓦凹面（第22図6）　2.「物」SD2溝跡 平瓦凹面（第22図8）
3.「物」SD2溝跡 平瓦凹面（第22図9）　4.「物」遺構外 平瓦凹面（第25図4）
5.「物」遺構外 平瓦凹面（第25図6）　6.「尺」SD2溝跡 平瓦凹面（第22図5）
7.「尺」遺構外 丸瓦凸面（第25図5）　8.「占」SK8土坑 丸瓦凸面（第24図6）

図版７　刻印瓦



1　完掘状況・北半（南から）

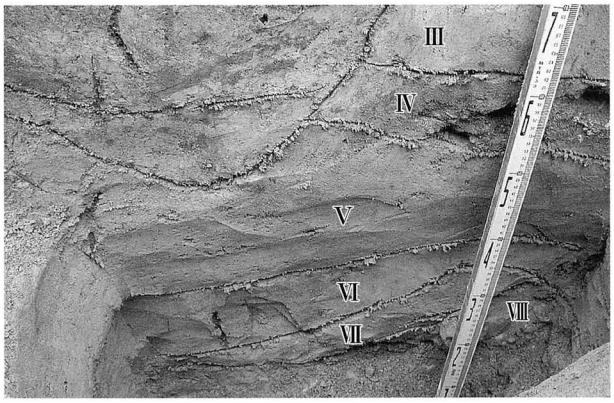
2　完掘状況・北半（北から）

3　完掘状況・南半（南から）

図版８　遺構完掘状況

1　完掘状況・南半（北から）

2　北壁断面（南東から）

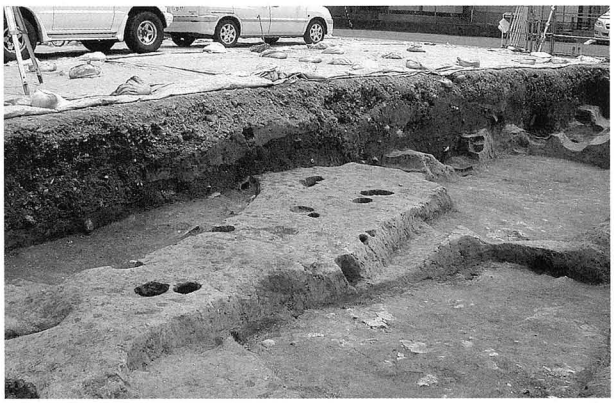


3　下層調査地点（北壁中央）

4　東壁断面（西から）

5　東壁断面・北半（南西から）

6　東壁断面・中央（南西から）



7　東壁断面・南半（北西から）

図版９　完掘状況・基本層序

1　完掘状況（東から）

2　カマド遺物出土状況（東から）

3　カマド完掘状況（東から）

4　カマド断ち割り状況（南から）

5　須恵器杯(No.２)出土状況（東から）

図版10　SI１竪穴住居跡

1　SI２竪穴遺構完掘状況（南から）

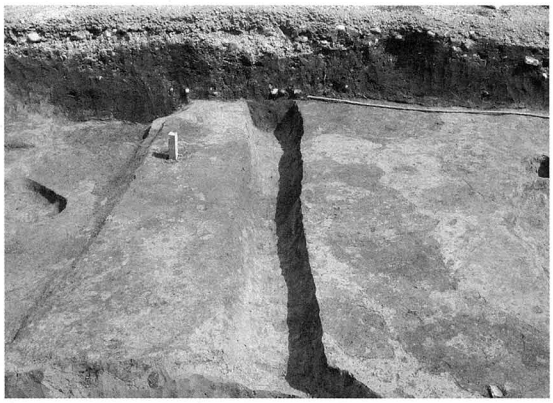
2　P１内平瓦出土状況(No.３)(西から)

3　須恵器甕(No.２)出土状況（東から）

4　SI３竪穴遺構完掘状況（南から）

5　SI３竪穴遺構南北断面（西から）

図版11　SI２・３竪穴遺構



1　ＳＤ１溝跡完掘（南から）

2　SD１溝跡断面（南から）

3　SD２・３溝跡完掘状況（北から）

4　ＳＤ２溝跡完掘状況（南から）

5　ＳＤ２溝跡断面（北から）

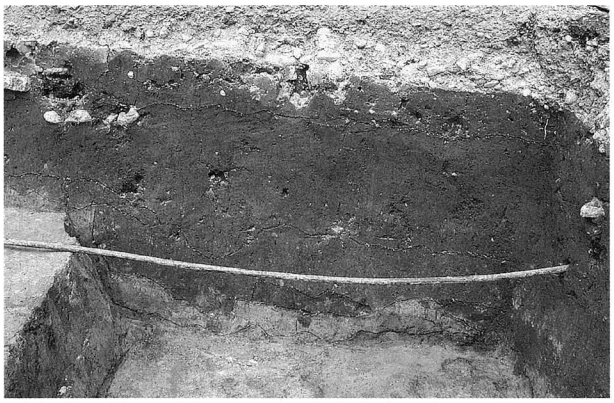
図版12　SD１～３溝跡

1　SD３溝跡完掘状況（北から）

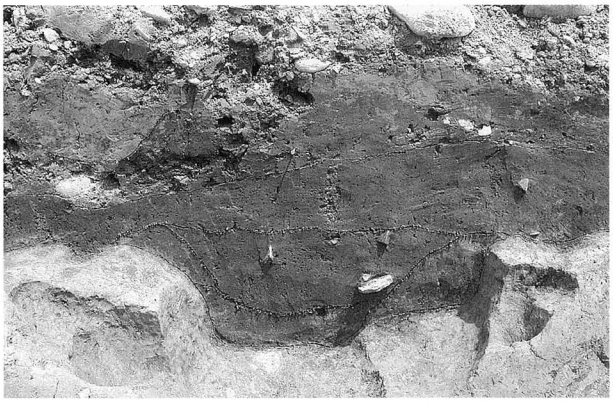
2　SD３溝跡断面（北から）

3　SD４溝跡完掘状況（北から）

4　SD４溝跡内ピット（北から）

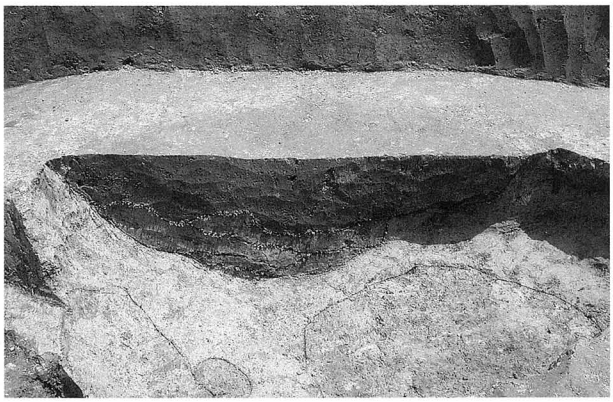


5　SD４溝跡断面（南から）



6　SD５溝跡断面（西から）

7　ＳＫ２土坑完掘状況（西から）

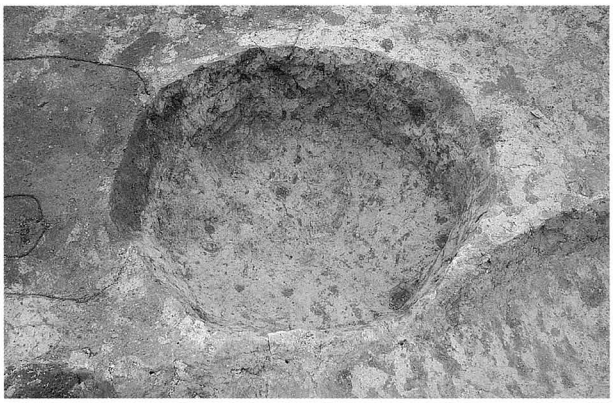


8　ＳＫ２土坑断面（西から）

図版13　SD３～５溝跡・SK２土坑

1　ＳＫ３土坑瓦・礫出土状況（西から）

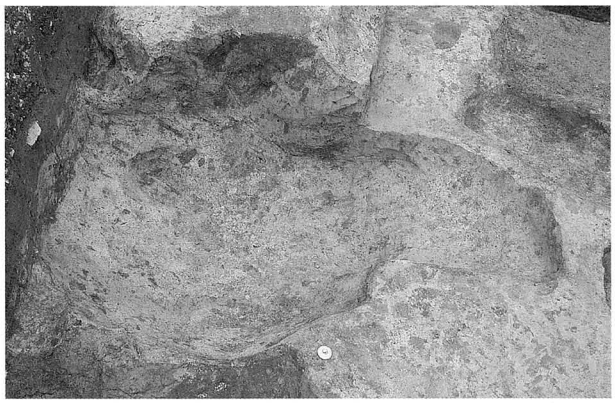
2　ＳＫ３土坑断面（西から）



3　ＳＫ３土坑完掘状況（西から）

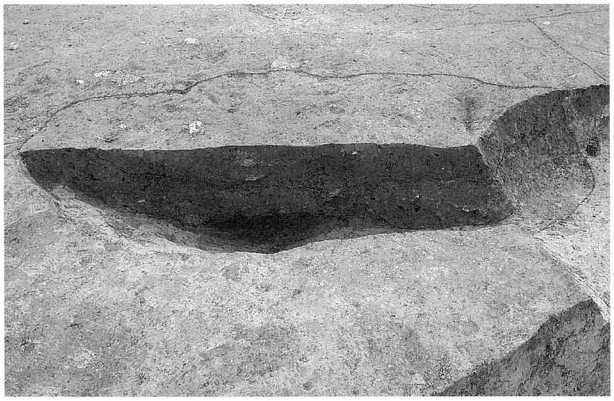
4　ＳＫ４土坑断面（西から）

5　SK５土坑完掘状況・断面（西から）



6　ＳＫ７土坑完掘状況（南から）

7　ＳＫ８土坑完掘状況（東から）

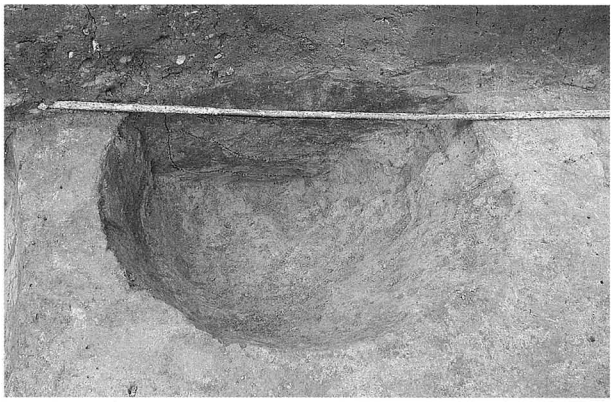


8　ＳＫ８土坑断面（東から）

図版14　土坑(1)

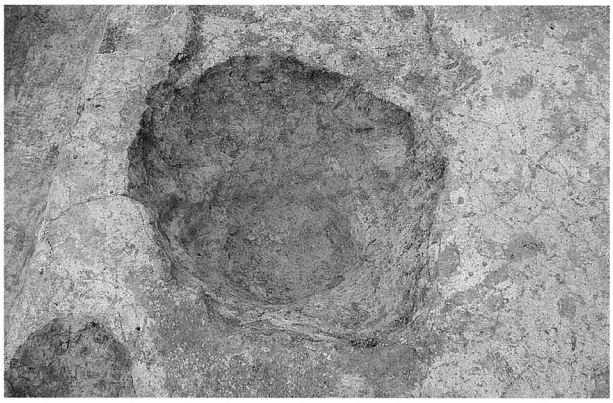
1　ＳＫ９土坑完掘状況（南から）

2　ＳＫ９土坑完掘状況（北東から）



3　ＳＫ10土坑完掘状況（南から）

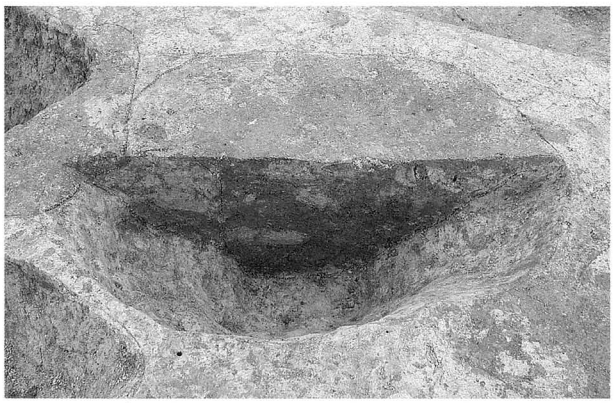
4　SK11土坑完掘状況（西から）



5　ＳＫ12土坑完掘状況（南から）

6　ＳＫ13土坑完掘状況（西から）

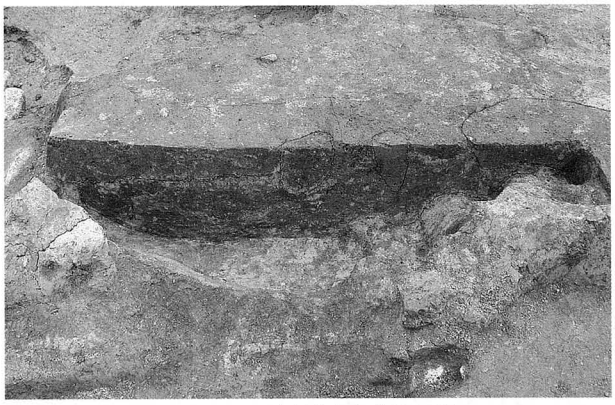
7　ＳＫ16土坑完掘状況（南から）



8　ＳＫ17土坑（西から）

図版15　土坑(2)

1　ＳＫ18土坑完掘状況（西から）



2　ＳＫ18土坑断面（西から）

3　SK20土坑(倒木痕)(南東から)

4　SK20土坑(倒木痕)(北から)

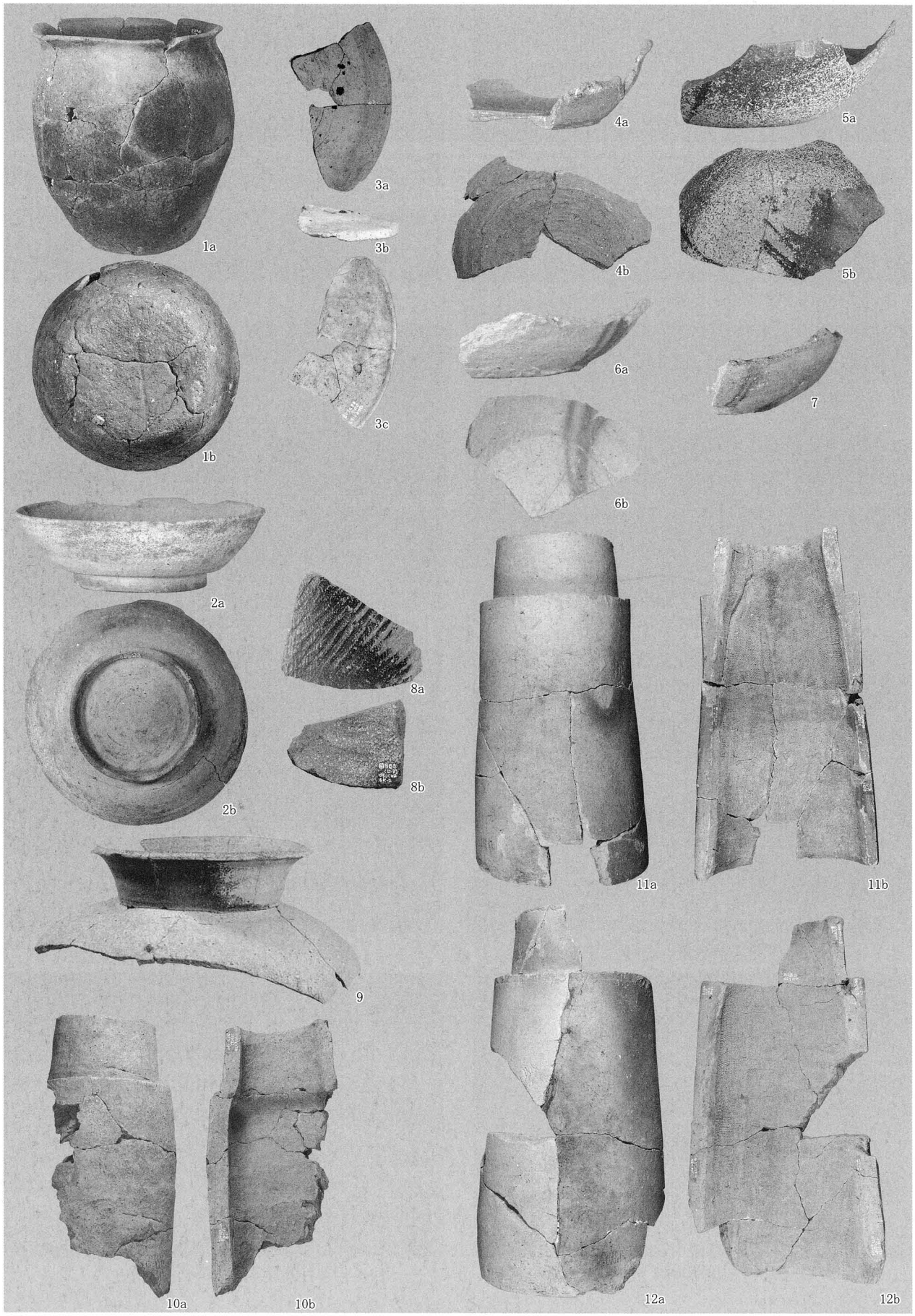
5　SK23土坑完掘状況（西から）

6　SK24土坑完掘状況（北から）

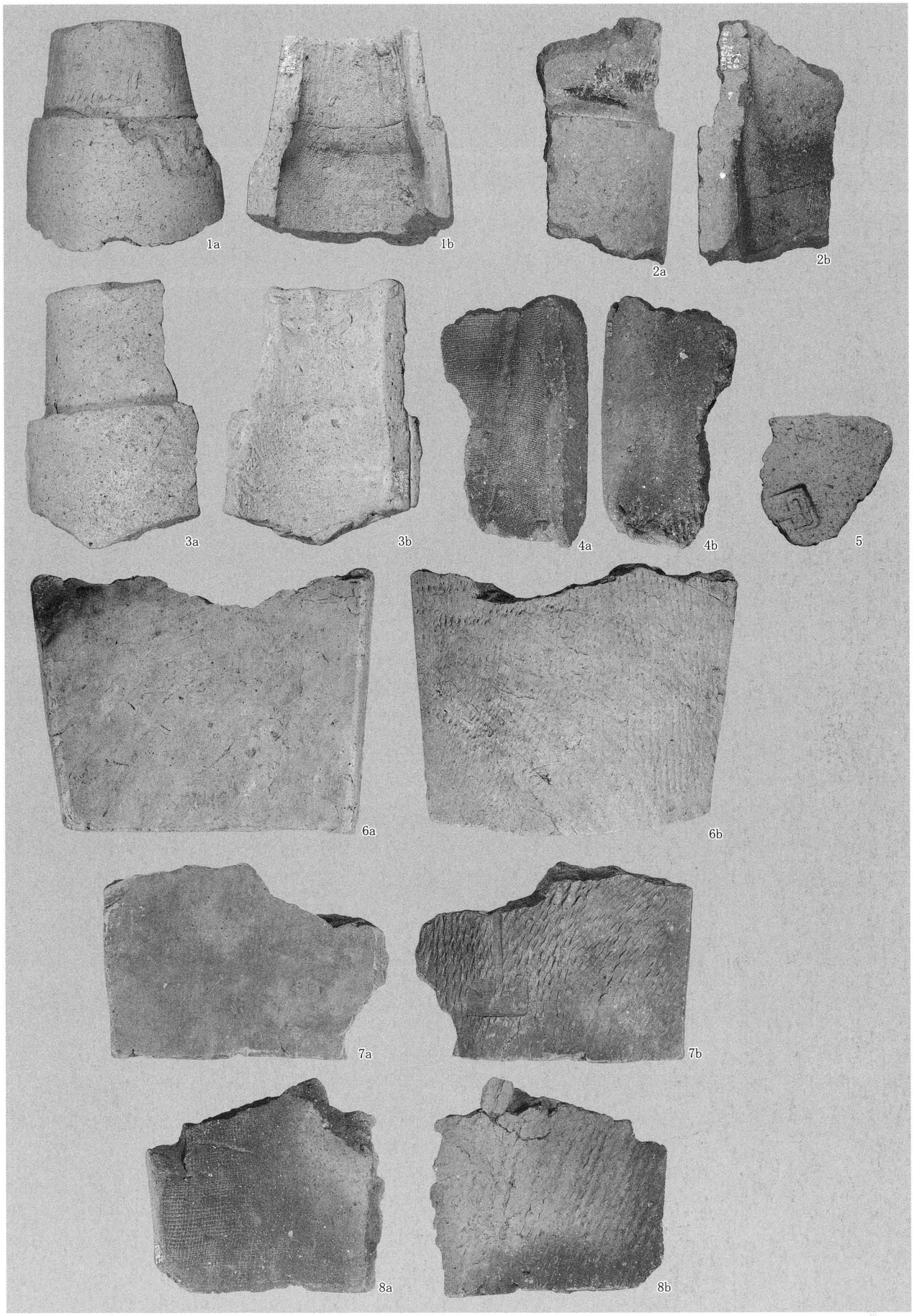
7　SK23・24土坑断面（北東から）

8　SK26土坑完掘状況（西から）

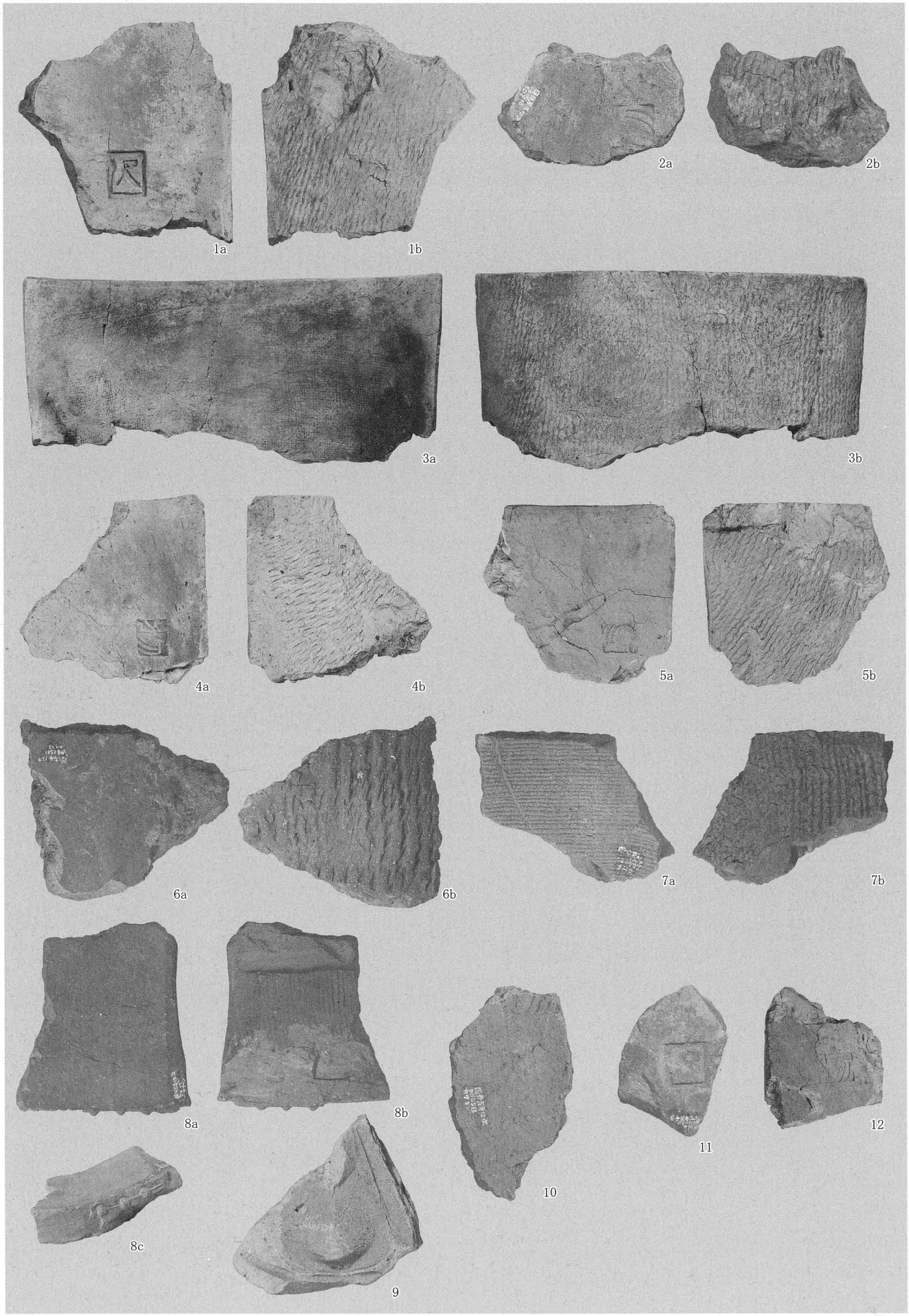
図版16　土坑(3)



図版17　土師器・須恵器・丸瓦



図版18　丸瓦・平瓦



図版19　平瓦・軒丸瓦・軒平瓦

Ⅳ　四郎丸館跡第３次発掘調査報告書

１　調査要項

遺　跡　名	四郎丸館跡（宮城県遺跡番号01240）
調 査 地 点	仙台市太白区四郎丸字戸ノ内93－１、93－２、93－51
調 査 期 間	平成20年５月28日～６月16日
調査対象面積	200㎡
調 査 面 積	200㎡
調 査 原 因	共同住宅建設工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	文化財教諭　佐藤　正弥　　文化財教諭　佐藤　典昭

２　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成19年12月27日付けで地権者より提出された、共同住宅の建築工事に係る「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」（H19教生文第１－35号）に基づき、平成20年３月24日～27日に確認調査を実施した。確認調査（１～５トレンチ）の結果、遺構の存在が確認されたため、建物範囲全域を対象とした本調査を実施した。なお発掘届は、調査終了後に平成20年６月24日付けで提出された（H20教生文第184－98号）。

建物範囲全域（東西約22.2m×南北約９m）を調査区として設定し、重機により盛土及び現代～近世頃までの水田層を除去した。その後、Ⅳ層上面で人力による遺構検出作業を実施した。調査区東端に南北約2.5m、東西0.5mの下層調査区を設定し調査を行い、堆積状況を記録し、すべての調査を終了した。

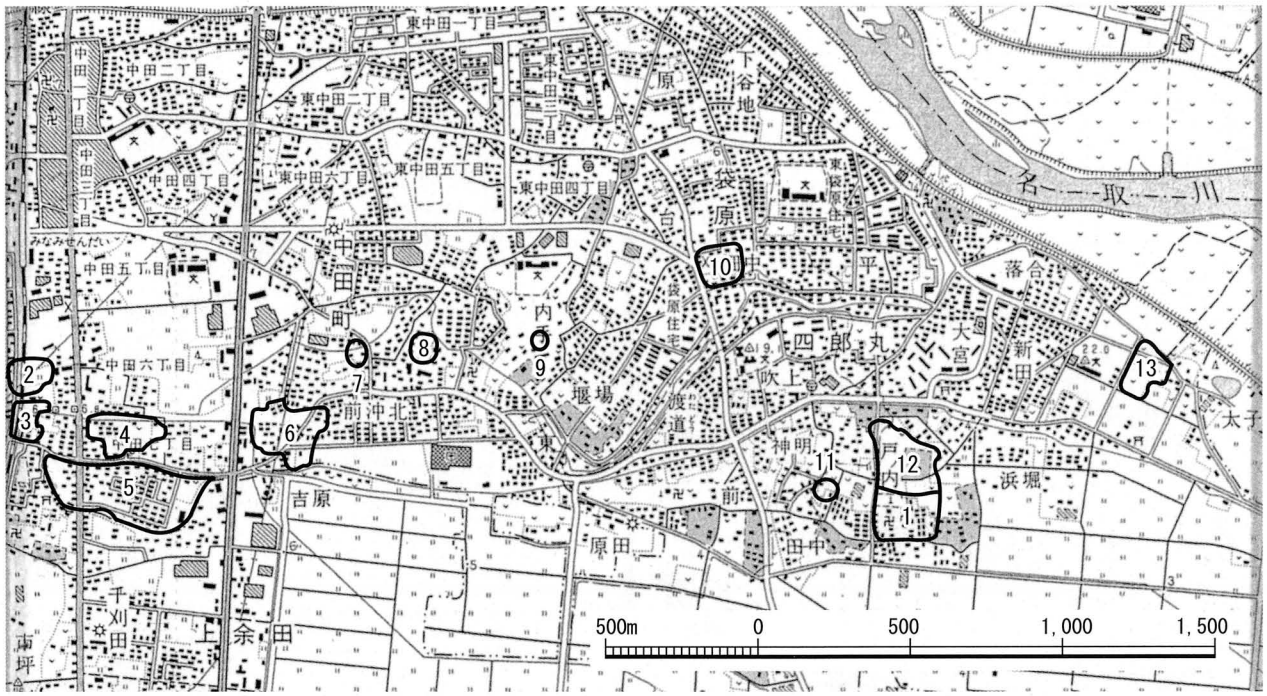
尚、確認調査では、Ⅴ層上面で小規模な溝跡を２条発見したが、本調査では下層調査区のⅤ層上面には遺構がなく、Ⅴ層上面での遺構の広がりは確認できなかった。さらに上層からの撹乱が広範囲に及んでいたため、本調査ではⅤ層上面の調査を行わなかった。

３　遺跡の位置と環境

四郎丸館跡はＪＲ東北本線南仙台駅の東方約３㎞、名取川の南岸の自然堤防上に位置している。名取川の河口からは約４㎞で、標高は３～3.5mである。東側と南側には水田として利用されている低湿地が迫っており、水田との比高差は約１mである。

四郎丸館跡は、藤原秀衡の家臣である名取四郎の居館、同氏が源頼朝に滅ぼされた後は曽我氏の居館、さらに室町末期には伊達家家臣菅井和泉守実国の居館として伝えられてきた。平成６年の第１次調査では四郎丸館跡に関連すると考えられる遺構や近世の屋敷跡に関する遺構が検出されている（竹田ほか1995）。また、第１次調査で３基、平成８年の第２次調査で１基の方形周溝墓が確認されるなど、館跡としてだけでなく古墳時代の墓域であったことが明らかになってきている（竹田ほか1995、平間ほか1997）。

古墳時代の集落跡は、当遺跡に隣接する戸ノ内遺跡、北西１㎞の中田畑中遺跡、北東約１㎞の昭和北遺跡、西方約３㎞の安久東遺跡、西方約2.5～４㎞の中田南遺跡などにおいても確認されている（太田1994）。さらにこれらの集落遺跡のうち戸ノ内、安久東の各遺跡では方形周溝墓が発見されており、方形周溝墓と集落が密接な関係を持ちながら平野の各地に散在している。



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	四郎丸館跡	墓地、集落、城館	自然堤防	古墳、平安、中世	8	前沖北遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
2	前田館跡	城館	自然堤防	中世	9	内手遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
3	塩腰遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安	10	中田畑中遺跡	集落	自然堤防	古墳、奈良、平安
4	中田北遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安	11	神明遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
5	中田南遺跡	集落、屋敷	自然堤防	縄文晩、弥生中、古墳、奈良、平安、中世	12	戸ノ内遺跡	集落、墓地	自然堤防	弥生、古墳、奈良、平安、中世
6	後河原遺跡	水田	自然堤防、後背湿地	弥生、奈良、平安、中世、近世	13	昭和北遺跡	集落	自然堤防	古墳、奈良、平安
7	前沖中遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安					

第26図　遺跡の位置と周辺の遺跡

奈良・平安時代には中田南遺跡などで集落の拡大が認められる他、当遺跡を含む新しい集落もその周辺に点在するようになる。

中世になると平野西側の高館丘陵の上には大規模な山城が築かれ、平地には当遺跡の他、安久東遺跡、前田館跡、中田南遺跡など、城館や居館・屋敷が数多く造られている。

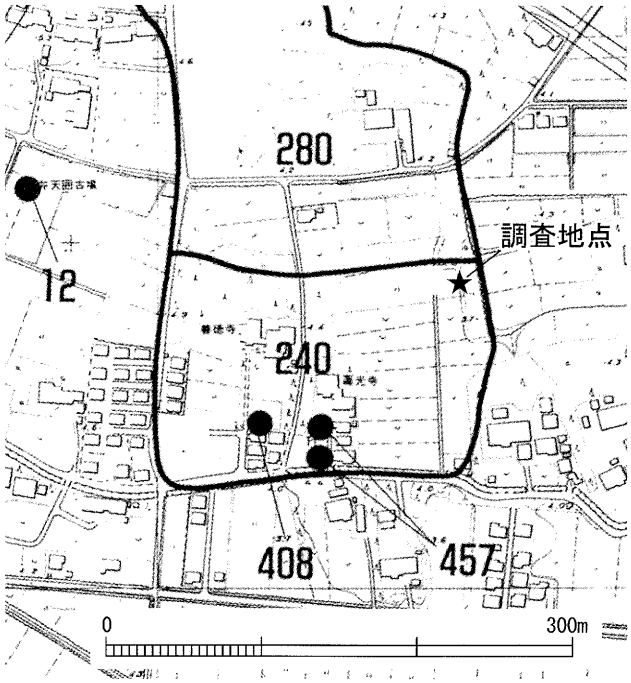
近世の名取川沿いの地域は農村地帯である。「封内風土記」によれば、当遺跡の含まれる四郎丸村は約60戸の屋敷があったとされる。第１次調査では、文政年間に作られた「名取郡北方四郎丸邑絵図」に描かれた屋敷に関連すると考えられる建物跡や溝跡が発見されている（仙台市史編さん委員会2006）。

4　基本層序

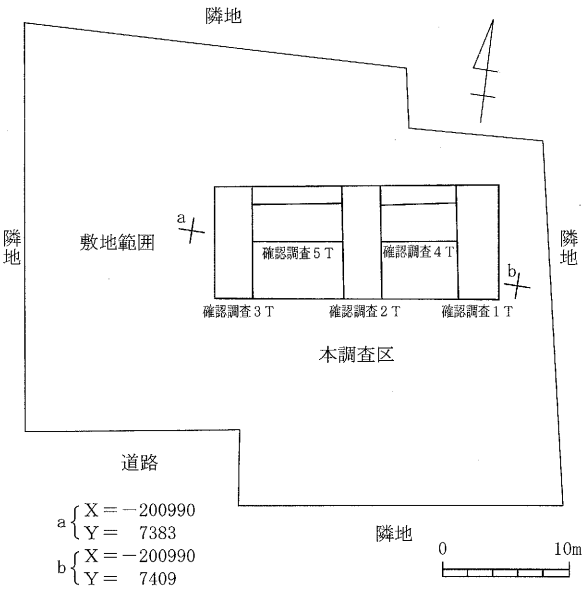
調査地点は120～160cm の盛土がある。基本層序はⅠ～Ⅸ層が確認され、全体的に酸化鉄を多く含んでいる。Ⅰ層は層厚10～20cm の現代水田層、Ⅱ層は層厚20～50cm旧水田層で、ともに部分的にグライ化している。Ⅲ層はにぶい黄褐色の粘土質シルト層で、水田の床土であると考えられる。Ⅳ層は黒褐色の粘土層である。Ⅴ層はにぶい黄褐色の粘土質シルト層で、褐灰色のシルト質粘土を多く含んでいる。Ⅵ層以下は下層調査で確認された。Ⅵ層は灰オリーブ色の砂層である。Ⅶ層は黄褐色の砂質シルト層、Ⅷ・Ⅸ層は褐灰色の粘土層である（Ｐ50基本層土層註記表）。尚、遺構確認面はⅢ・Ⅳ・Ⅴ層である。

5　発見遺構と出土遺物

Ⅲ層上面で井戸跡１基、Ⅳ層上面で溝跡８条、土坑１基、井戸跡１基、ピット２基、性格不明遺構２基、Ⅴ層上面で溝跡２条を検出した。



第27図　調査地点の位置



第28図　調査区配置図

①Ⅲ層上面発見の遺構

１）井戸跡

ＳＥ２井戸跡　調査区中央で検出した。素掘りで井戸枠等は確認されていなかった。平面形は南北にやや長い楕円形で、断面形は下に窄まる円筒状である。検出面から120cm の深さまで調査し、堆積土４層を確認した。底面は検出していない。規模は上端で長軸76cm、短軸62cm、確認した最深部で長軸48cm、短軸35cm である。遺物は出土していない。

②Ⅳ層上面発見の遺構と遺物

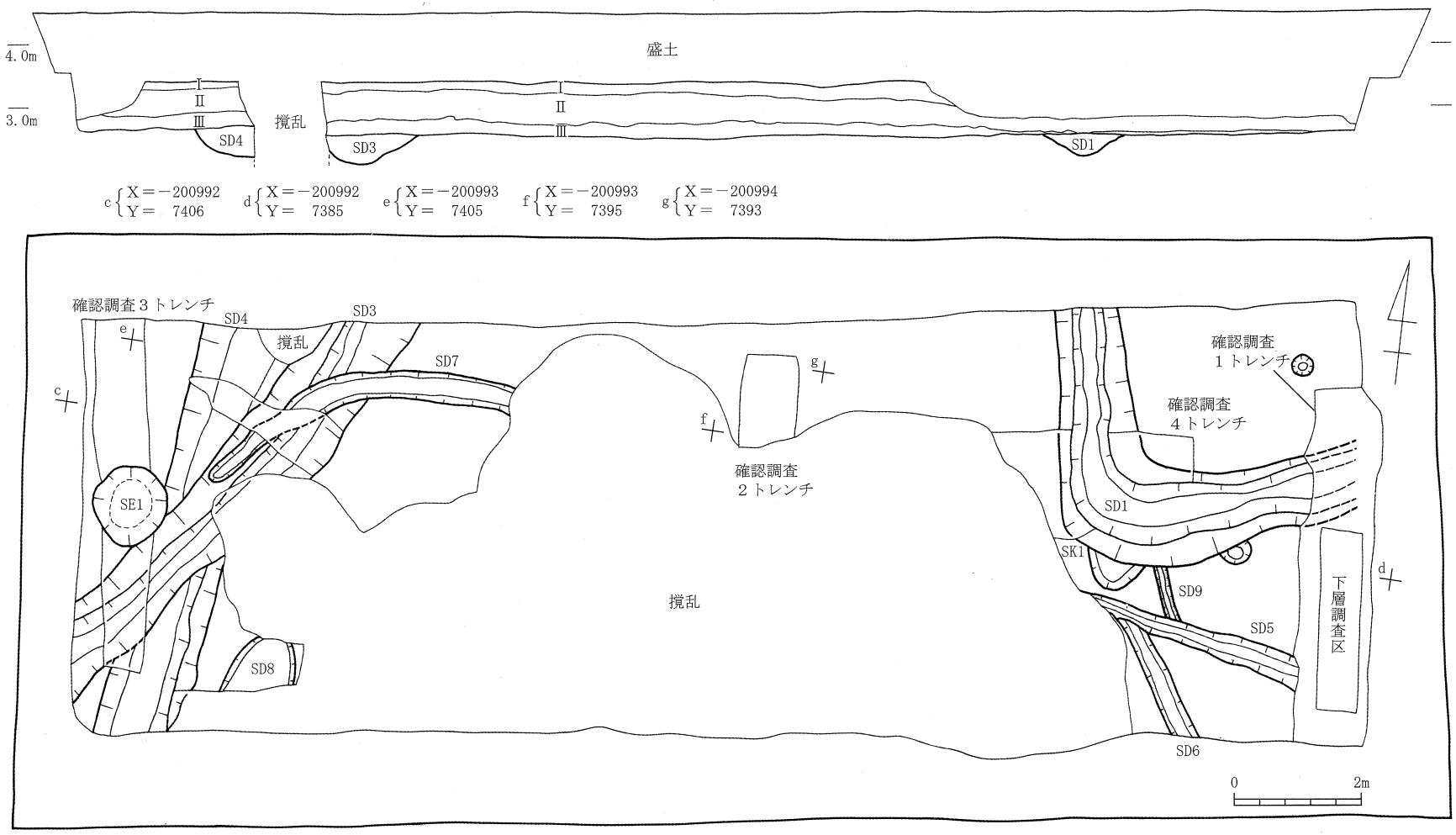
１）溝跡

ＳＤ１溝跡　調査区東側で検出した。ＳＤ９溝跡、ＳＫ１土坑、Ｐ１、Ｐ２と重複し、いずれの遺構よりも新しい。東西方向から南北方向に屈曲し、北側および東側はそれぞれ調査区外へ延びている。規模は検出長で東西方向が380cm、南北方向が390cm、幅は上端で90～180cm、底面で30～100cm、確認面からの深さは北側で25～27cm、屈曲部で20～22cm、東側で40～41cm である。方位は東西方向がＮ－71°－Ｅ、南北方向がＮ－13°－Ｗである。断面形は逆台形で、堆積土は２層に分かれる。遺物は確認調査１トレンチの1層上面で、古墳時代前期の土師器甕の口縁部から胴上半部破片が約10点出土している。

ＳＤ３溝跡　調査区西側で検出した。北側および西側は調査区域外に延びている。ＳＤ４・７溝跡、ＳＥ１井戸跡と重複し、一部が撹乱により削平を受けている。ＳＤ７溝跡、ＳＥ１井戸跡よりも古く、ＳＤ４溝跡よりも新しい。方位はＮ－36°－Ｅ、規模は検出長で700cm、幅は上端で100～160cm、底面で20～50cm、確認面からの深さは北側で40～45cm、西側で10～17cmである。断面形は逆台形で、堆積土は２層に分かれる。遺物は出土していない。

ＳＤ４溝跡　調査区西側で検出した。南北両側が調査区域外に延びている。ＳＤ３溝跡、ＳＥ１井戸跡と重複し、本遺構の方が古い。一部が撹乱により削平を受けているが、底面は全体が残っている。方位はＮ－17°－Ｗ、規模は検出長で650cm、幅は上端で120～180cm、底面で50～80cm、確認面からの深さは北側で39～42cm、南側で28～36cmである。断面形は逆台形で、堆積土は３層に分かれる。遺物は出土していない。

ＳＤ５溝跡　調査区南東で検出した。東西に延びる溝跡で西側は撹乱に壊され、東端部は東壁断面で確認されない



第29図　調査区全体図

基本層	土色		土性	備考
Ⅰ	7.5Y3/1	オリーブ黒色	シルト質粘土	現代水田層。酸化鉄を少量含む。部分的にグライ化。
Ⅱ	7.5Y4/2	灰オリーブ色	シルト質粘土	旧水田層。下部に酸化鉄を多量に含む。炭化物粒を少量含む。一部グライ化。
Ⅲ	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む。炭化物粒を少量含む。
Ⅳ	10YR3/2	黒褐色	粘土	遺構確認面。酸化鉄を多量に含む。マンガン粒を多量に含む。
Ⅴ	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む。シルト質粘土（10YR4/1）を多量に含む。
Ⅵ	7.5Y5/2	灰オリーブ色	細砂	酸化鉄を管状に多量に含む。マンガン粒を中量含む。
Ⅶ	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト	Ⅵ層土をブロック状に多量に含む。酸化鉄を管状に多量に含む。
Ⅷ	10YR6/1	褐灰色	粘土	酸化鉄をブロック状に多量に含む。マンガン粒を少量含む。
Ⅸ	10YR4/1	褐灰色	粘土	酸化鉄を粒状に少量含む。マンガン粒を微量に含む。

ことから、排水用の側溝により削平されており、不明である。ＳＤ６・９溝跡と重複し、本遺構がもっとも新しい。方位はＮ－79°－Ｗ、規模は検出長で350cm、幅は上端で30～50cm、底面で10～20cm、確認面からの深さは西側で８～10cm、東側で８～10cmである。断面形はＵ字形で、堆積土は１層である。遺物は出土していない。

ＳＤ６溝跡　調査区東側で検出した。南北に延びる溝跡で北側はＳＤ５溝跡と重複し、本遺構が古い。南側は調査区域外に延びている。北側はＳＤ５溝跡を境に延びていかない。方位はＮ－33°－Ｗ、規模は検出長で200cm、幅は上端で30～40cm、底面で15～20cm、確認面からの深さ８～10cmである。断面形はＵ字形で、堆積土は１層である。遺物は出土していない。

ＳＤ７溝跡　調査区西側北部で検出した。緩やかに弧を描いて東西に延び、東側は撹乱に壊されている。ＳＤ３・４溝跡と重複し、本遺構がもっとも新しい。規模は検出長で300cm、幅は上端で25～50cm、底面で10～30cm、確認面からの深さ５～10cmである。断面形はＵ字形で、堆積土は１層である。遺物は出土していない。

ＳＤ８溝跡　調査区西側南端で検出した。南北方向に延びる溝跡と思われるが、土坑の可能性もある。北側および南側は撹乱により削平を受けている。規模は検出長で80cm、幅は上端で50～110cm、底面で35～100cmで、確認面からの深さが15～20cmである。断面形はＵ字形で、堆積土は１層である。遺物は出土していない。

ＳＤ９溝跡　調査区東側で検出した。南北方向に延びる溝跡で、ＳＤ１・５溝跡と重複し、本遺構がもっとも古い。重複遺構からの延長は認められなかった。方位はＮ－23°－Ｗ、規模は検出長で162cm、幅は上端で約18cm、底面で約8cm、確認面からの深さは10～12cmである。断面形はＵ字形で、堆積土は１層である。遺物は出土していない。

２）土坑

ＳＫ１土坑　調査区東側で検出した。北側はＳＤ１溝跡に壊されている。平面形は楕円形で、規模は長軸100cm以上、短軸100cm、深さは20cmである。断面形は浅い皿状で、底面は平坦である。堆積土は１層である。遺物は出土していない。

３）井戸跡

ＳＥ１井戸跡　調査区西側で検出した。ＳＤ３・４溝跡と重複し、本遺構の方が新しい。素掘りで井戸枠等は確認されていなかった。平面形は南北にやや長い楕円形で、断面形は下に窄まる円筒状である。検出面から120cmの深さまで調査し、堆積土４層を確認した。底面は検出していない。規模は上端で長軸130cm、短軸128cm、確認した最深部で長軸75cm、短軸62cmである。遺物は出土していない。

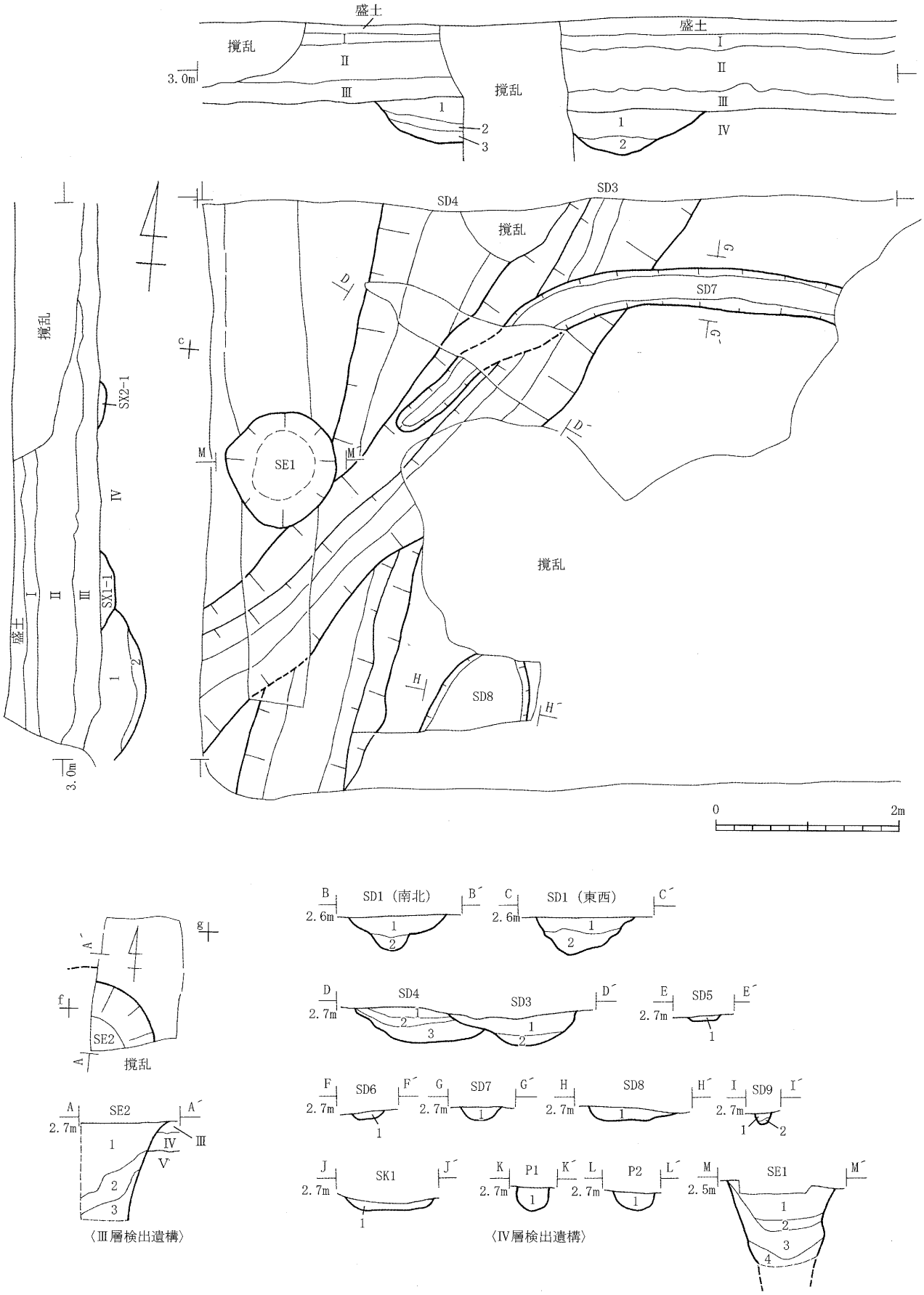
４）ピット

Ｐ１　調査区東側で検出した。平面形は円形で、直径20cm、深さ27cmである。断面形はＵ字形で、堆積土は１層である。柱根跡は確認されなかった。遺物は土師器片が数点出土している。

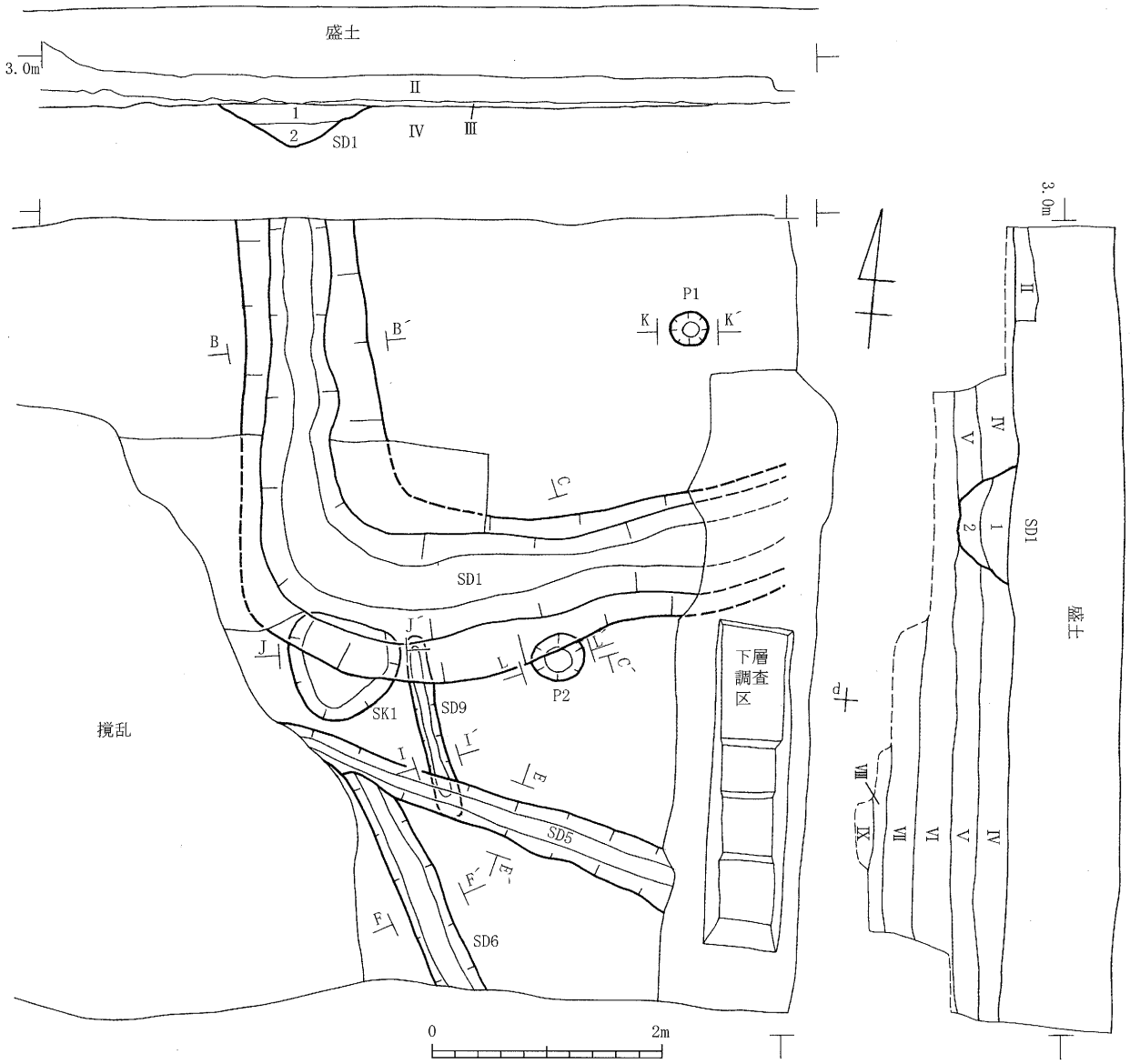
Ｐ２　調査区東側で検出した。ＳＤ１溝跡と重複し、同溝跡に切られている。平面形は楕円形で、長軸45cm、短軸40cm、深さ21cmである。断面形はＵ字形で、堆積土は１層である。柱根跡は確認されなかった。遺物は土師器片が数点出土している。

５）性格不明遺構

ＳＸ１・２性格不明遺構　西壁で２ヶ所の落ち込みを確認したが、平面的には確認できなかった。ＳＸ１性格不明遺構はＳＤ３溝跡と重複し、同溝跡を切っている。断面での規模は、幅86cm、深さ17cmである。ＳＸ２性格不明遺構の断面での規模は、幅52cm、深さ８cmである。いずれの遺構も断面形は皿型で、堆積土は１層である。



第30図　Ⅲ・Ⅳ層検出遺構平・断面図

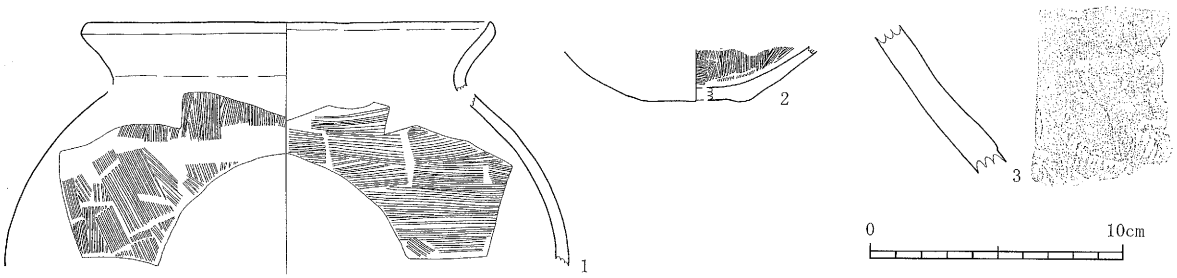


層　位	土　色	土　性	備　考
SD1(南北)－1	10YR4/1　褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄をやや多量に含む。
2	10YR3/1　黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄を下層にブロック状に極多量に含む。
SD1(東西)－1	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄を微量に含む。
2	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄をブロック状に多量に含む。
SD3－1	10YR4/1　褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む。
2	10YR5/1　褐灰色	シルト質粘土	
SD4－1	10YR4/1　褐灰色	シルト質粘土	酸化鉄を多量に含む。
2	10YR5/1　褐灰色	シルト質粘土	酸化鉄を多量に含む。
3	10YR4/1　褐灰色	シルト質粘土	酸化鉄を極多量に含む。
SD5－1	10YR4/1　褐灰色	粘土質シルト	酸化鉄を微量に含む。
SD6－1	10YR3/1　黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄を微量に含む。
SD7－1	10YR4/1　褐灰色	シルト質粘土	酸化鉄を多量に含む。
SD8－1	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄を極多量に含む。
SD9－1	10YR3/1　黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄を多量に含む。
2	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄を極多量に含む。
SK1－1	10YR3/1　黒褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む。
SE1－1	10YR2/2　黒褐色	シルト質粘土	炭化物粒をやや多量に含む。酸化鉄、マンガン粒を少量含む。下位に酸化鉄が集積する。
2	10YR3/2　黒褐色	粘土	炭化物粒をやや多量に含む。マンガン粒を少量含む。
3	10YR3/1　黒褐色	粘土	酸化鉄を多量に含む。炭化物ブロックをやや多量に含む。上位に帯状に集積する。壁際でⅣ層ブロックを含む。
4	10YR3/1　黒褐色	粘土	酸化鉄ブロックを多量に含む。炭化物をやや多量に含む。植物遺存体を少量含む。Ⅳ層よりもやや明るい。
SE2－1	2.5YR3/1　黒褐色	粘土	Ⅳ層ブロックを多量に含む。炭化物ブロックを微量に含む。
2	10YR5/6　黄褐色	シルト質粘土	Ⅳ層集積層。酸化鉄を少量含む。粘土（2.5YR3/1）ブロックを微量に含む。
3	10YR3/2　黒褐色	粘土	Ⅳ層ブロック、酸化鉄をやや多量に含む。
P1－1	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄を極多量に含む。炭化物を多量に含む。
P2－1	10YR3/2　黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄を極多量に含む。炭化物を多量に含む。
SX1・2－1	10YR5/1　褐灰色	粘土	酸化鉄を多量に含む。マンガン粒を少量含む。

第31図　Ⅳ層検出遺構平・断面図

6）出土遺物

Ｐ１、Ｐ２から土師器片がそれぞれ数点、Ｐ１、Ｐ２の西側のⅣ層上面から土師器片が数点出土した。他、Ⅳ層上面から陶器片が数点出土している。第32図に示したのは３点である。１は確認調査１トレンチのＳＤ１溝跡上層出土の土師器甕である。破片の状態でまとまって出土した。全体的に磨滅が進んでおり、口縁部と胴部が接合するかは明らかでないが、胎土、出土状況から同一個体であろう。器壁は非常に薄く、調整は内外面ハケメである。口縁部は外半するが端部でやや内反りになる。２はⅣ層出土の土師器甕底部破片で、底面は上げ底気味である。器壁の薄さ、調整、胎土・色調等、１の土師器甕に類似する。３は常滑甕の肩部で、断面に漆接ぎの痕跡が見られる。時期は不明である。１・２は形態、調整の特徴から、古墳時代前期の土器と思われる。



図中番号	登録番号	出土地点		分類		法量（cm）			特徴（形状・整形・調整）、時期	写真図版
		遺構名・位置	遺構層	種別	器種	器高	口径	底径		
1	C－3	SD１溝跡	上層	土師器	甕	－	－	－	【調整】外面：ハケメ　内面：ハケメ	29－1
2	C－1	調査区北東部	Ⅳ層上面	土師器	甕	(2.1)	－	(4.3)	【形状】底－やや上げ底　【調整】外面：不明（磨滅）内面：ハケメ	29－2
3	I－1	調査区北東部	Ⅳ層上面	陶器		－	－	－	押印（簾状）、漆接ぎか	29－3

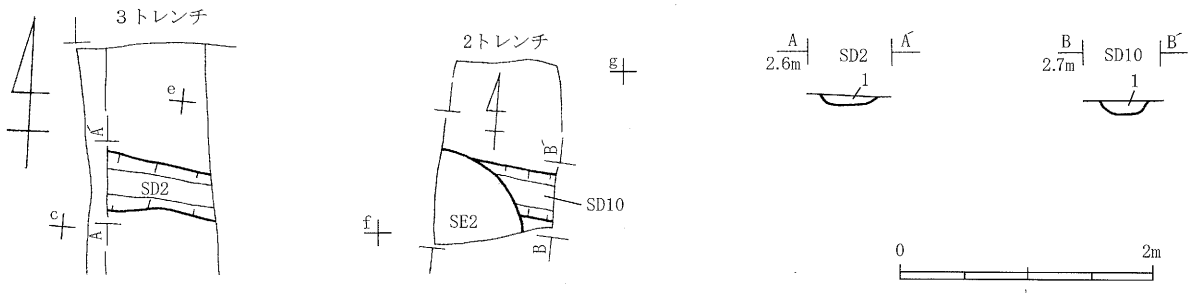
第32図　出土遺物

③Ⅴ層上面発見の遺構

1）溝跡

ＳＤ２溝跡　確認調査３トレンチで検出した。東西方向に延びる溝跡で、方位はＮ－88°－Ｗ、規模は検出長で82cm、上幅で30～40cm、底面幅で20～30cm、確認面からの深さは10cmである。堆積層はⅣ層が入り込む。遺物は出土していない。

ＳＤ10溝跡　調査区中央Ⅴ層上面で検出した。東西方向に延びる溝跡と思われるが、西側はＳＥ２井戸跡に、また東側は撹乱に壊されている。方位はＮ－90°－Ｗ、規模は検出長で80cm、幅は上端で24cm、底面で12cm、確認面からの深さは６～８cmである。断面形はＵ字形で、堆積土は１層である。遺物は出土していない。



層位	土色	土性	備考
SD2－1	10YR3/2　黒褐色	粘土	酸化鉄を多量に含む。マンガン粒を多量に含む。
SD10－1	10YR3/2　黒褐色	粘土	酸化鉄を多量に含む。マンガン粒を多量に含む。

第33図　Ⅴ層検出遺構平・断面図

6　まとめ

Ⅲ層上面で井戸跡1基、Ⅳ層上面で溝跡８条、井戸跡１基、土坑１基、ピット２基、性格不明遺構２基、Ⅴ層上面で溝跡２条を検出した。遺構に帰属する遺物が極めて少なく、ぞれぞれの遺構の時期を明らかにすることはできない。屈曲する溝跡のＳＤ１溝跡は、堆積土上層より古墳時代前期土師器甕破片が少量出土しているが、この土器をもって遺構の時期や性格を推定するのは困難である。周辺調査の成果を待ちたい。

＜参考文献＞

太田昭夫　1994『中田南遺跡－古代・中世の集落跡の調査－』仙台市文化財調査報告書第182集　仙台市教育委員会
竹田幸司　1995『四郎丸館跡』仙台市文化財調査報告書第200集　仙台市教育委員会
平間亮輔・伊藤孝行　1997『四郎丸館跡-第2次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第218集　仙台市教育委員会
仙台市史編さん委員会　2006『仙台市史　特別編7　城館』

1　調査区全景（西から）

2　調査区西側（南から）

3　調査区東側（南から）

図版20　遺構検出状況

1　検出状況全景（南東から）

2　完掘状況全景（西から）

3　完掘状況全景（東から）

図版21　遺構検出・完掘状況

1　調査区全景（南西から）

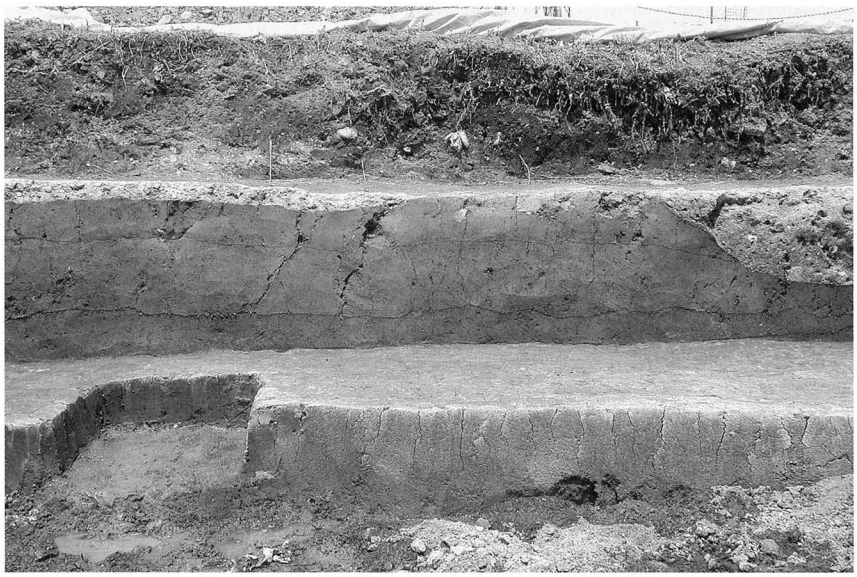
2　調査区西側（南から）

3　調査区東側（南から）

図版22　遺構完掘状況

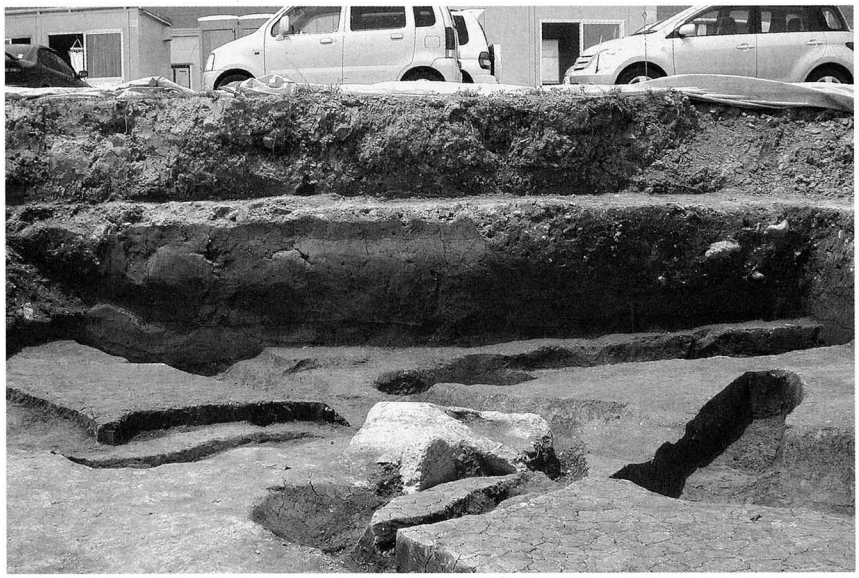
1　全景（南西から）

2　西側（南から）



3　東側（南から）

図版23　北壁断面

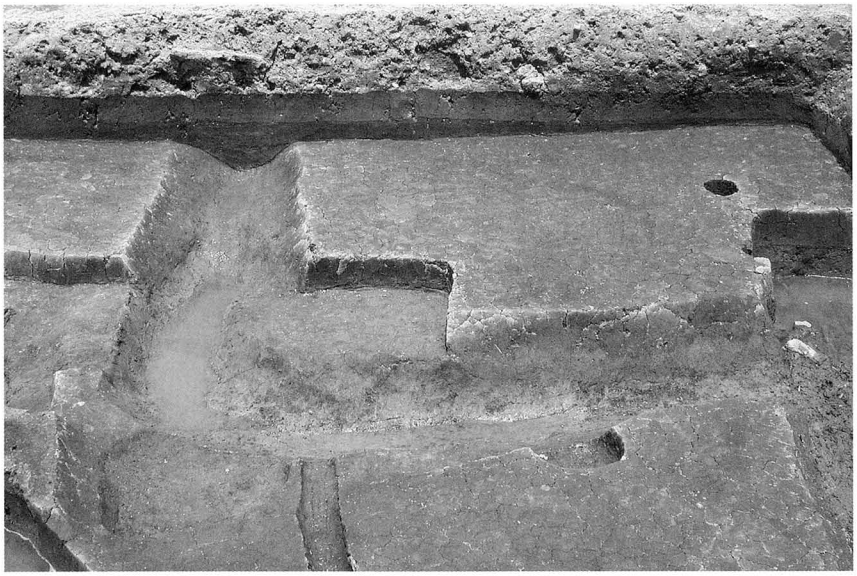


1　西壁断面（東から）

2　東壁断面（南西から）

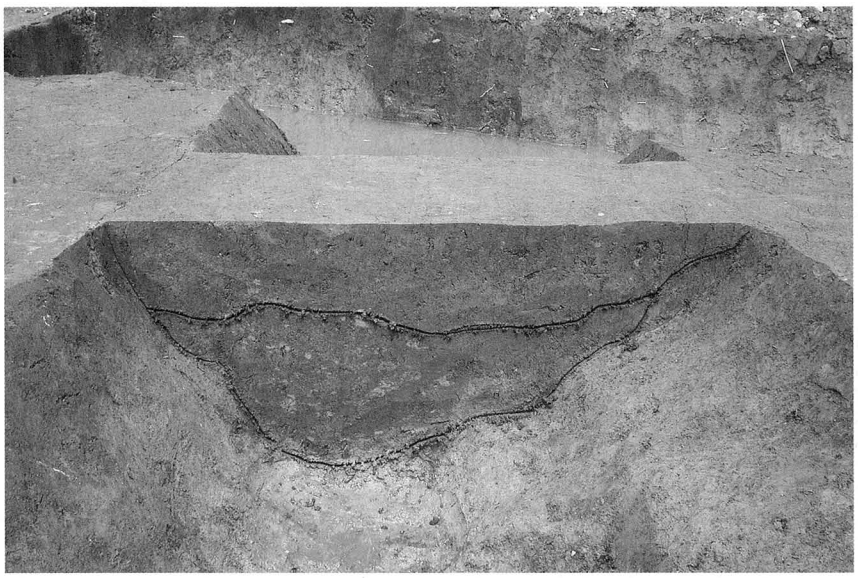
3　下層調査区断面（西から）

図版24　基本層序



1　完掘状況（南から）

2　Ａ－Ａ’断面（南から）



3　Ｂ－Ｂ’断面（西から）

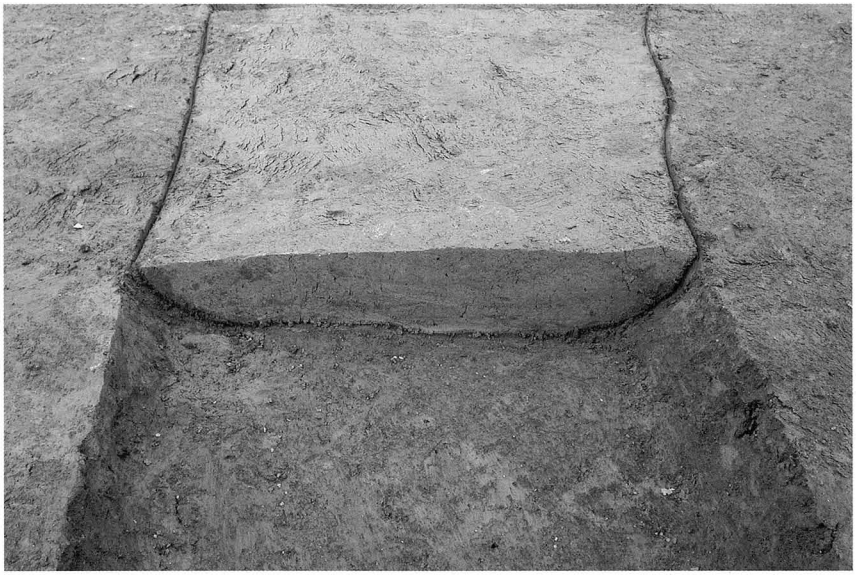
図版25　SD１溝跡

1　SD3・4溝跡完掘状況（北東から）

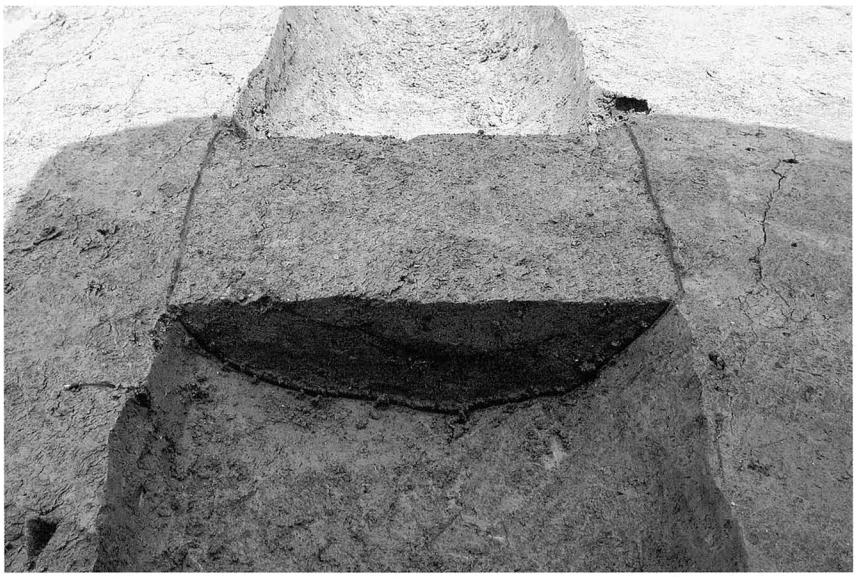
2　SD３溝跡完掘状況（北東から）

3　C－C’断面（北東から）

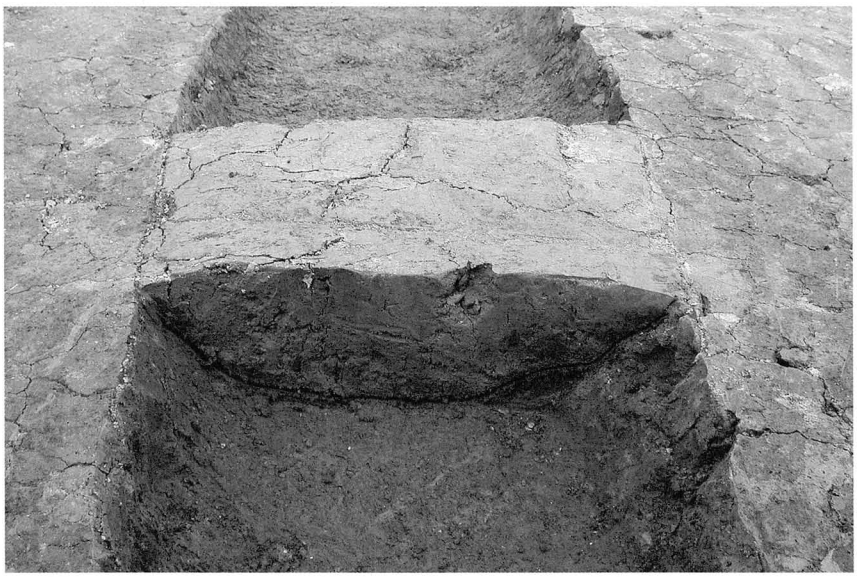
図版26　SD３・４溝跡



1　SD５溝跡断面（北西から）



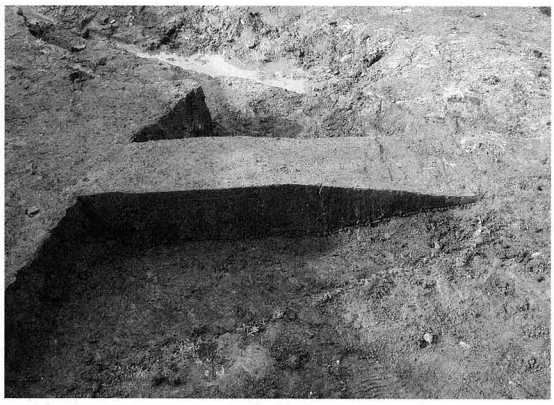
2　SD６溝跡断面（南から）



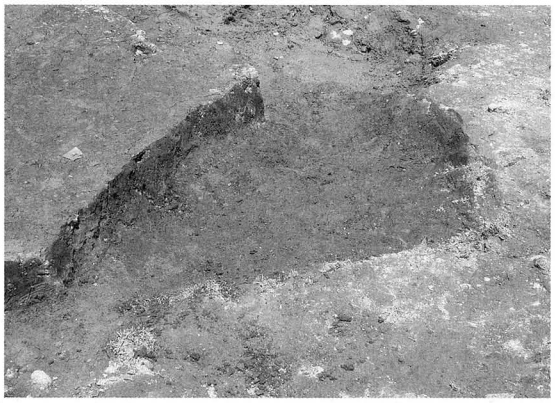
3　SD７溝跡断面（西から）

図版27　SD５・６・７溝跡

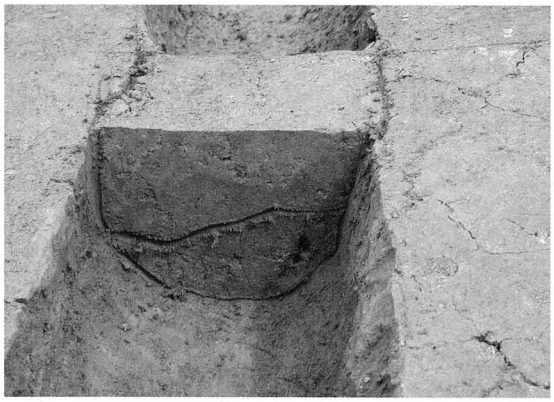
1　SD７溝跡完掘状況（西から）



2　SD８溝跡断面（南から）



3　SD８溝跡完掘状況（南から）



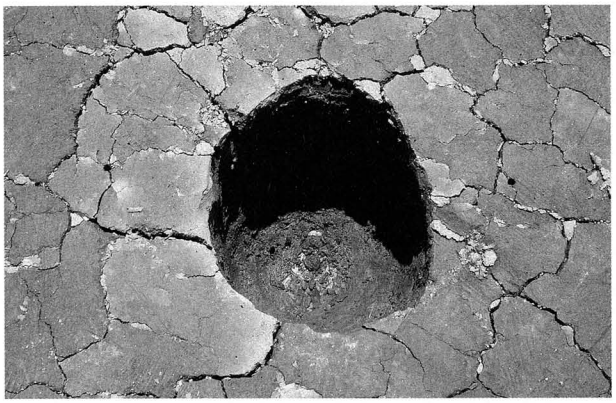
4　SD９溝跡断面（南から）

5　SE１井戸跡完掘状況（南から）

図版28　SD７・８・９溝跡・SE１井戸跡

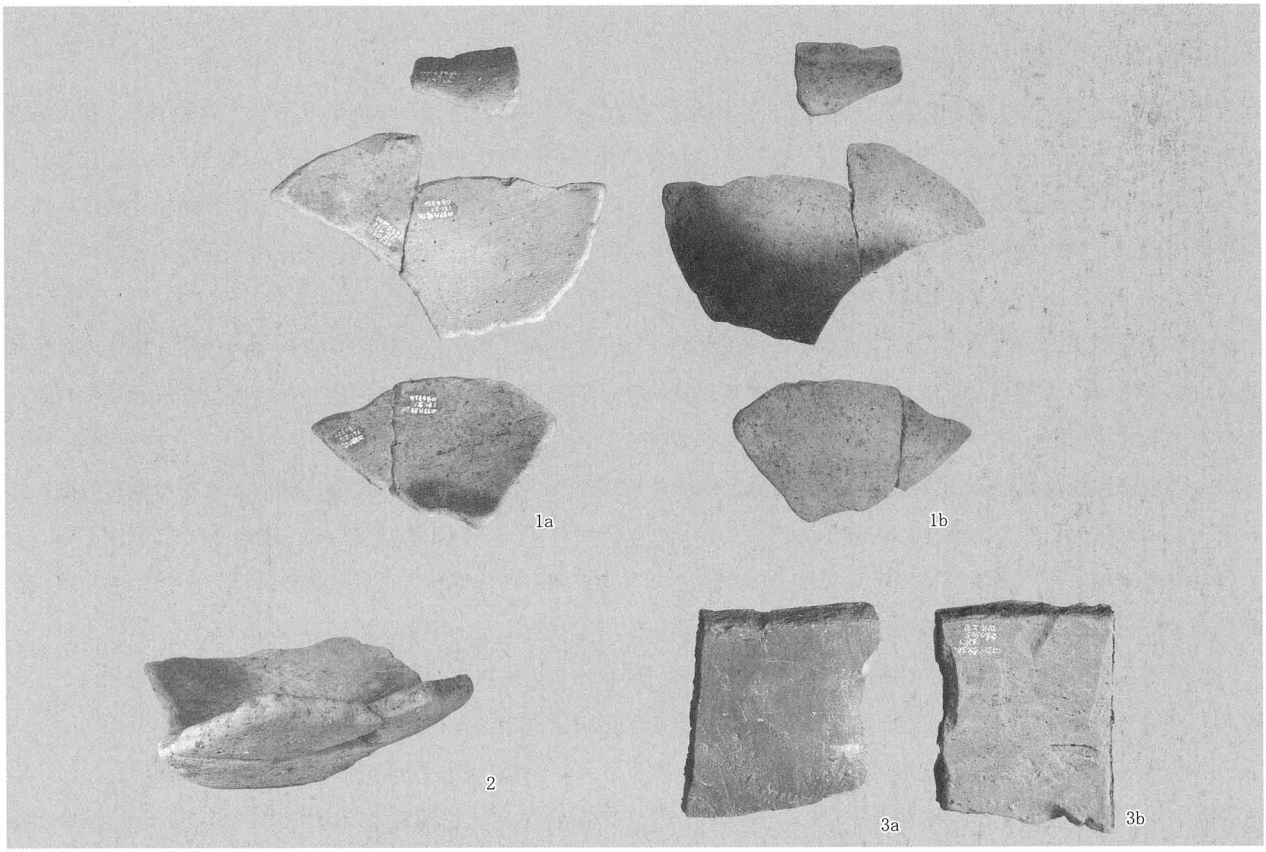
1　SE２井戸跡（東から）

2　SK１土坑完掘状況（南から）



3　P１完掘状況（北から）

4　P２完掘状況（南から）



図版29　SE２井戸跡、SK１土坑、P１・２、出土遺物

Ⅴ　富沢遺跡142次調査報告書

1　調査要項

遺　跡　名　　富沢遺跡（宮城県遺跡番号01369）
調 査 地 点　　仙台市太白区長町南１丁目209－７、209－８
調 査 期 間　　平成20年６月３日～６月22日
調査対象面積　　445.62㎡
調 査 面 積　　65㎡
調 査 原 因　　共同住宅建設
調 査 主 体　　仙台市教育委員会
調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員　　主査　主濱　光朗　　主事　鈴木　隆　　文化財教諭　熊谷　敏哉

2　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成19年11月６日付けで地権者より提出された、共同住宅の建築工事に係る「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」（H19 教生文第１－32号）に基づき、平成20年６月３日～22日に発掘調査を実施した。

調査区は東西15m×南北５m（北西角10㎡は撹乱のため、面積から差し引く）に設定した。重機により盛土・Ⅰ・Ⅱ層を掘削した。Ⅲ層上面以下で人力により遺構検出作業を実施した。

3　遺跡の位置と環境

富沢遺跡はＪＲ仙台駅の南方約４㎞に位置し、総面積は90haである。標高９～16mの平坦な沖積地で、北東側を広瀬川の自然堤防、南側を名取川の支流である笊川とその左岸の自然堤防に囲まれた後背湿地に立地している。

富沢遺跡を中心とする周辺地域一帯は、旧石器時代から現在に至るまで連綿として人々の営みが繰り広げられてきた所である。旧石器時代においては、本遺跡で後期旧石器時代に関わる焚き火の跡と石器が見つかっており、当時のキャンプサイトと考えられている。

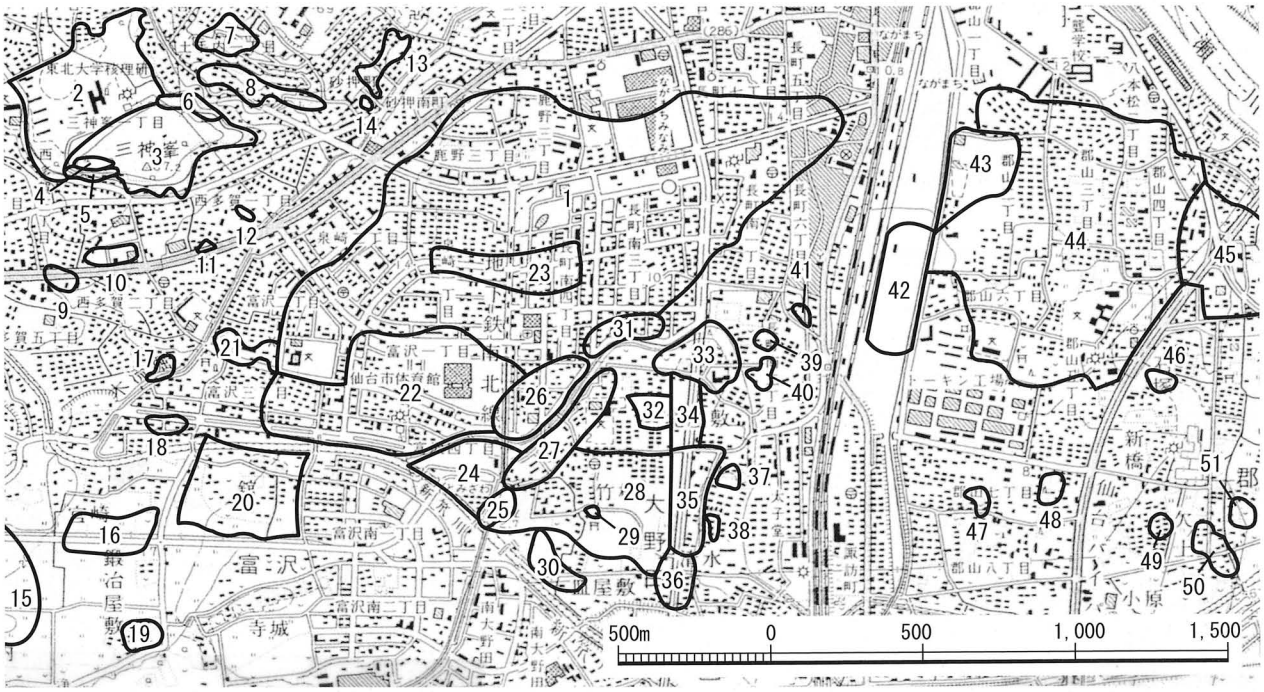
縄文時代早期の遺跡として、南接する下ノ内浦遺跡が挙げられる。同じく前期では北西部の丘陵上に三神峯遺跡が立地しており、大規模な集落跡の存在が推定されている。中期になると遺跡数の増加と規模の拡大が見られる。本遺跡南方に位置し、笊川の両岸に展開する六反田遺跡・下ノ内遺跡・伊古田遺跡・山口遺跡・下ノ内浦遺跡では、中期中葉以降後期後葉に至るまで連続的に遺構・遺物の検出がなされており、富沢地区を中心とする郡山低地において、この時期に安定した生活の舞台が広がっていたと考えられる。一方、晩期になると遺跡の数は減少する。

弥生時代では、中期および後期の水田が見つかっている他、東方に位置する西台畑遺跡では、中期の土器棺墓が発見されている。また、後期の遺跡としては、土坑墓が検出された下ノ内浦遺跡が知られている。

古墳時代は、５世紀代から６世紀前半にかけて、笊川流域でも埴輪を持った大野田古墳群が次々と築かれる。これらの埴輪を焼いた窯跡としては、三神峯丘陵に立地する富沢窯跡が調査されている。

７世紀後半頃になると、富沢地区においても律令体制が及んでくる。律令支配のありかたを示す遺跡として、富沢遺跡東方に位置する郡山遺跡がある。この遺跡は、７世紀後半から８世紀初頭にかけて機能していた官衙跡と考えられている。同時に青葉山丘陵東麓部で二ツ沢横穴群・土手内横穴群などの横穴群も造られていく。

奈良・平安時代に入ると遺跡の分布が全般的に拡大する。当地区では、山口遺跡・下ノ内浦遺跡・伊古田遺跡な



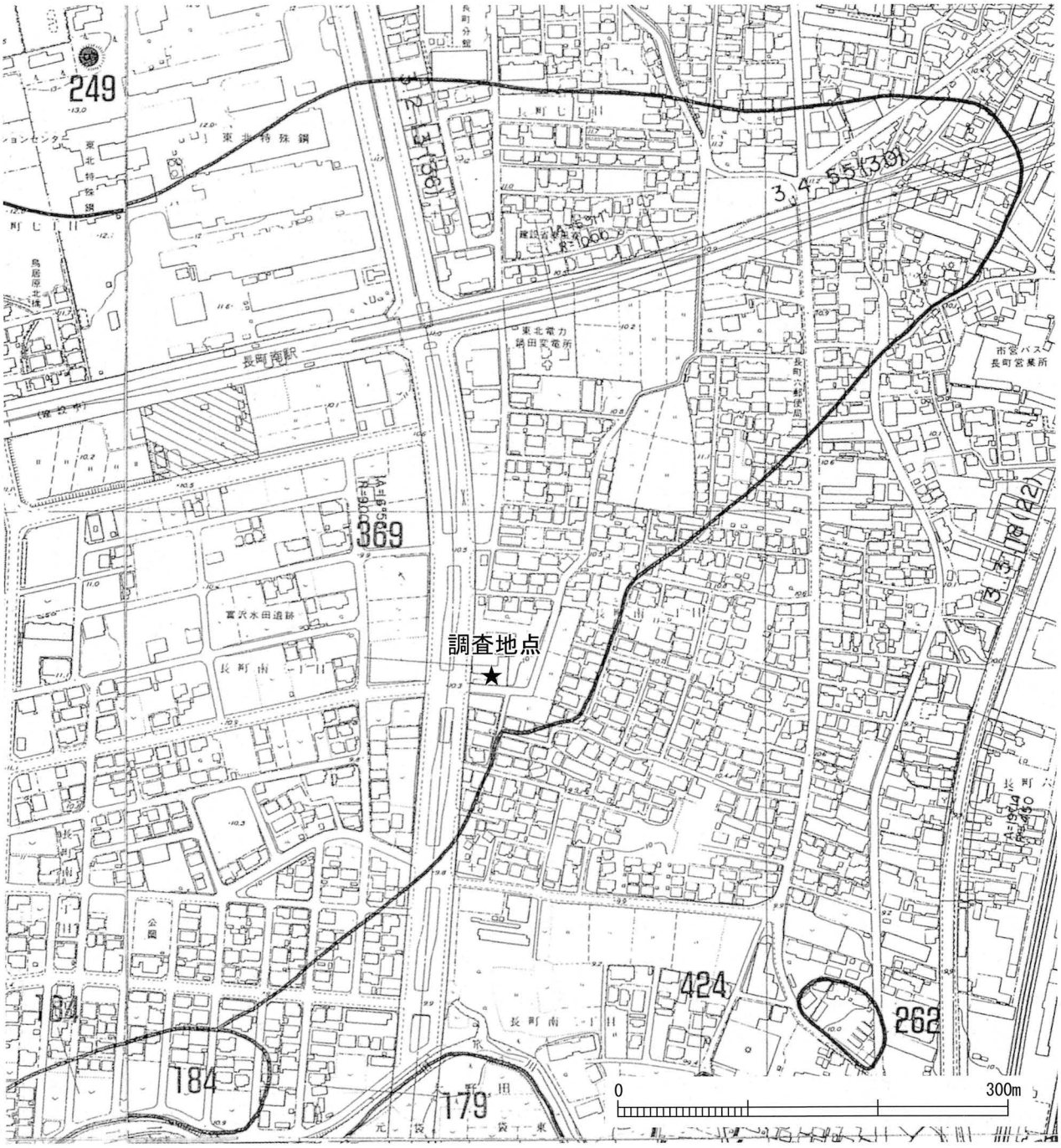
番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	富沢遺跡	包含地、水田	後背湿地	後期旧石器、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世	26	下ノ内浦遺跡	集落、水田	自然堤防	縄文早・前・後、弥生、古墳、奈良、平安、中世
2	芦ノ口遺跡	集落	丘陵	縄文早、弥生、平安	27	六反田遺跡	集落	自然堤防	縄文中～晩、弥生、古墳、奈良、平安、中世
3	三神峯遺跡	集落	丘陵	縄文前・中、平安	28	大野田古墳群	円墳	自然堤防	古墳
4	三神峯古墳群	円墳	丘陵	古墳後	29	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳中
5	富沢窯跡	窯跡	丘陵南斜面	古墳、平安、奈良	30	伊古田B遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
6	土手内横穴墓群A地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳末	31	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳、平安
7	土手内遺跡	集落	丘陵	縄文、弥生、古墳、奈良、平安	32	袋前遺跡	集落	自然堤防	縄文、奈良、平安
8	土手内横穴墓群B地点/土手内窯跡	横穴墓/窯跡	丘陵斜面	古墳末/古墳後、奈良	33	元袋遺跡	集落、水田	自然堤防	弥生、奈良、平安、中世、近世
9	西台窯跡	窯跡	丘陵麓	奈良、平安？	34	大野田遺跡	祭祀、集落	自然堤防	縄文後、弥生中、古墳、奈良、平安
10	原遺跡	散布地	丘陵麓	弥生、古墳、平安	35	王ノ壇遺跡	集落、屋敷	自然堤防	縄文後、弥生、古墳、奈良、平安、中世
11	原東遺跡	散布地	丘陵麓	古墳、奈良、平安	36	皿屋敷遺跡	集落、屋敷	自然堤防	奈良、平安、中世
12	裏町東遺跡	散布地	丘陵麓	平安	37	北屋敷遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
13	砂押屋敷遺跡	散布地	丘陵麓	奈良、平安	38	長町清水遺跡	散布地	自然堤防	古墳
14	砂押古墳	円墳	丘陵麓	古墳	39	長町南遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
15	南ノ東遺跡	散布地	自然堤防	弥生、平安	40	新田遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
16	鍛冶屋敷A遺跡	集落	自然堤防	縄文、奈良、平安	41	長町六丁目遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
17	富沢上ノ台遺跡	散布地	自然堤防	縄文、平安	42	長町駅東遺跡	集落	自然堤防	弥生、古墳末、奈良初
18	堀ノ内遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安	43	西台畑遺跡	包含地、甕棺墓	自然堤防	縄文、弥生中、古墳
19	鍛冶屋敷B遺跡	散布地	自然堤防	縄文、奈良、平安	44	郡山遺跡	官衙、寺院、包含地	自然堤防	縄文後・晩、弥生中、古墳末、奈良初
20	富沢館跡	城館	自然堤防	中世	45	北目城跡	城館、集落、水田	自然堤防	縄文後、弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世
21	富沢清水遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安	46	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
22	山口遺跡	集落、水田	自然堤防、後背湿地	縄文早・中～晩、弥生中、古墳、奈良、平安、中世	47	的場遺跡	散布地	自然堤防	奈良、平安
23	泉崎浦遺跡	集落、水田、墓地	自然堤防、後背湿地	縄文、弥生、古墳、平安、近世	48	籠ノ瀬遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
24	下ノ内遺跡	集落	自然堤防	縄文中～晩、弥生、古墳、奈良、平安、中世	49	欠ノ上Ⅰ遺跡	水田	後背湿地	古墳、奈良、平安、中世
25	伊古田遺跡	集落	自然堤防	縄文後、古墳、奈良、平安	50	欠ノ上Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安

第34図　遺跡の位置と周辺の遺跡

どで当該地の住居跡が検出されている。中世の遺跡としては、名取川北岸の低地部に富沢館跡が、大年寺丘陵上に茂ケ崎城跡が築かれ、広瀬川の南岸には北目城跡がある。

近世に至り、仙台城の築城と共に藩体制が始まると、富沢地区は名取郡に組み込まれ、典型的な農村村落を形成しつつ現代を迎える。

これまでの調査結果として、昭和57年に山口遺跡の自然堤防上から後背湿地にかけての地域において、仙台市内においては初めての水田跡が発見された。また、地下鉄建設工事に伴う調査により、水田跡が広く分布しているこ



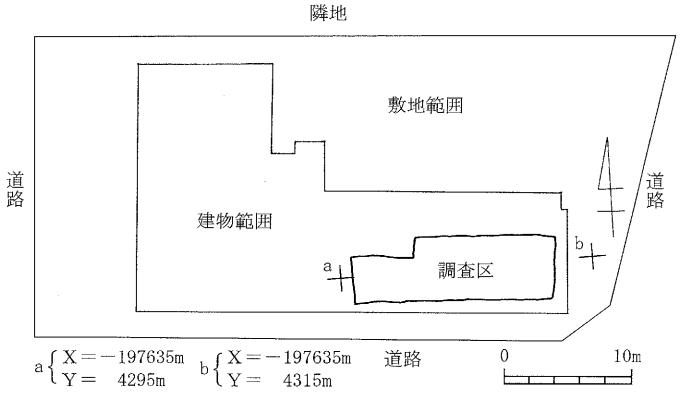
第35図　調査地点の位置

とが明らかになった。水田跡の存在が推定される後背湿地は、昭和58年に「富沢水田遺跡」として遺跡登録された。その後、調査の進展に伴って、この地域では弥生時代以降近年まで連続的に稲作が営まれていることが明らかになった。また、遺跡内の水田跡の検出される地層より下層から縄文時代の遺構・遺物が発見されることや、居住域に係わる遺構が発見されることにより、昭和62年には「富沢遺跡」と名称が変更された。

これまでの発掘調査や、周辺の自然堤防部の調査結果によって、各時代の様相が次第に明らかになりつつある。

4　基本層序

調査地点における盛土の厚さは約１ｍである。基本層は14層に大別し、このうちⅠ・Ⅱ・Ⅴ層についてはそれぞれ２



第36図　調査区配置図

層に細分した。Ⅰ層は現代の耕作土である。Ⅲ層は、10世紀前半に降灰したとみられる灰白色火山灰が含まれていることから、富沢遺跡で確認されている条里型地割に関わる大畦畔の検出が予想される層位である。より下位の基本層のうちⅦ・Ⅷ層は、下面に著しい凹凸がみられるなど水田土壌の可能性もあるが、面的な精査を行っていないため詳細は不明である。Ⅸ層以下に、基本層が撹拌される部分が数ヵ所ある。最下層のⅩⅣ層は、植物遺体を多く含むスクモ層である。

5　発見遺構と出土遺物

Ｖａ層上面で畦畔１条、Ⅵ層上面で土坑２基、Ⅶ層上面で、溝跡２条、土坑１基、性格不明遺構１基を検出した。

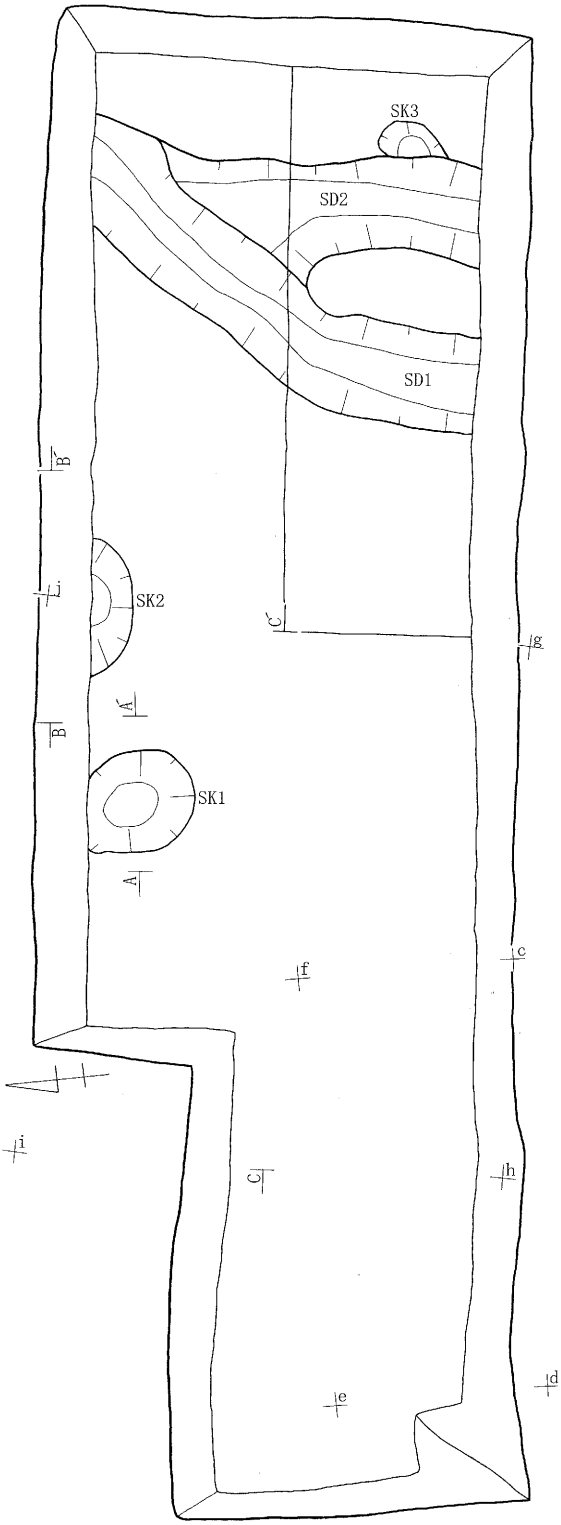
１）Ｖａ層水田跡

調査区の西南部で畦畔を１条検出した。西端は撹乱に切られ、東端は途切れている。検出部の長さは約260cm、高さは４ cmである。幅は立ち上がり部分で125cm、上面で75cm である。土壌の厚さは６～25cmである。Ｖb層上面を見ると、畦畔直下こそ凹凸は少ないが、それ以外の部分では凹凸が顕著に見られる。耕作によっての凹凸であると考えられるので、Ｖa層は水田であったと推定される。

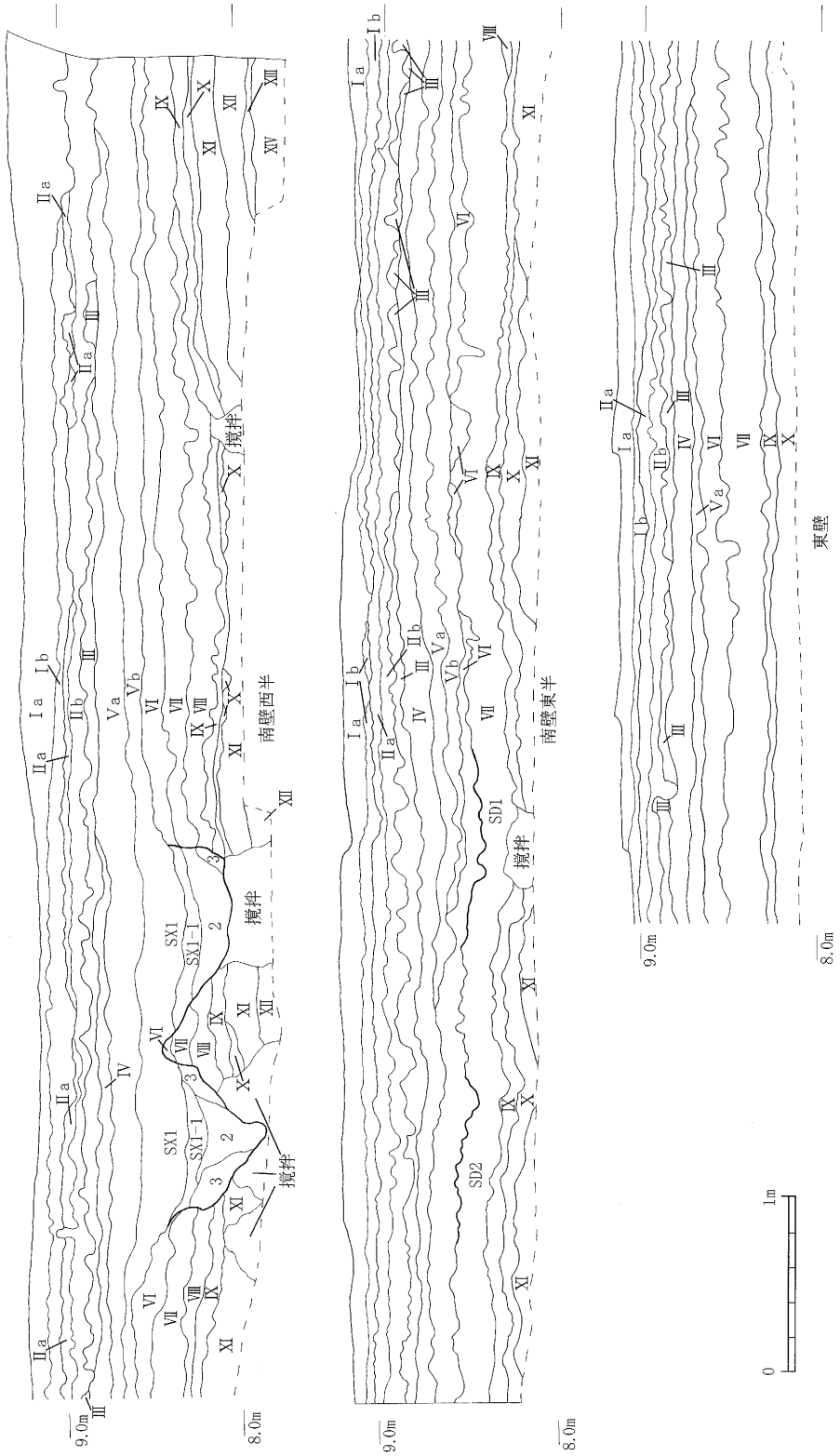
２）土坑

ＳＫ１土坑　調査区の北部、Ⅵ層上面で検出した。平面形はやや南北に長い楕円形である。規模は東西105cm、南北115cm 以上、深さ20cm で、断面形は船底形である。堆積土は２層に分かれ、いずれもシルト質粘土である。遺物は出土していない。

ＳＫ２土坑　調査区北部、Ⅵ層上面で検出した。北部は調査区の外に延びる。検出部の東西142cm、南北は途中で北壁に遮断されているが、40cm を測る。深さは約100cm である。断面形は逆台形



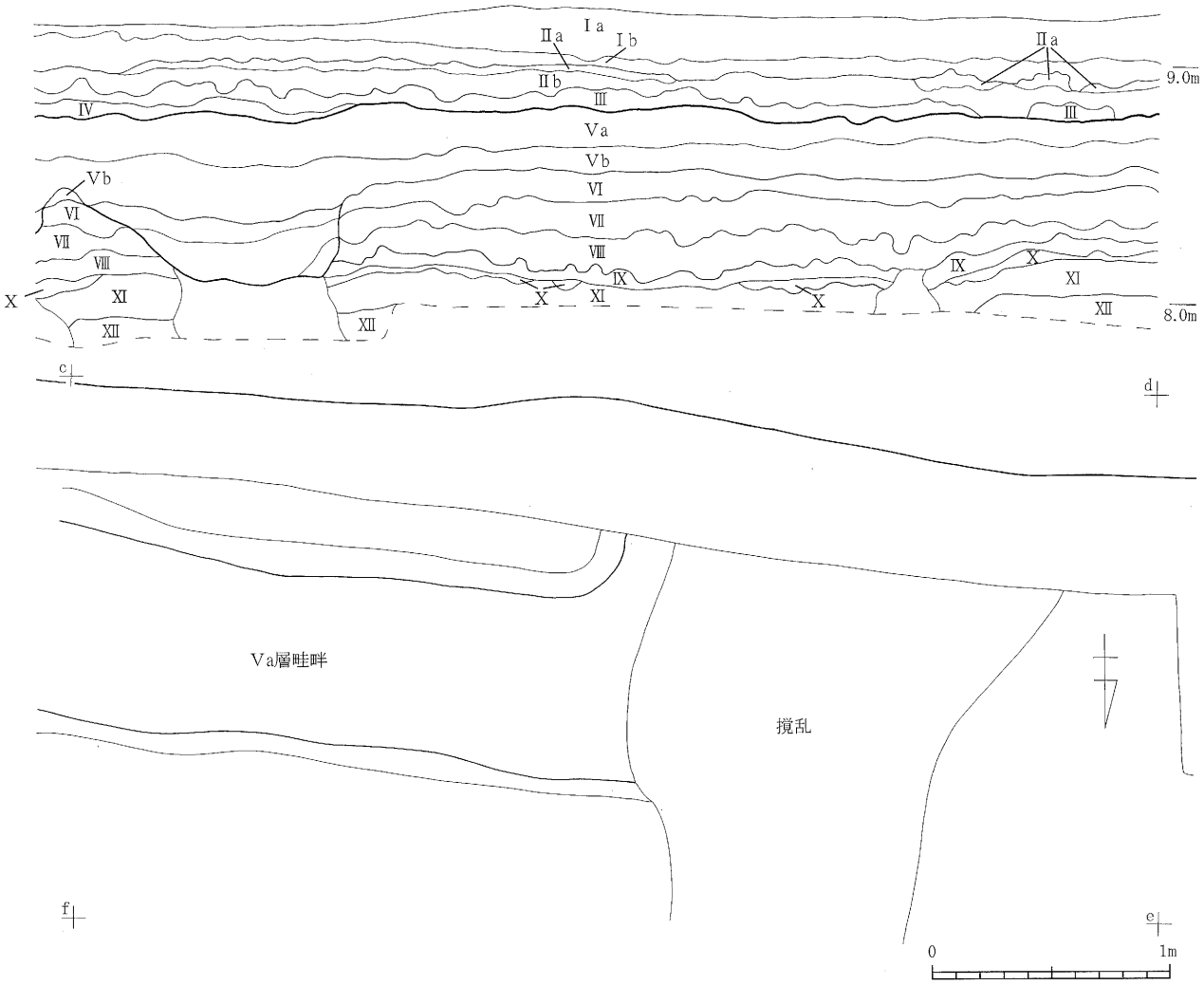
第37図　Ⅵ層上面、Ⅶ層上面検出遺構合成配置図



第38図　基本層断面図

で、堆積土は４層に分かれる。１層はシルト質粘土で、２層以下はいずれも粘土である。遺物は出土していない。

ＳＫ３土坑　調査区南東部、Ⅶ層上面で検出した。西側はＳＤ２溝跡に切られているが、平面形は楕円形であると推定される。規模は南北が50cm、東西は30cm以上である。深さは約8.6cmである。堆積土は１層である。遺物は出土していない。

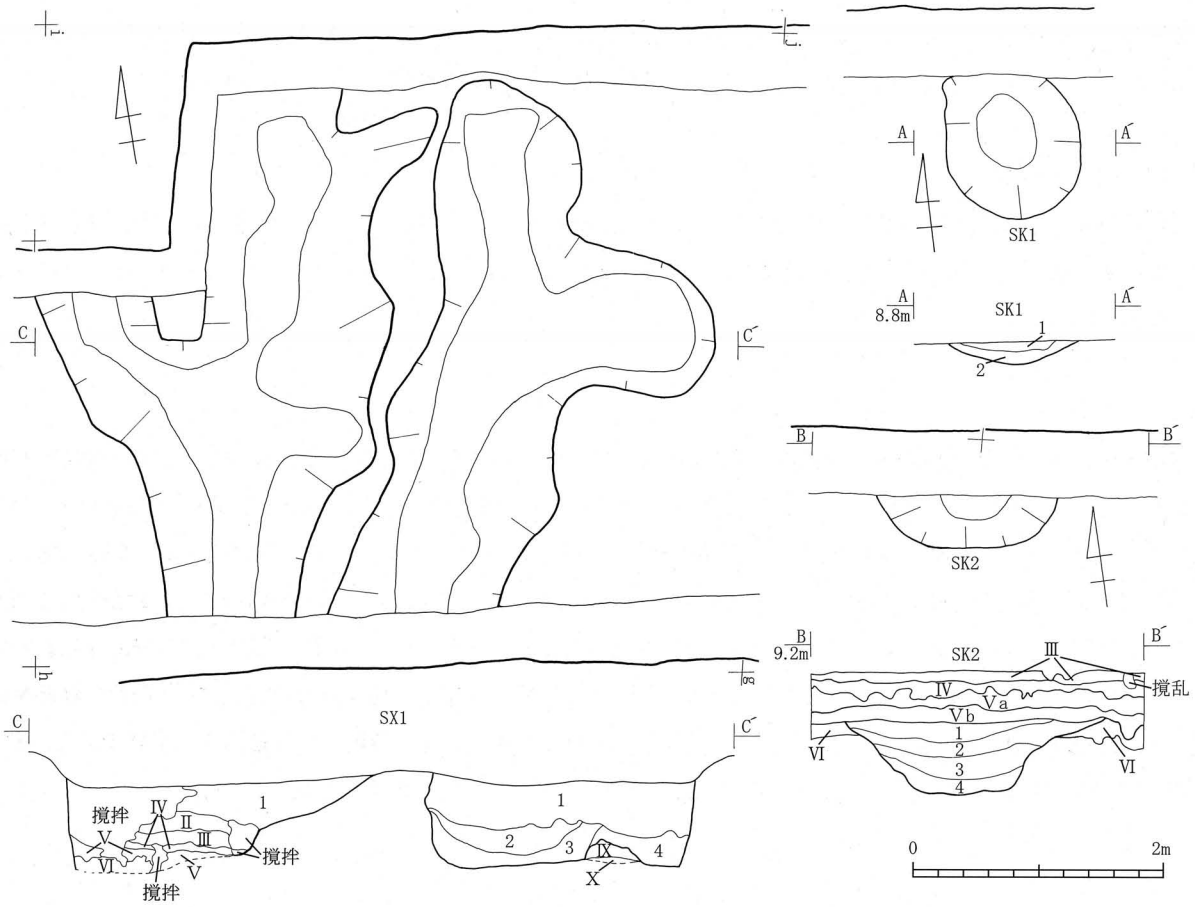


基本層	土色		土性	備考
Ⅰa	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質粘土	
Ⅰb	10YR6/3	にぶい黄橙色	シルト質粘土	鉄分を多量に含む。
Ⅱa	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	10YR8/4にぶい黄橙色を斑状に多量に含む。
Ⅱb	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	
Ⅲ	10YR6/3	にぶい黄橙色	シルト質粘土	灰白色火山灰を含む。鉄分を少量含む。
Ⅳ	10YR6/3	にぶい黄橙色	シルト質粘土	鉄分を多量に含む。
Va	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	鉄分をやや多量に含む。管状の鉄分が多い。
Vb	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	鉄分を多量に含む。管状の鉄分が多い。
Ⅵ	10YR3/2	黒褐色	シルト質粘土	鉄分を多量に含む。巻き上げあり。管状の鉄分が多い。
Ⅶ	10YR6/4	にぶい黄橙色	シルト質粘土	鉄分を多量に含む。巻き上げあり。管状の鉄分が多い。
Ⅷ	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	管状の鉄分が多い。
Ⅸ	10YR3/1	黒褐色	シルト質粘土	一部ラミナ状。管状の鉄分が多い。
Ⅹ	10YR6/3	にぶい黄橙色	シルト質粘土	管状の鉄分が多い。
ⅩⅠ	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	管状の鉄分が多い。
ⅩⅡ	10YR4/2	灰黄褐色	シルト質粘土	管状の鉄分が多い。
ⅩⅢ	10YR3/1	黒褐色	シルト質粘土	一部ラミナ状。管状の鉄分が多い。
ⅩⅣ	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	スクモ層（植物遺体が多い）。管状の鉄分が多い。
層位	土色		土性	備考
SK1－1	7.5YR5/1	褐灰色	シルト質粘土	下層の土壌を部分的に斑に含む。
2	5Y5/3	灰オリーブ色	シルト質粘土	酸化鉄を含む。粘土（5Y4/1）を斑に含み、壁際に粘土（7.5YR1.7/1）を部分的に含む。
SK2－1	5Y4/1	灰色	シルト質粘土	酸化鉄、マンガン含む。粘土（5Y5/2）層、下部に斑に含む。
2	2.5Y4/1	黄灰色	粘土	酸化鉄、マンガン含む。
3	10YR4/1	褐灰色	粘土	酸化鉄（サンドパイプ）含む。
4	2.5GY4/1	暗オリーブ灰色	粘土	粘土（7.5YR5/2、10YR3/1）の小ブロックを含む。
SX1－1	5Y3/1	黒褐色	シルト質粘土	酸化鉄を多量に含む。
2	10YR4/1	褐色	シルト質粘土	酸化鉄を少量含む。粘土質シルト（10YR5/2）をブロック状に含む。
3	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト質粘土	粘土質シルト（10YR5/2）を多量に含む。
4	10YR4/1	褐色	シルト質粘土	10YR5/2灰黄褐色をブロック状にやや多く含む。

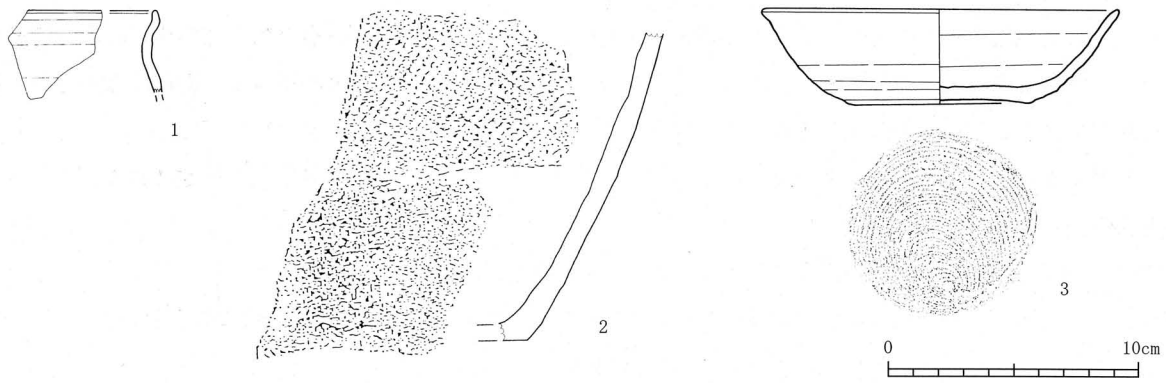
第39図　Va層水田跡　平・断面図

3）溝跡

ＳＤ１溝跡　調査区東部、Ⅶ層上面で検出した。北端も南端も調査区外に延びる。検出部の長さは約400cmである。



第40図　土坑・性格不明遺構　平・断面図



図中番号	登録番号	出土地点			分類		法量（cm・g）			特徴・備考（産地・釉薬・文様・時期・その他）	写真図版
		基本層	遺構名	遺構層	種別	器種	器高・長	口径・幅	底径・重		
1	D−1	Ⅳ層			ロクロ土師器	甕	−	−	−		31−7
2	E−1	Ⅳ層			須恵器	甕	−	−	−	外面：格子叩き　内面：アテ具痕	31−9
3	E−2		SX−1	2層	須恵器	坏	3.9	14.2	7.3	底部回転糸切り　ロクロ回転方向：右	31−8

第41図　出土遺物

上端幅は約100cm、深さは約10cmである。堆積土はⅥ層が入り込んでいる。出土遺物はない。

ＳＤ２溝跡　調査区東部で検出した。北端はＳＤ１溝跡に切られ、南端は調査区外に延びる。検出部の長さは約300cmである。上端幅は約100cm、深さは約８cmである。堆積土はⅥ層が入り込んでいる。出土遺物はない。

４）性格不明遺構

ＳＸ１性格不明遺構　調査区西部で検出した。北端の一部は調査区の外に延び、南端は全体的に調査区外に延びている。検出部の長さは420cmである。幅は上面で520cm、深さは約70cmである。堆積土は４層に分かれる。堆積土２層中から須恵器の坏が出土した。

５）出土遺物

Ⅳ層中からロクロ土師器甕の小片、須恵器甕の小片が出土した。いずれも年代は不明である。また、ＳＸ１性格不明遺構の２層中から須恵器の坏が出土した。この須恵器坏は器高3.9cm、口径14.2cm、底径7.3cmである。体部は底部からやや屈曲して立ち上がり、全体的に丸みを持っている。口縁部はやや開いて外傾している。底部回転糸切りでロクロ回転方向は右である。この須恵器坏に類似するものはＶＢ群土器として分類されている（村田1992）。時期としては９世紀第４四半期を中心とする頃とされており、仙台市では仙台市五本松窯跡Ｃ群窯跡（第12～15号窯跡）で出土している。報告書第99集（佐藤1987）を参照したところ、五本松窯跡で出土した須恵器坏の中に、器高・口径・底径の数値が極めて近く、体部や口縁の形状が類似するものが確認された。よって今調査で出土したこの須恵器坏の時期も９世紀第４四半期であると推定でき、ＳＸ１性格不明遺構も９世紀第４四半期以前に形成されたものであると推測できる。

６　まとめ

①　Ｖａ層上面で畦畔１条、Ⅵ層上面で土坑２基、Ⅶ層上面で溝跡２条、土坑１基，性格不明遺構１基を検出した。

②　検出が予想されていた条里型地割に関係する大畦畔の検出はなく、小畦畔が検出された。小畦畔は西側が撹乱で切られ、東側は途切れている。灰白色火山灰を含むⅢ層が平安時代の水田と考えられることから、耕作の際に畦畔が削平されてしまったと判断できる。

③　ＳＸ１性格不明遺構は人工のものである可能性もあるが、直下に自然の作用によるとみられる基本層の撹拌が集中して確認されたことや、平面形が著しく不定形であることから、現時点では自然の作用によって形成された可能性が高いと考えられる。時期は、出土した須恵器坏の年代から９世紀第４四半期以前と推定される。

④　Ⅳ層中からロクロ土師器甕の小片、須恵器甕の小片が出土した。いずれも年代は不明である。

⑤　ＳＸ１性格不明遺構の２層中から須恵器坏が出土した。年代は９世紀第４四半期と推定される。

＜参考文献＞

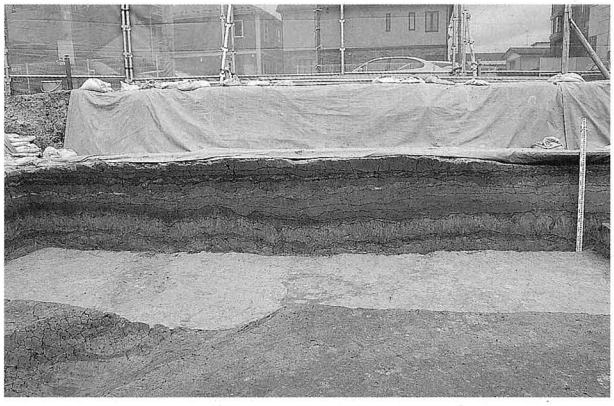
工藤哲司　1999「富沢遺跡　第104次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書235集

佐藤甲二・小川淳一　1987「五本松窯跡　都市計画道路「川内・南小泉線」関連遺跡発掘調査報告書」
仙台市文化財調査報告書第99集

佐藤甲二　1994「富沢・泉崎浦・山口遺跡(7)－富沢遺跡第87次発掘調査報告書－」
仙台市文化財調査報告書第184集

村田晃一　1992「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」
『大戸窯検討のための「会津シンポジウム」東日本における古代・中世窯業の諸問題』

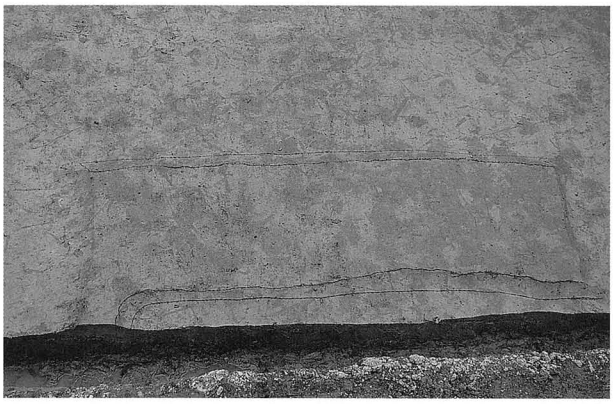
1　調査終了全景（東から）



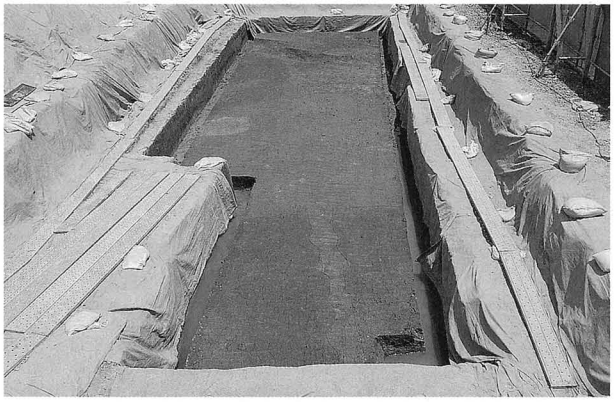
2　南壁東部断面状況（北から）

3　深掘区南壁断面状況（北から）

4　Va層上面検出状況（西から）

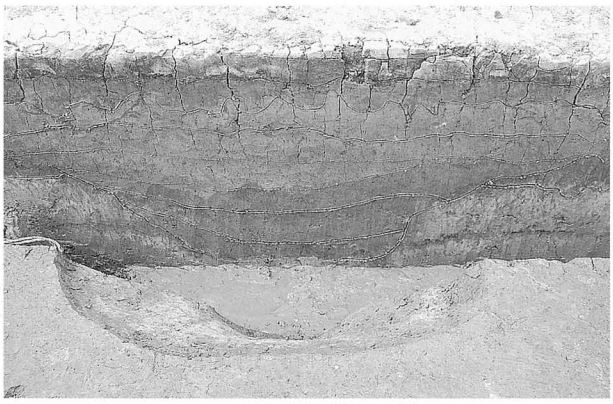


5　Va層上面畦畔完掘状況（南から）



6　Ⅵ層上面遺構検出状況（西から）

7　SK１土坑完掘状況（南から）



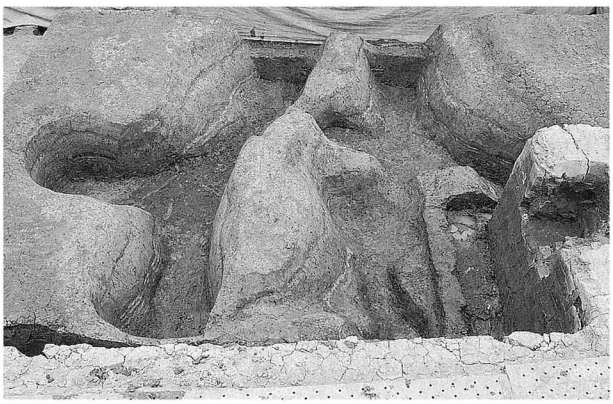
8　SK２土坑完掘状況（南から）

図版30　調査区全景・基本層序・土坑

1　SD１・２溝跡完掘状況（東から）

2　SX１性格不明遺構断面（南から）

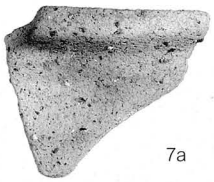
3　SX１性格不明遺構断面（南から）



4　SX１性格不明遺構完掘状況（北から）

5　Ⅶ層上面検出状況（東から）

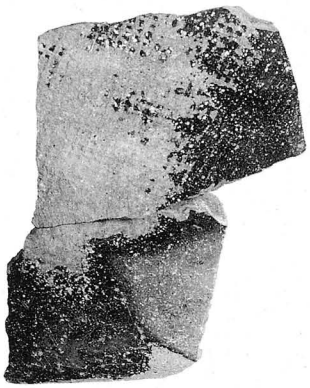
6　SX１性格不明遺構遺物（図版35－８）出土状況



7a

7b

8



9a

9b

図版31　遺構検出・断面・完掘状況・出土遺物

Ⅵ　沖野城跡第４次調査報告書

１　調査要項

遺　跡　名　　沖野城跡（宮城県遺跡番号01234）

調 査 地 点　　仙台市若林区沖野七丁目303－３・５・６の一部,303－18､303－５地先道路・水路の一部

調 査 期 間　　平成20年９月16日～17日

調査対象面積　　296.74㎡

調 査 面 積　　67.5㎡(南北トレンチ45㎡、東西トレンチ22.5㎡)

調 査 原 因　　宅地造成工事

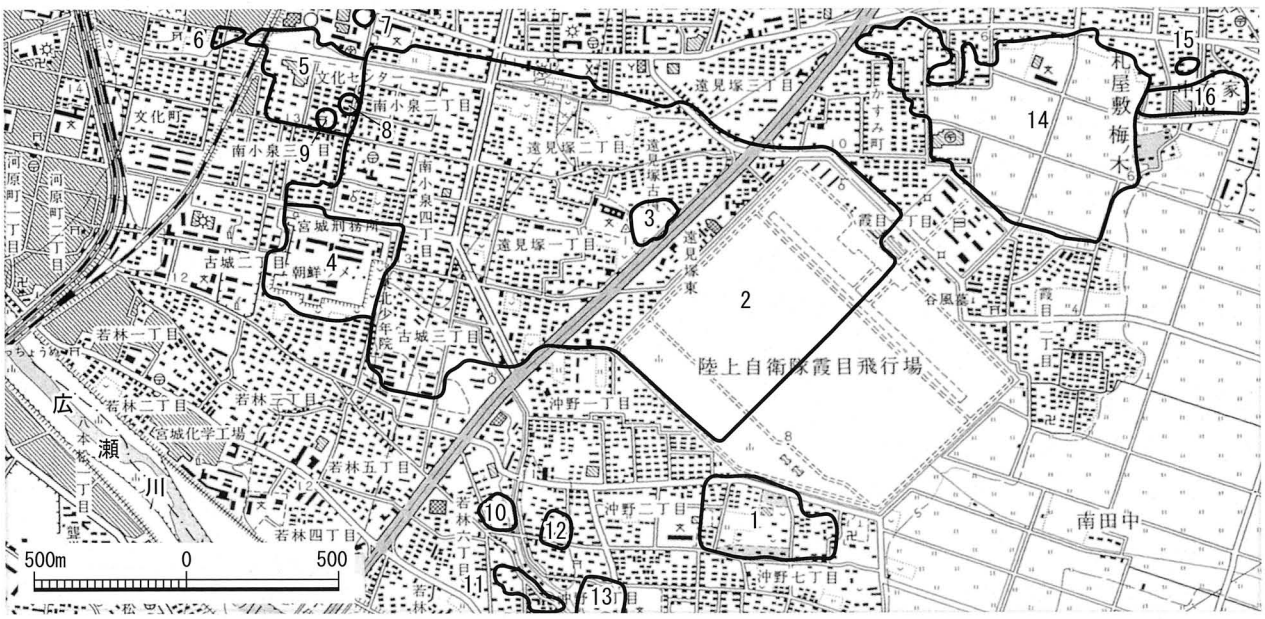
調 査 主 体　　仙台市教育委員会

調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係

担 当 職 員　　主事　加藤　隆則　主事　森田　義史　文化財教諭　佐藤　正弥　文化財教諭　熊谷　敏哉

２　調査に至る経過と調査方法

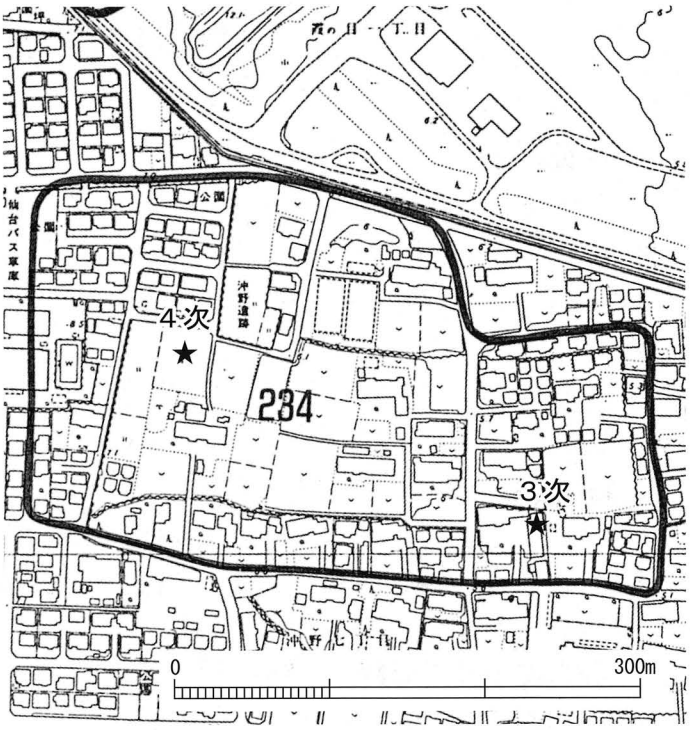
今回の調査は、平成20年７月24日付けで地権者より、道路下の下水道掘削工事に係る「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」（H20教生文第183－17号）に基づき実施した。確認調査は平成20年９月16日に着手し、東西に延びる溝跡が検出されたため、引き続き本調査を実施した。



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	沖野城跡	城館	自然堤防	中世	9	猫塚古墳	円墳	自然堤防	古墳
2	南小泉遺跡	集落、屋敷	自然堤防	弥生、古墳、奈良、平安、中世、近世	10	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
3	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	11	砂押Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
4	若林城跡	円墳、集落、城館	自然堤防	古墳、平安、中世、近世	12	神柵遺跡	官衙関係	自然堤防	奈良、平安
5	養種園遺跡	集落、屋敷、包含地	自然堤防	縄文、古墳、平安、中世、近世	13	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生、古墳、奈良、平安
6	保春院前遺跡	集落	自然堤防	古代、中世、近世	14	仙台東郊条里跡	条里跡	後背湿地	奈良、平安
7	法領塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	15	中在家遺跡	包含地	自然堤防	平安
8	蛇塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	16	中在家南遺跡	墓地、河川、水田	自然堤防、後背湿地	弥生、古墳、平安、中世、近世

第42図　遺跡の位置と周辺の遺跡

調査は１トレンチ（12m×2.5m）・2トレンチ（2.5m×９m）を設定した。二つのトレンチともＩ層のみ重機による掘削を行い、人力で遺構検出作業を行った。１トレンチは20cmほど掘り下げた段階で北端に溝状遺構（ＳＤ１～３溝跡）が検出されたため、北側へ６m程拡張した。２トレンチではＩ層を掘削しピットを検出した。工事計画の掘削深度がＧＬ－300mmのため、下層の調査は行わなかった。

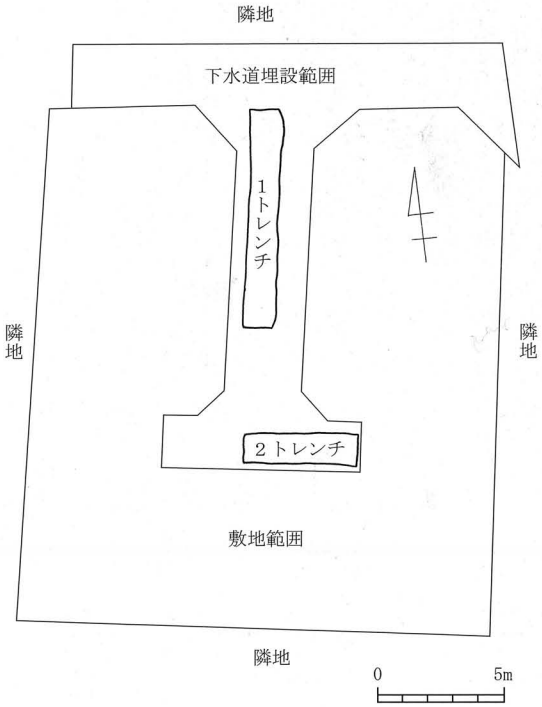


第43図　調査地点の位置

3　遺跡の位置と環境

沖野城跡はＪＲ仙台駅の南東約4.5kmに位置する。西南方約３kmを流れる名取川の支流広瀬川の後背湿地に立地する。周辺には縄文時代以降の遺跡が分布しており、南小泉遺跡、養種園遺跡、若林城跡では中近世の遺構・遺物も検出されている。本遺跡は、明治時代の地籍図や昭和になってからの『六郷村沖野舘屋敷割図』などから復元された地割で、主郭を中心にその周りを曲輪と堀・土塁が取り囲む平城であったことが推測されている。『仙台城古城書上』等によると、粟野氏の居城で100間四方の規模をもっていたとされている。

本遺跡は、これまで個人住宅建設や宅地造成に伴って小規模な調査が行われてきた。昭和60年度の第１次調査、平成４年度の第２次調査では、城館の北西部分にあたる館西地区で二重の堀跡が検出されている。調査された区画自体が一つの曲輪で、少なくとも北と東側に二重の堀があったと推定されている。また第３次調査を含め近世の遺構・遺物も散見されることから、城館の廃絶時期やその後の景観についても今後の調査で明らかになると考えられる。



第44図　調査区配置図

4　基本層序

調査地点は現況が水田のため、盛土はほとんど見られない。基本層は７層に分かれる。Ⅱａ～ｄ層は調査区北半にのみ分布する現代の撹乱層で、ＳＤ１～３溝跡の上面を切っているため遺構の検出面の特定を困難にしている。Ⅴ層以下はＳＤ３溝跡脇で確認したのみである。

5　発見遺構と出土遺物

１トレンチにおいてⅣ層上面で溝跡３条を検出した。２トレンチではピットが５基確認されたが、柱痕などは検出されず、有機的に結びつくものではなかった。

１）溝跡

ＳＤ１～３溝跡　すべて遺物が出土しておらず、時期は不明である。切り合い関係よりＳＤ１溝跡が最も新しく、ＳＤ３溝跡が最も古い。ＳＤ１溝跡は検出幅1.4m、確認面からの深さは30cmである。ＳＤ２溝跡は検出幅60cm、確認面からの深さは18cm である。ＳＤ３溝跡は上幅1.7m以上、下幅約50～60cm の逆台形を呈し、箱堀状になっている。確認面からの深さは90cmである。堆積土は単層であり、一時に埋められた可能性が高い。

２）出土遺物

出土遺物はない。

6　まとめ

①今回調査地点は沖野城跡の中央西に位置し、標高は９ｍである。

②Ⅳ層上面で溝跡３条、ピットが検出された。

③出土遺物はなく、年代は不明である。

④ＳＤ３溝跡は上幅1.7m以上の箱堀状を呈しているが、過去の調査例との比較から、溝の規模も性格も異なったものであると考えられ、中世城館との関わりは不明である。

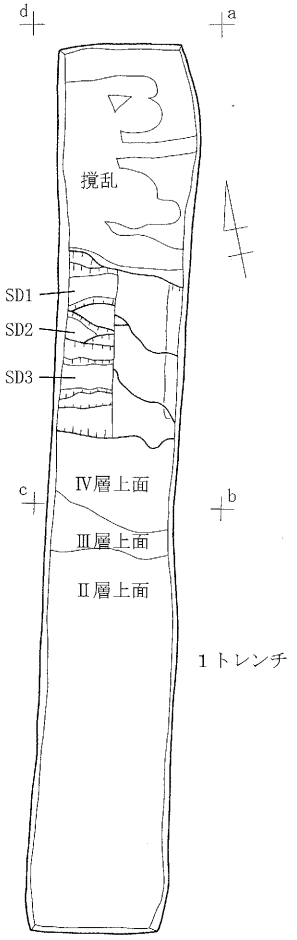
＜参考文献＞

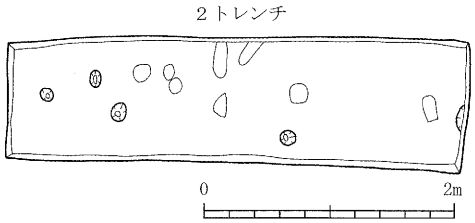
佐藤甲二・渡辺誠　1986「Ⅱ調査報告　沖野城跡」『年報７』仙台市文化財調査報告書第94集

鈴木隆　2009「沖野城跡第３次調査報告書」『仙台平野の遺跡群ⅩⅨ』仙台市文化財調査報告書第346集

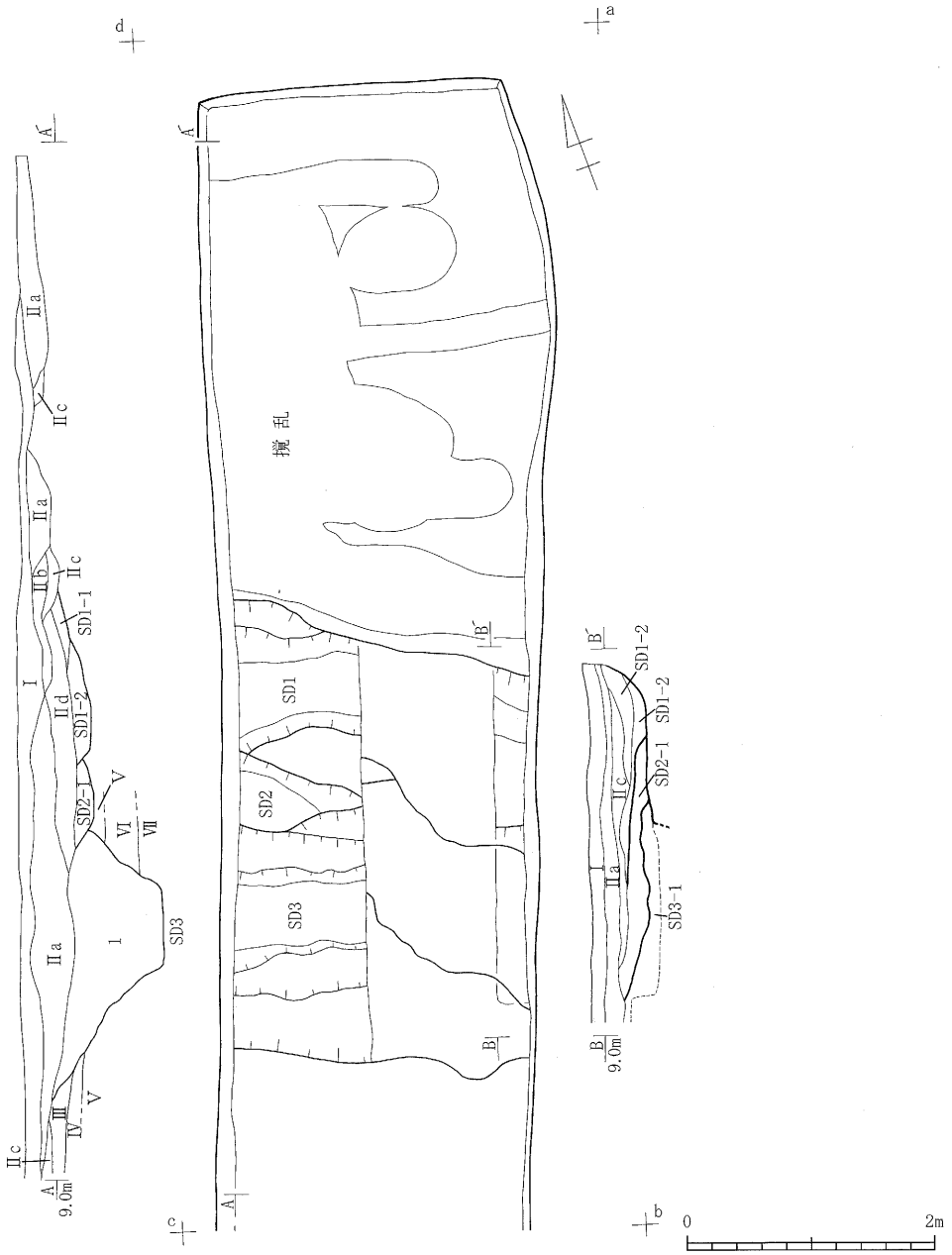
柳原敏昭　2006「沖野城」『仙台市史　特別編７　城館』

結城慎一　1992「Ⅲ本調査報告（2）沖野城跡」『年報14』仙台市文化財調査報告書第176集





第45図　遺構配置図



基本層	土　色		土　性	備　考
1	2.5Y2/1	黒色	シルト質粘土	現代水田層。
Ⅱa	2.5Y3/2	黒褐色	シルト質粘土	粘土（7.5YR4/4）ブロック（酸化鉄を含む）を多量に含む。現代の撹乱層。
Ⅱb	2.5Y3/2	黒褐色	シルト質粘土	粘土（7.5YR4/4）ブロック（酸化鉄を含む）を極多量に含む。現代の撹乱層。
Ⅱc	10YR3/2	黒褐色	粘土	粘土（7.5YR4/4）ブロック（酸化鉄を含む）を微量に含む。現代の撹乱層。
Ⅱd	10YR3/2	黒褐色	粘土	現代の撹乱層。
Ⅲ	2.5Y4/2	暗灰黄色	粘土	酸化鉄を少量含む。下部にⅣ層ブロックをやや多量に含む。
Ⅳ	2.5Y7/2	灰黄色	粘土	酸化鉄を極多量に含む。
Ⅴ	2.5GY5/1	オリーブ色	シルト質粘土	Ⅵ層との互層堆積。酸化鉄を極多量に含む。（グライ化）
Ⅵ	2.5Y1.5	黒色	粘土	
Ⅶ	2.5GY7/1	明オリーブ灰色	細粒砂	Ⅵ層がラミナ状に入る。（グライ化）
層　位	土　色		土　性	備　考
SD1－1	2.5Y3/1	黒褐色	粘土	酸化鉄を粒状に含む。Ⅱ層ブロックを少量含む。炭化物粒を微量に含む。
2	2.5Y5/1	オリーブ灰色	粘土	上部に粘土（2.5YR2/1）をやや多量に含む。
3	2.5Y3/1	黄灰色	シルト質粘土	Ⅵ層ブロックを少量含む。酸化鉄ブロックを少量含む。
SD2－1	2.5Y3/1	黄灰色	シルト質粘土	Ⅵ層ブロックを少量含む。SD3－1層ブロックを多量に含む。
SD3－1	2.5Y3/1	黒褐色	粘土	下部に植物遺体を少量含む。

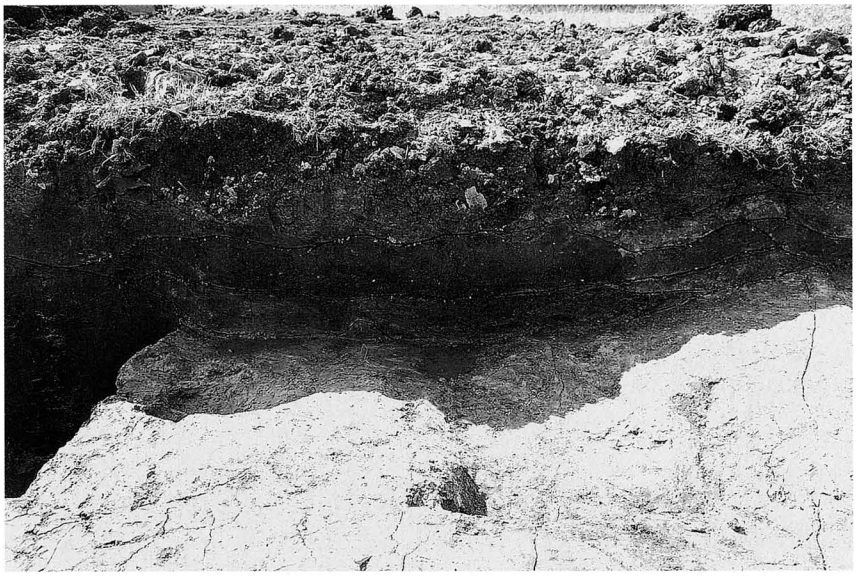
第46図　溝跡平・断面図

1　1トレンチ検出状況（北から）

2　2トレンチ検出状況（西から）

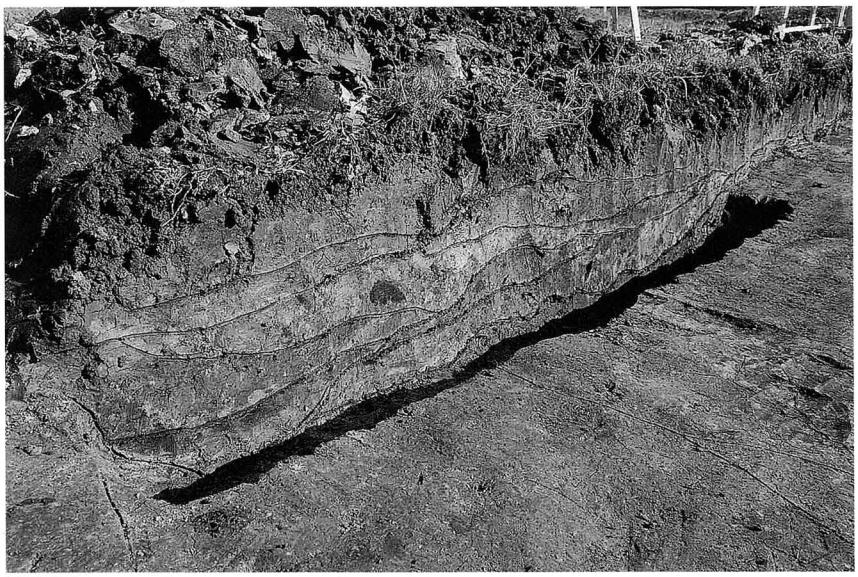
3　SD1～3溝跡検出状況（東から）

図版32　調査区全景、遺構検出状況



1　SD１・２溝跡断面（東から）

2　SD３溝跡断面（東から）



3　SD１・２溝跡（北西から）

図版33　SD１～３溝跡断面

Ⅶ　小鶴城跡第３次発掘調査報告書

１　調査要項

遺　跡　名　　小鶴城跡（宮城県遺跡番号01194）

調 査 地 点　　仙台市宮城野区新田三丁目238他

調 査 期 間　　平成20年10月27日～平成20年10月29日

調査対象面積　　69.96㎡

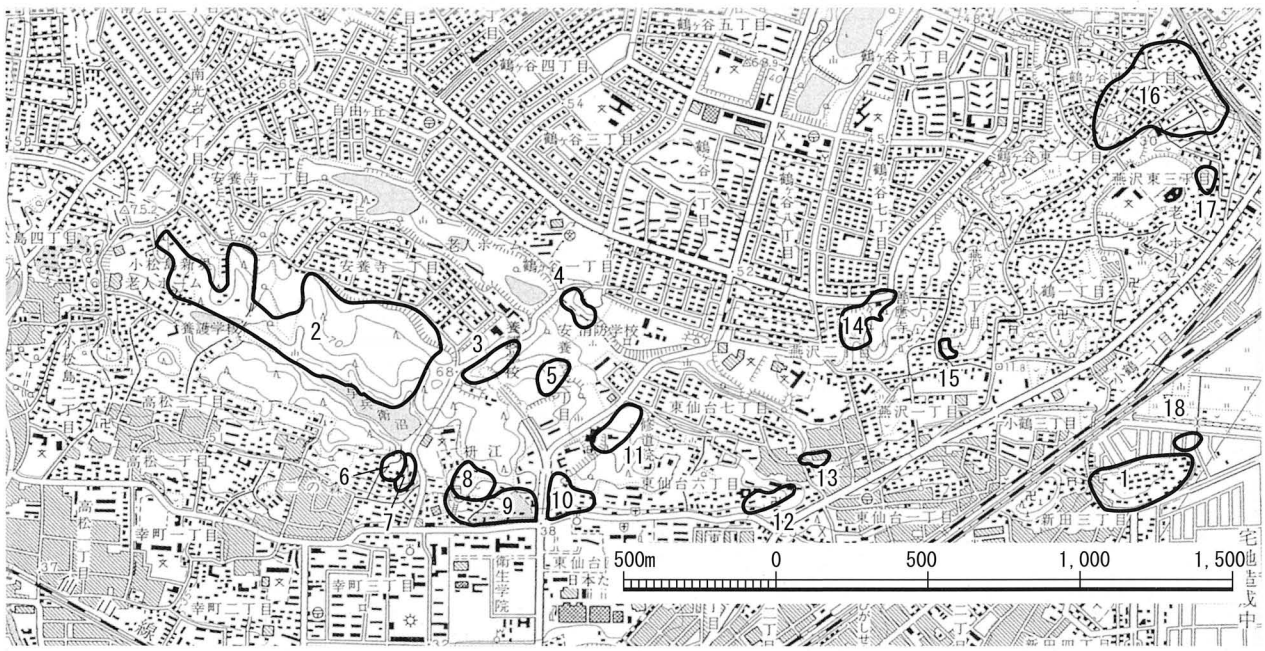
調 査 面 積　　21㎡

調 査 原 因　　賃貸住宅建設工事

調 査 主 体　　仙台市教育委員会

調 査 担 当　　仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係

担 当 職 員　　主事　鈴木　隆　　文化財教諭　志賀　雄一　　文化財教諭　佐藤　正弥

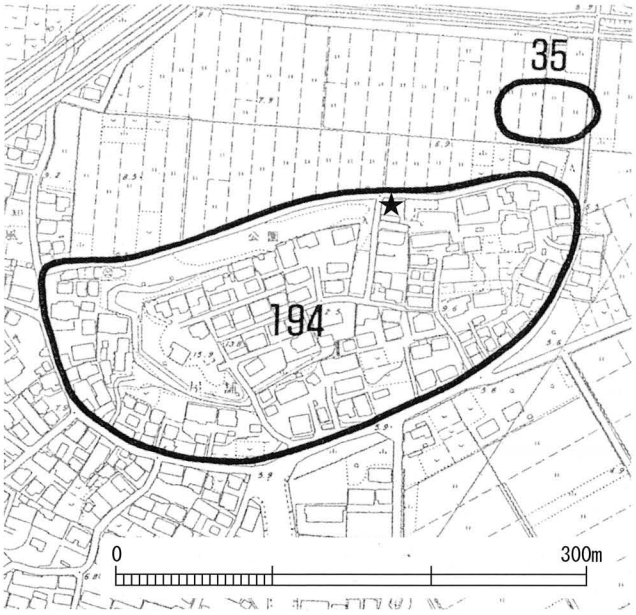


番号	遺　跡　名	種　別	立　地	時　代	番号	遺　跡　名	種　別	立　地	時　代
1	小鶴城跡	城館	丘陵	中世	10	小田原前田窯跡	窯跡	丘陵斜面	奈良
2	与兵衛沼窯跡	窯跡	丘陵斜面	奈良、平安、近世	11	安養寺下瓦窯跡	窯跡	丘陵斜面	奈良、平安
3	案養寺配水場前窯跡	窯跡	丘陵斜面	奈良、平安	12	大蓮寺窯跡	窯跡	丘陵斜面	古墳、奈良
4	安養寺中囲瓦窯跡	窯跡	丘陵斜面	奈良、平安	13	燕沢公園窯跡	窯跡	丘陵斜面	古墳、奈良
5	安養寺囲瓦窯跡	窯跡	丘陵斜面	平安	14	善応寺横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
6	二の森遺跡	散布地	丘陵斜面	平安	15	善応寺東横穴墓群	横穴墓	丘陵斜面	古墳
7	二の森窯跡	窯跡	丘陵斜面	平安	16	燕沢遺跡	散布地、集落、寺院	丘陵	縄文、弥生、古墳、奈良、平安
8	神明社裏遺跡	散布地	丘陵	奈良、平安	17	吉沢遺跡	散布地	丘陵	平安
9	神明社窯跡	窯跡	丘陵斜面	奈良、平安	18	小鶴遺跡	散布地	自然堤防	平安

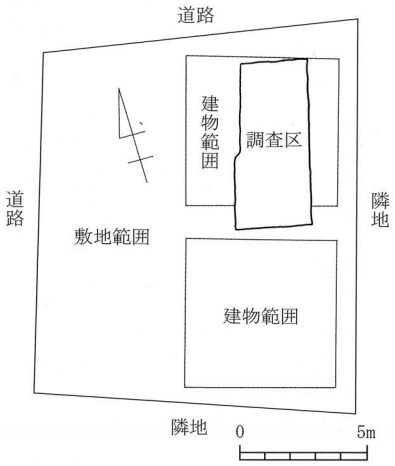
第47図　遺跡の位置と周辺の遺跡

２　調査に至る経過と調査方法

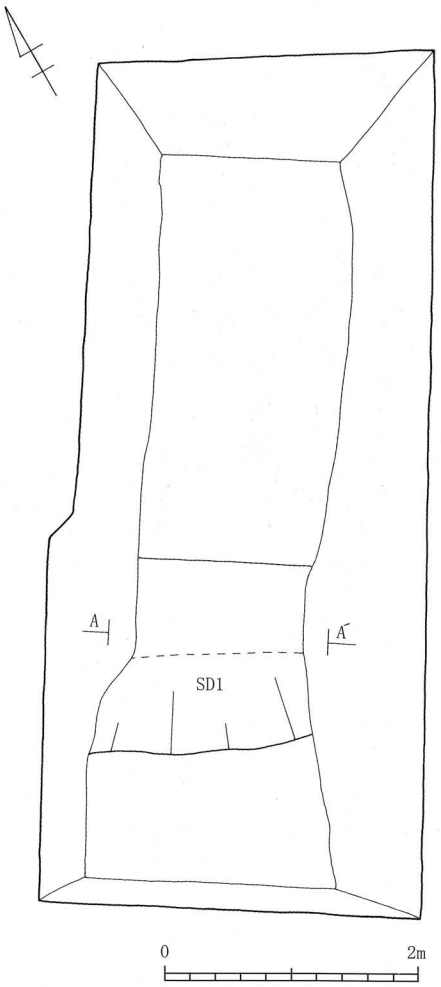
今回の調査は、平成20年９月18日付けで地権者より提出された、賃貸住宅の建築工事に係る「埋蔵文化財の取扱いについて（協議）」（H20教生文第183－21号）に基づき実施した。なお発掘届は、調査終了後に平成20年12月18日付けで提出された（H20　教生文第184－243号）。建物建築予定地（２棟分）に対し、東西３m×南北５mの調査区を南北２箇



第48図　調査地点の位置



第49図　調査区配置図



第50図　遺構配置図

所に設定した。まず、北側の調査区で重機により盛土およびⅠ・Ⅱ層を掘削した。その後南側へ２ｍ拡張したところ、溝跡の南側立ち上がりが確認されたため、人力により遺構検出作業を実施し、調査区は１箇所のみとした。溝跡の堆積土は、安全面を考慮し部分的に掘り下げを行い、堆積土６層までを確認した。

3　遺跡の位置と環境

小鶴城跡は、後背湿地に突き出した舌状丘陵に立地する。かつて、城域の南側一帯は小鶴沼が広がっていたといい、その南を東西に小鶴川が流れていた。しかし小鶴沼は、江戸時代中期に大部分が水田化されている。城の西側には、戦国期の幹線道路である「東街道」が通っていたと考えられている。城の頂部の標高は約16mで、周囲の水田との比高差は約11mである。これまでの発掘調査では、主に城の北東部および北西部における堀跡が確認されている。特に北東部では、上幅６ｍ以上、深さ2.6ｍと大規模なものであることが判明している。

4　基本層序

基本層は、1.3～1.4mの盛土直下でⅠ～Ⅴ層を確認した。Ⅰ・Ⅱ層は、現代および近世頃の耕作土である。

5　発見遺構と出土遺物

Ⅲ層上面で溝跡１条を検出した。遺物はⅡ層中より、近世の染付皿１点が出土した。

１）溝跡

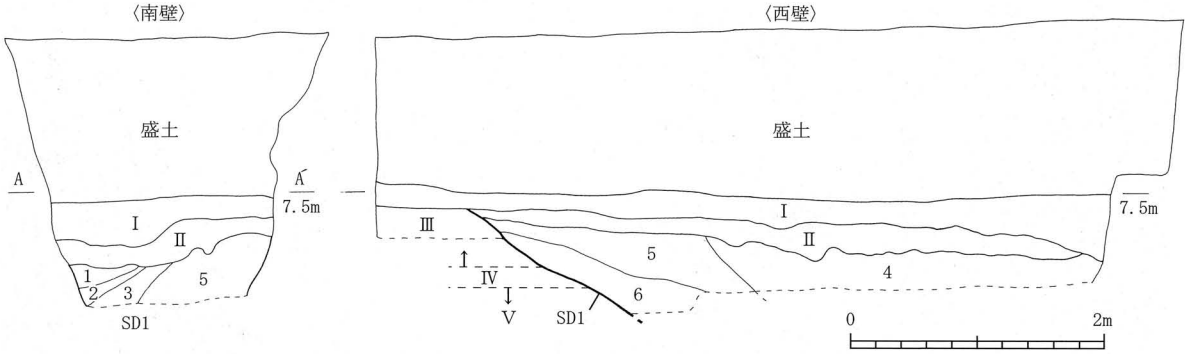
ＳＤ１溝跡　掘り込み面はⅢ層上面である。調査区やや南寄りの箇所で、溝跡の南側立ち上がりが確認された。東西方向に延びる溝跡である。規模は、幅4.8m以上、深さ60cm 以上である。堆積土は６層に細分される。遺物は出土していない。

2）出土遺物

遺物は、Ⅱ層より出土した肥前産の染付皿１点のみである。年代は18世紀後半代と考えられる。

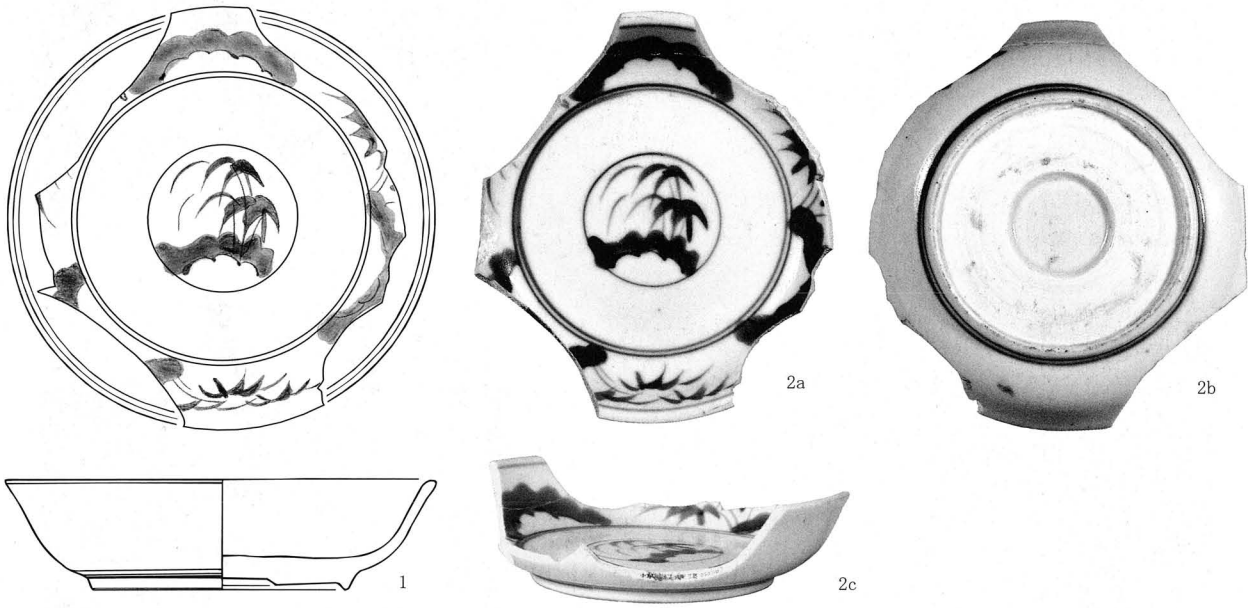
6　まとめ

今回検出した溝跡は、小鶴城北側における堀跡の一部と考えられる。堀の成立年代を示す遺物の出土はないが、埋没年代については、Ⅱ層中より出土した染付皿の年代から、18世紀後半以前と考えられる。



基本層	土　色		土　性	備　考
Ⅰ	10YR4/1	褐灰色	シルト質粘土	現代耕作土。ビニール等を含む。
Ⅱ	10YR5/1	褐灰色	シルト質粘土	近世耕作土か。
Ⅲ	10YR2/3	黒褐色	シルト質粘土	径1～10mm の凝灰岩粒をやや多量に含む。
Ⅳ	10YR4/6	褐色	砂質シルト	径1～10mm の凝灰岩粒を少量含む。
Ⅴ	10YR5/8	黄褐色	砂質シルト	
層　位	**土　色**		**土　性**	**備　考**
SD1－1	10YR4/1	褐灰色	シルト質粘土	シルト質粘土（10YR4/6）を径1cm の粒状に少量含む。
2	10YR4/6	褐色	シルト質粘土	
3	10YR4/1	褐灰色	シルト質粘土	炭化物粒を少量含む。
4	2.5Y5/4	黄褐色	シルト質粘土	シルト質粘土（10YR3/3）を径2～5cm のブロック状にやや多量に含む。鉄分を多量に含む。
5	10YR5/4	にぶい黄褐色	シルト質粘土	シルト質粘土（10YR3/3）との互層。径3～5cm の円礫を少量含む。自然堆積層か。
6	10YR5/8	黄褐色	シルト質粘土	下部にシルト質粘土（10YR3/3）を径5～15cm のブロック状に少量含む。鉄分を含む。

第51図　南壁・西壁断面図

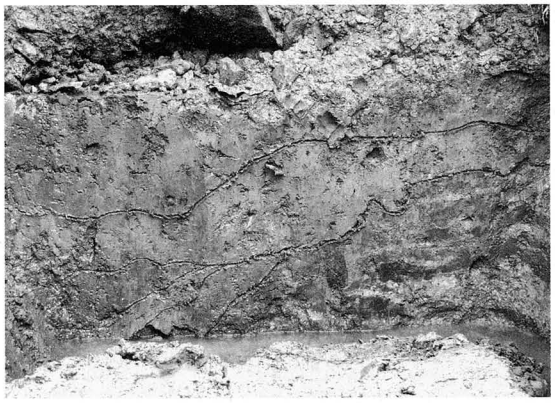


図中番号	登録番号	出土地点			分類		法量（cm・g）			特徴・備考（産地・釉薬・文様・時期・その他）	写真図版
		基本層	遺構名	遺構層	種別	器種	器高・長	口径・幅	底径・重		
1	J-1	Ⅱ層			磁器	皿	3.6	13.7	8.1	肥前　染付　笹文　18c後　蛇ノ目凹高台	2

第52図　出土遺物実測図（遺物写真図版含む）

1　SD１溝跡掘削状況（南東から）

2　拡張前SD１溝跡検出状況（北から）



3　拡張前調査区南壁（北から）

4　SD１溝跡断面状況（東から）

5　調査区全景（北から）

図版34　調査区全景・SD1溝跡

Ⅷ　与兵衛沼窯跡隣接地発掘調査報告書

1　調査要項

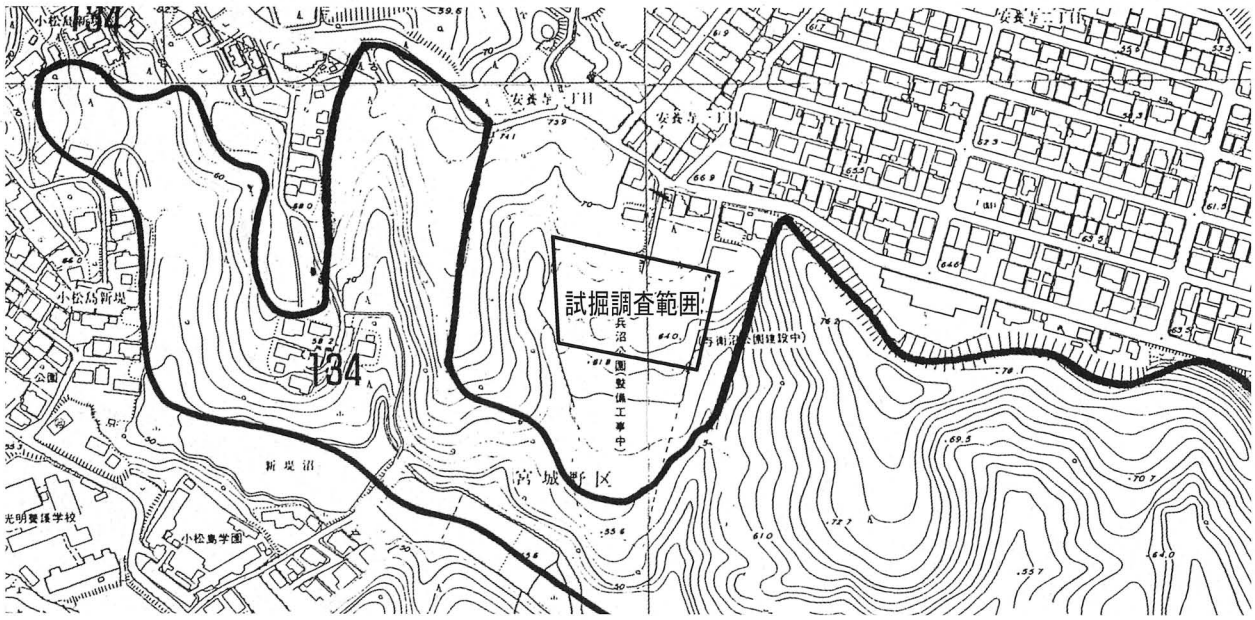
遺　跡　名	与兵衛沼窯跡（宮城県遺跡番号01134）
調 査 地 点	仙台市宮城野区蟹沢地内
調 査 期 間	平成20年９月８日～９月12日
調査対象面積	5,300㎡
調 査 面 積	350㎡
調 査 原 因	公園整備
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査係
担 当 職 員	主査　渡部　弘美　　主事　大久保　弥生

2　調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成11年９月８日付けで仙台市建設局公園課長より提出された与兵衛沼公園整備工事に係る協議書（教生文H11第7－22）に基づき実施された、窯跡等の有無の確認を目的とした試掘調査である。試掘調査の結果により、工事が埋蔵文化財に影響がある場合は、確認調査を実施する旨を回答した。整備予定地に11箇所の調査区を設定し、平成20年９月８日に調査を実施した。

3　遺跡の位置と環境

与兵衛沼窯跡は、仙台市北部の青葉区新堤、宮城野区蟹沢に所在し、ＪＲ仙台駅から東へ約2km の地に位置している。遺跡は、仙台市西部から派生する台原・小田原丘陵の南斜面に位置している。窯跡は、与兵衛沼の北岸斜面、標高50～65mに確認されている。遺跡の規模は、東西約1km にわたっており、奈良・平安時代の一大窯業地である。出土遺物には、偏行唐草文軒平瓦や細弁蓮華文軒丸瓦があり、多賀城や国分寺、国分尼寺に供給されている。



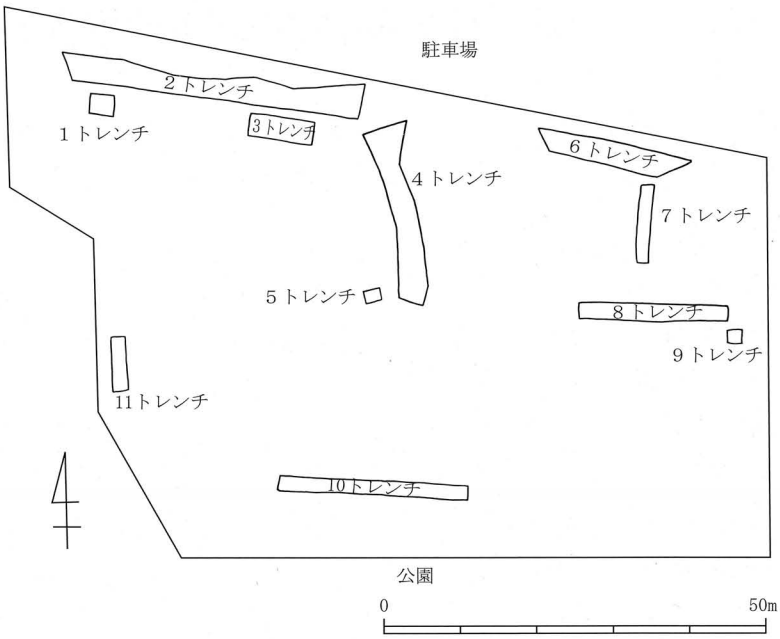
第53図　調査地点の位置

本調査地点は、遺跡範囲の中央北側の遺跡隣接地にあたり、現在は公園として整備されている。

4　調査の概要

当調査地点の東西では、古代の窯跡が多数発見されており、今回の調査地点でも窯跡や工房跡等の発見が予想されたが、すべての調査区で遺構・遺物は発見されなかった。また、その周辺で遺物の採集もされなかった。調査区は、掘削すると湧水が激しく、地盤が非常に不安定である。

この調査により、公園周辺の地形は、当初の整備によってかなり改変されていることがわかり、今回の公園整備工事による埋蔵文化財への影響はないと判断した。

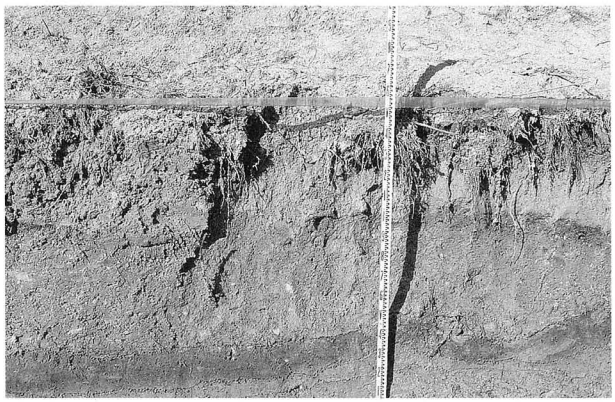


第54図　調査区配置図

＜参考文献＞
仙台市史編さん委員会　1995『仙台市史　特別編２考古資料』

1　1トレンチ（北から）

2　2トレンチ（南東から）



3　2トレンチ北壁

4　6トレンチ（南西から）

図版35　調査区全景・断面状況

報告書抄録

ふりがな	やまぐちいせきほか
書名	山口遺跡他
副書名	発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第345集
編著者名	主濱光朗　鈴木隆　加藤隆則　森田義史　大久保弥生　佐藤正弥　熊谷敏哉
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671　宮城県仙台市青葉区国分町３丁目７－１　電話　022-214-8894
発行年月日	平成21年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
山口遺跡（やまぐち）（第17次）	仙台市太白区富沢三丁目（せんだいしたいはくくとみざわ）103-57の一部	04100	01178	38°13′2″	140°51′47″	2007.11.26 2007.11.30	24㎡	個人住宅建築
山口遺跡（やまぐち）（第18次）	仙台市太白区富沢三丁目（せんだいしたいはくくとみざわ）103-57	04100	01178	38°13′2″	140°51′47″	2007・11・26 2007・11・30	25㎡	個人住宅建築
陸奥国分尼寺跡（むつこくぶんにじあと）（第12次）	仙台市宮城野区宮千代（せんだいしみやぎのくみやち）一丁目（よ）2-1,2-11,2-14,2-16,2-17	04100	01020	38°15′10″	140°54′36″	2008・4・30 2008・5・30	217㎡	共同住宅建築
四郎丸館跡（しろうまるたてあと）（第３次）	仙台市太白区四郎丸字戸ノ内（せんだいしたいはくくしろうまるとうち）93-1,93-2,93－51の各一部	04100	01240	38°11′22″	140°55′4″	2008・5・28 2008・6・16	140㎡	共同住宅建築
富沢遺跡（とみざわ）（第142次）	仙台市太白区長町南（せんだいしたいはくくながまちみなみ）一丁目 209－8地先	04100	01369	38°13′21″	140°52′44″	2008・6・3 2008・6・27	65㎡	共同住宅建築
沖野城跡（おきのじょうあと）（第４次）	仙台市若林区沖野七丁目（せんだいしわかばやしくおきの）303-3,303-5,303-6の一部,303-18	04100	01234	38°13′45″	140°55′3″	2008・9・16 2008・9・17	67.5㎡	宅地造成工事
小鶴城跡（こづるじょうあと）（第３次）	仙台市宮城野区新田三丁目（せんだいしみやぎのくしんでん）238他	04100	01194	38°16′50″	140°55′51″	2008・10・27 2008・10・29	21㎡	賃貸住宅建築
与兵衛沼窯跡（よへえぬまかまあと）	仙台市宮城野区蟹沢地内（せんだいしみやぎのくかにさわ）	04100	01134	38°17′7″	140°53′54″	2008・9・8 2008・9・12	350㎡	公園整備

所収遺跡名	種　　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山　口　遺　跡 (第17次)	集落跡・水田跡	弥生～中世	溝跡、土坑、ピット	陶磁器、木製品	
山　口　遺　跡 (第18次)	集落跡・水田跡	弥生～中世	溝跡、土坑、ピット	土師器	
陸奥国分尼寺跡 (第12次)	寺院跡	奈良・平安	竪穴住居跡、溝跡、土坑、ピット	瓦、土師器、須恵器	
四郎丸館跡 (第３次)	方形周溝墓・集落跡・城館跡	古墳・平安・中世	溝跡、土坑、井戸跡、ピット	土師器	
富　沢　遺　跡 (第142次)	包含地・水田跡	旧石器～近世	溝跡、土坑、性格不明遺構	須恵器	
沖　野　城　跡 (第４次)	城館跡	中世	溝跡	陶磁器、瓦	
小　鶴　城　跡 (第３次)	城館跡	中世	溝跡	磁器	
与兵衛沼窯跡	窯跡	古代・近世	なし	なし	

仙台市文化財調査報告書第345集

山口遺跡他

発掘調査報告書

2009年３月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町三丁目７－１
文化財課　TEL 022（214）8894

印刷　株式会社　建設プレス
仙台市青葉区折立三丁目2－10
TEL 022（302）0177